

第二部

作品論

第八章

『タイタス・アンドロニカス』 *Titus Andronicus*

Titus Andronicus において、「年老いた私の慰め」“The cordial of mine age” (I.i.169)であり、「私の魂より大事な」“dearer than my soul” (III.i.103)存在である Lavinia を自らの手で刺殺する Titus に対して、Saturninus が「何と
いうことをしたのだ、非道な、無慈悲な」“What hast thou done, unnatural and unkind?” (V.iii.48)と叫ぶ。Titus の行為はまさしく unnatural にして unkind である。Rome の徳を体現する“Pius” (I.i.23)と呼ばれた Titus が何故そのような nature に反する行為に及ぶのであろうか。nature の意味を吟味することにより、その問題を考察する。

1

まず nature の意味とその背後にある自然観について見ておきたい。nature という語はラテン語の natura に由来し、その natura はギリシャ語 physis の訳語である。また *OED* は nature の語源に The native English word is kind n. と記述しているように、ラテン語の natura に相当する固有の英語は kind である。更に *OED* の kind 3. a. の項に The character or quality derived from birth or native constitution; natural disposition, nature. (Common down to c 1600; in later use rare, and blending with sense 4.) とあり、4. a. Nature in general, or in the abstract, regarded as the established order or regular course of things (rerum natura). Rarely with the. Freq. in phr. law or course of kind. とある。kind は勿論形容詞にも用いられる。physis について、廣川洋一氏は全自然、自然万有、自然総体を意味する physis を最初使用したのは Homer であり、自然全体を表す panta は Heraclitus や Anaximenes が用いており、また cosmos という語があり、自然全体を意味する panta と cosmos が前6世紀後半に、physis が半世紀ほど遅れて使用されたと述べ、更に Anaximenes の「空気である私たちの魂が私たちをしっかりと掌握しているのと同じように、氣息と空気が宇宙世界全体(コスモス)を包み囲んでいる」という言葉には、自然世界 (macrocosm) と人間 (microcosm) の対応関係が見られることを指摘している¹⁾。

また T. McAlindon によれば、ルネッサンス時代は宇宙の構造について活発に論じられ、それと共に人間の本性 (nature of mankind) の研究がなされ、それが宇宙という文脈の中で行われたのである。人間は小宇宙 (microcosm) と呼ばれ、大宇宙 (macrocosm) と同じ物質で構成され、同じ原理で作用し、両者は緊密な関係があると見做されたのである。更に Heraclitus と Pythagoras の理論から Empedocles が nature は Love と Strife, sympathies と antipathy によって支配されているとし、そこから世界が concordant discord, discordant concord の世界であるという考えが生じ、相対立する二者から宇宙が成り立ち、また対立する二者が相互に依存する nature の構図ができたのである。それが生殖の自然法則の世界に投影され、中世、ルネッサンスの偉大な著述家、特に Shakespeare の作品に男女関係、夫婦関係、家族関係が宇宙の中心となっているという²⁾。universal nature が相対立する2つの存在であるということは human nature も同じであるということの意味する。そして Rome は帰属意識の強い民であり、*Titus Andronicus* においても愛国心、家族愛、兄弟愛が強調され、それを端的に表す語が nature であり、kind である。

2

Rome について Jonathan Bate は The city prided itself on not being barbaric; the word civilized comes from civilis, which means 'of citizens, of the city', and Rome was the city.と云っている³⁾。では *Titus Andronicus* における Rome はどのような状態なのであろうか。先帝が崩御し、皇子兄弟が皇帝の地位を争っている。T. McAlindon が Rome is at war with itself; the major enemy is within. と述べているように、Rome は内紛状態であり、大敵は内にある⁴⁾。そこへ元老院に召還された Titus がゴート族 (Goths) に勝利をおさめて凱旋してくる。Titus はまず Rome に勝利の報告をし、次いでこの戦いのため戦死した息子たちについて、

Titus, unkind and careless of thine own,
Why suffer'st thou thy sons unburied yet
To hover on the dreadful shore of Styx?

(I.i.86-88)

己の一族へ無頓着で、肉親の情を欠いたタイタスよ、
何故お前は息子たちを埋葬もせずに、
恐ろしい冥土の川辺にさ迷わせているのだ。

と言って自らを責める。‘unkind’について Bate は *lacking in consideration due to family (kind)* と注釈を施し⁵⁾、Maurice Charney は *It is unnatural (‘unkind’) to delay burial and let the souls of the departed hover on the Styx,...* と述べている⁶⁾。また Charles Wells は *The passage emphasises the importance of the kinship bond in Roman thinking, whereby to be ‘unkind’ is to be impious, neglectful of one’s duty towards family and the gods.* と述べているように⁷⁾、‘unkind’は重要な意味を有している。しかしこのことが Rome の内部の *barbarism* の存在を顕在化させることになる。

Lucius は戦死した兄弟の鎮魂のため、捕われの身のゴート族の王妃 Tamora の長男 Alarbus を生け贄にするよう Titus に要求する。Tamora は国王や国家のために戦うことがあなたにとって「忠孝」“*piety*” (I.i.118) であるならば、自分の息子も同じことであると、必死に Titus の慈悲に訴えて息子の命乞いをする。しかし Titus は「殺された兄弟たちを弔うためにこの者たちは犠牲を求めている」“*for their brethren slain / Religiously they ask a sacrifice :*” (I.i.126-127) と答えて、Alarbus の身柄を Lucius の手に引き渡す。Bate は *Religiously they ask a sacrifice* について *Rome prided itself on not allowing human sacrifice; this is a first sign that the city is becoming barbaric in its practices; it renders religiously (intended to suggest ‘out of piety to the dead’) ironic.* と注を施しているように⁸⁾、Titus の言葉によって Rome における *barbarism* の存在が明白になる。必死の願いも空しく Alarbus が処刑場へ引立てられて行くのを見て、Tamora は「ああ、残酷で、不信心で、敬虔なこと」“*O cruel, irreligious piety!*” (I.i.133) と *oxymoron* を用いて、怒りに満ちた嘆きの言葉を発する。Titus は Rome のためにあげた数々の偉大な功績の故に “*Pius*” (I.i.23) と呼ばれる。Pius について Jonathan Bate は *embodying the virtues of the legendary founder of Rome, Virgil’s ‘Pius Aeneas’: Religious; devoute; godly; mercifull; benigne; that beareth reverent love towarde his countrei and*

parentes; Naturall to his kinsefolke (Cooper).と注をつけている⁹⁾。また Maurice Charney も‘Pius’ indicates typically Roman values: devotion to duty, country, home and family. It represents some combination of morality, patriotism, love of family and doing the right thing.と述べているように¹⁰⁾、Rome の美德を表す言葉である。そして Tamora の言葉によって piety の意味が dubious になると Maurice Charney は言うように¹¹⁾、Rome の本質が見えてくるのである。

Tamora の息子の Chiron も「スキチア人もこの半分だって野蛮ではなかったろう」「Was never Scythia half so barbarous!”(I.i.134) と言い、Rome の野蛮性が強調される。そこへ Lucius が犠牲の儀式を終え、戻ってきて、Titus に次のように報告する。

See, lord and father, how we have perform'd
Our Roman rites: Alarbus' limbs are lopp'd
And entrails feed the sacrificing fire,
Whose smoke, like incense, doth perfume the sky.

(I.i.145-148)

ご覧ください、父上、我らがローマの儀式を
執り行いました。アラーバスの手足は切断し、
内臓は生贄の火を燃え上がらせ、
その煙は香の煙のように昇って大空をかぐわしくしています。

Alarbus の手足を切断し、内蔵を生け贄の火に投ずることが Roman rites である。Charles Wells は limbs are lopp'd という語調には軽薄さが感じられ、Roman nobility と Gothic brutality との違いが見えにくくなっていると述べている¹²⁾。

Saturninus と Bassianus の2人が皇位を争っているなか、人民の代表として、Titus の弟であり、護民官である Marcus は Titus に皇帝の候補に立つよう要請する。しかし伝統を尊重する昔気質の Titus はその要請を斥け、先帝の長子 Saturninus を皇帝にするよう護民官に推挙する。その際 Titus は Saturninus が正義を行使すると信じて、

Lord Saturnine, whose virtues will, I hope,
Reflect on Rome as Titan's rays on earth,

And ripen justice in this commonweal—

(I.i.229-231)

サターナイナス殿下、その徳が火の神タイタンが
大地を照らすように、ローマを照らし、この国に
正義を実らせてくれますよう。

と言うが、Rome から justice は失われつつあり、後に Titus は繰り返し、justice の語を口にする事となる。Saturninus は恩義を感じて、Titus の息女 Lavinia を妃にすると言う。

しかし Lavinia は Bassianus と相思相愛の仲であり、そのことは Titus も承知しているはずであるが、Saturninus の好意の言葉に感謝して、承諾する。Bassianus は Titus に Lavinia を自分の婚約者だと宣言し、Marcus も「各人にその分をというのが我がローマの正義です。この皇子がご自分のものを手に入れられるのは正義に適っています」‘*Suum cuique is our Roman justice; / This prince in justice seizeth but his own.*’ (I.i.284-285) と言って、Bassianus を支持し、他のものも Bassianus を擁護する。その場を去った Bassianus と Lavinia を Titus は連れ戻そうとし、それを阻止しようとする息子の Mutius を刃にかける。Titus にとって、Marcus たちの行動は Titus 一門にとって、不名誉なものであり、Marcus は unworthy brother であり、息子たちは unworthy sons なのである。したがって Titus は自分の意に逆らって命を落とした Mutius の亡骸を Andronicus 家の墓に埋葬するのを許そうとしない。皇子兄弟の対立に続いて、Rome の名門 Andronicus 家の父とその一族が対立する。Titus は皇帝 Saturninus にあくまで忠実であろうとする。Titus の皇帝への盲目的な忠誠心が Andronicus 家の悲劇の原因であり、Rome の悲劇の元となる。Marcus は Titus の頑な態度に「兄上、これは非道です」‘*My lord, this is impiety in you;*’ (I.i.360) と impiety の語をもって非難し、あくまでも Mutius の行為は正しく、Andronicus 家の墓に埋葬することを主張する。Marcus は兄弟の情に訴えて、「兄上、そう呼びして、肉親の情が訴えますが」‘*Brother, for in that name doth nature plead—*’ (I. i. 375) と言い、息子は「父上、そう呼びして親子の情がお願いしますから」‘*Father, and in that name doth nature*

speak' (I.i.371)と父子の情に訴えて Mutius の埋葬の許可を求める。この nature についても、Charles Wells が Marcus and Martius join in appealing to the ties of blood, rejection of which violates the natural affections which hold society together. と述べているように¹³⁾、重要な意味をもっているのである。その nature に逆らってあくまで Titus は拒否しようとする。Marcus は「あなたはローマ人です、野蛮なことはおやめください」“Thou art a Roman, be not barbarous.” (I.i.383)と Roman の精神に反する barbarous の言葉をもって責める。後に Titus は紛れもなく barbarous な人間となり、Tamora に息子たちの人肉パイを食わせることになる。

Saturninus は、Bassianus が Lavinia を奪ったことを内心喜び、容色に心を奪われ Tamora を妃に迎える。その王妃となった Tamora について Aaron は

Upon her wit doth earthly honour wait,
And virtue stoops and trembles at her frown.

(II.i.10-11)

彼女の才に地上の名誉はかしずき

彼女が眉をひそめれば徳は身をかがめ、震えおののく。

と独白する。virtue stoops について Bate が A bald statement of Tamora's power to pervert justice. と注しているように¹⁴⁾、barbarous Tamora が Rome の権力の中枢に入り込むことにより、barbarism が完全に Rome を支配することになる。そのために Rome の牧歌的な森も姿を変えるのである。そしてその犠牲となるのが Bassianus と Lavinia であり、Bassianus の殺人犯に仕立てられる Quintus と Martius である。

3

T. McAlindon は kind について Shakespeare's tragedies could be said to constitute a continuing paradoxical pun on the word 'kind' (signifying both natural and living). Kind, or nature, is kindly, compassionate, binding, creative, as the word implies and many assume; but nature is also pitiless, divisive, violent. と述べている¹⁵⁾。「年老いた私の慰めである」Lavinia を慈しみ育ててくれた「優しいローマ」“Kind Rome”(I. i. 168)が Lavinia をこの上なく不幸にもする。kind

Rome の牧歌的で、平和な森が pitiless, divisive, violent で、恐ろしい場所となるのである。

Aaron は横恋慕する Demetrius と Chiron に Lavinia を陵辱する策を授けて、森のことを次のように言う。

The forest walks are wide and spacious,
And many unfrequented plots there are,
Fitted by kind for rape and villainy.

(I.i.614-616)

森の道は広く、大きい、
強姦や悪事を行うための自然がこしらえた
人の行かない多くの場所があります。

plots について Bate は spots, which the next line suggests are the natural place ('Fitted by kind') for fulfilling villainous complots. と注釈をつけている¹⁶⁾。更に Aaron は「森は冷酷で、恐ろしく、聴覚をもたず、無情なものだ」"The woods are ruthless, dreadful, deaf and dull:" (I.i.628) とも言う。Rome の森は牧歌的な存在でなく、kind (nature) が rape と villainy をするのに相応しい場所として造った存在なのである。森について Tamora がロマンチックな言葉で語るが、しかしそれは Aaron との不義密通にふさわしい場所なのである。Tamora が息子たちに Bassianus を殺させたとき、Lavinia は

Ay, come, Semiramis, nay, barbarous Tamora,
For no name fits thy nature but thy own.

(II.ii.118-119)

さあ、いらっしゃい、セミラミス、いえ、野蛮人タモラ、
その名前ほどお前の本性にふさわしいものはないから。

と言うが、まさしく Tamora の nature は barbarous である。Titus が barbarous Tamora と Aaron とを捕虜として Rome に連れて来た。このことが barbarism を Rome に持ち込んだと言えるであろう。

Lavinia の真相を知った Titus が

Lavinia, wert thou thus surprised, sweet girl,

Ravished and wronged as Philomela was,
Forced in the ruthless, vast and gloomy woods?

(IV.i.51-53)

ラヴィニア、お前もフィロメラのように、
不意に襲われ、手篋めにされ、辱められたのか。
無慈悲な、広々とした、陰気な森で無理やりに。

と言っているように、Rome の森は ruthless, vast and gloomy である。Titus は皇帝との和解のために開いた狩猟の催しが Bassianus や Lavinia を不幸に追いやったことを知り、「ああ、あそこで狩をしなければよかった」“O, had we never, never hunted there!” (IV.i.56) という後悔の言葉を発し、森は、「人殺しや、陵辱のために造化の自然によって造られた」“By nature made for murders and for rapes” (IV.i.58) と言う。Titus にとって nature は悪に加担する存在ではないのである。

Marcus もまた、

O, why should nature build so foul a den,
Unless the gods delight in tragedies?

(IV.i.59-60)

ああ、何故造化の自然はあのような忌まわしい巣窟を
こしらえるのか。神々が悲劇を喜ばれるのでなければ。

と言い、神々と nature への不信の念を口にするのである。更に Titus もラテン語でもって

Magni dominator poli,
Tam lentus audis scelera, tam lentus vides?

(IV.i.81-81)

天の支配者よ、あなたは罪を聞くのがこのように遅く、罪を
見るのがこのように遅いのか。

(Ruler of the great heavens, are you so slow to hear crimes, so slow to see?) と言い、悪の横行を許す神々への不満を漏らすのである。

このように Rome の森では悪が横行し、自然も悪に加担するのである。そ

の結果 Bassianus は殺害され、Lavinia は陵辱され、Quintus と Martius は Bassianus 殺しの犯人に仕立てられるのである。蛮行がその悪の限りを尽くす森の barbarism と平行して、Aaron が virtue stoops.と言ったように、Rome 全体が barbarism の度を強めて行くのである。

4

Titus は処刑場に引かれていく息子の Quintus と Martius を減刑してくれるよう、護民官と元老院に自分がこれまで Rome に尽くした功績を縷々述べ、必死に嘆願するが、無視される。そこへ Lucius が登場し、弟たちを救おうとした廉で、Rome を永久追放になったと告げると、Titus は

O happy man, they have befriended thee!
 Why, foolish Lucius, dost thou not perceive
 That Rome is but a wilderness of tigers?
 Tigers must prey, and Rome affords no prey
 But me and mine. How happy art thou then
 From these devourers to be banished.

(III.i.52-57)

ああ、幸せな男だ。あいつらはお前に親切を施したのだ。
 なあ、愚かなルーシアス。ローマは虎がうろつく荒野だと
 お前にはわからないのか。虎は餌食を求めるものなのだ。
 そしてローマはわしとわしの一族しか餌食として与えるものを
 持たないのだ。だから、お前はなんという幸せものだ、
 こんな野獣のようなやつらから追放されるとはな。

と Rome がいまや city ではなくて、a wilderness of tigers であるとはっきり言う。Aaron や Tamora はまさしく tigers である。Bate が注を施しているように、civilization (associated with the city, especially Rome) と wilderness (where the law of tigers reigns) の区別が消滅しているのである¹⁷⁾。悲嘆に暮れる Titus は「自分の魂より大事な」存在である Lavinia がその手足を切断され、舌を切り取られた姿を目にして愕然とする。Titus、Marcus、Lucius と Lavinia が嘆き悲しんでいるところへ Aaron が登場し、Saturninus の言葉として、だれ

か片腕を差し出せば、Quintus と Martius の命を助けると告げる。Titus は吉報だとし、喜んで自分の腕を切って欲しいと言う。Marcus も Lucius も互いに相手を庇い、自分の腕を差し出すと争う。一計を案じた Titus は Marcus の腕を差し出すということに同意した風を装い、Marcus と Lucius に斧を取りに行かせ、その間に自分の腕を Aaron に切らせるのである。Aaron は Titus の片腕を持ち去る際に、息子たちが戻るのを待つがよいと言いながら、脇台詞で彼らの生首をね、と言う。Aaron にとって善行を行うのは愚人であり、慈悲を求めるのは善人だと言い、Titus 達が悲嘆に打ちひしがれた様を見て喜ぶのである。深い悲しみに気も狂わんばかりの Titus に対して常に沈着冷静である Marcus は「ですが、理性であなたの嘆きを抑えていただきたい」“But yet let reason govern thy lament.”(III.i.219)と諫めると、Titus は reason の意味を変えて、次のように答える。

If there were reason for these miseries,
Then into limits could I bind my woes.
When heaven doth weep, doth not the earth o'erflow?
If the winds rage, doth not the sea wax mad,
Threatening the welkin with his big-swollen face?
And wilt thou have a reason for this coil?
I am the sea. Hark how her sighs doth blow.
She is the weeping welkin, I the earth.
Then must my sea be moved with her sighs,
Then must my earth with her continual tears
Become a deluge overflowed and drowned,
For why my bowels cannot hide her woes,
But like a drunkard must I vomit them.

(III.i.220-232)

これらの打ち続く不幸に道理でもあるなら
私の悲しみも限界の中に閉じ込めもできよう。
天が涙を流せば、大地は水であふれるではないか。

風が怒れば、海は狂って膨れ上がった顔で
 天を脅すではないか。
 で、お前はこの騒動の理由を知りたいのか。
 わしは海だ。娘のつく溜息が激しいのを聞け。
 娘は涙を流す天であり、わしは大地なのだ。
 だから、わしという海は娘の溜息で騒がずにはいられないのだ。
 わしという大地は娘の絶えず流す涙で
 洪水となり、水浸しになり、溺れないわけにはいかないのだ。
 わしの腹は娘の悲しみを隠し通せずに、
 酔っ払いのように、それを吐き出さずにはいられないのだ。

このように次々と堪え難い不幸に見舞われる Titus はこれらの出来事を人間界の事象としてではなく、宇宙的な事象として考えないわけにはいかないのである。ここには古代ギリシャ以来の人間 (microcosm) と自然 (macrocosm) との呼応関係が見られる。事件は単に個人のレベルの問題を越えた、大自然をも巻き込む大問題なのである。coil について Maurice Charney は a disturbance of cosmic magnitude と述べているように¹⁸⁾、Titus の激しい苦悩は人間界に収まらず、宇宙的な広がりを見せる。Lavinia のため息は嵐に思え、Titus は嵐のために荒れ狂う海であり、涙を流す Lavinia は豪雨を降らす空であり、Titus は洪水を起こしている大地となる。しかし Titus はまだ自分の腕と引き換えに、息子たちの命が救われると信じているのか、呪いの言葉を吐かない。そこへ使者が息子たちの生首と Titus の腕を持ってくる。ことここに至ってさすがに冷静な Marcus も「これらの悲惨さは耐え得るものではない」「These miseries are more than may be borne.」(III.i.244) と嘆き、もはや Titus の悲しみを押さえよとは言わない、何故黙っているのかと Titus に問う。それに対して Titus は“Ha, ha, ha!” (III.i.264) と笑う。場違いの Titus の笑いに Marcus は「何故笑うのですか。場違いです」「Why dost thou laugh? It fits not with this hour.」(III.i.266) と厳しい口調で言う。Titus は今の気持ちを“Ha, ha, ha!”以外に表現する言葉を見いだすことができるだろうか。ここで Titus は初めて「どのようにして復讐の洞窟を探せばいいのだろうか」「...which way

shall I find Revenge's cave?" (III.i.276) と復讐を口にし、2人の息子の生首を見て、この復讐をするまでは幸福はないと考える。そして Lucius も Rome と Saturninus に復讐するために Goths で兵を上げることを誓い、wilderness of tigers と成り果てた Rome を後にする。

Lavinia の真相を知った Titus は

Ah, Rome! Well, well, I made thee miserable

What time I threw the people's suffrages

On him that thus doth tyrannize o'er me.

(IV.iii.18-20)

ああ、ローマよ。そうだ、そうだ、わしがお前を惨めにしたのだ。
あの時、わしが民衆の心を動かしてわしに横暴な振る舞いをして
しているあの男に票を投じさせたからな。

と言い、忘恩の仕打ちをする Saturninus を皇帝に推挙し、Rome をこのように惨めにした己の愚かさを嘆く。更に「あの邪悪な皇帝が正義の女神を船に乗せて運び出したかもしれない。そうすれば、親族諸君、いないものと諦めるしかないのかもしれない」“This wicked emperor may have shipped her hence, / And, kinsmen, then we may go pipe for justice.” (IV.iii.24-25) と言い、wilderness of tigers となった Rome から justice が去ったという認識を明確にする。

5

第4幕第3場において矢文を放たせる際、繰り返し出てくる言葉は justice である。Rome には Astraea (justice) は存在しないのである。Titus は「正義の女神アストライアは大地を去った。忘れるなよ、マーカス、女神は去ったのだ、逃げたのだ」“Terras Astraea reliquit: be you remembered, Marcus, / She's gone, she's fled.” (IV.iii.4-5) と言い、陸には justice が存在しないから、海に探すように一門のものに言いつける。更に他の者には下界の Pluto のもとに行って、justice に支援を乞うようにと言う。一方 Saturninus は Titus の矢文を見て、これは治安を乱すものであり、元老院を中傷するもので、injustice が Rome で行われていると公言するものだ、「サターナイナスが健康である限り、

正義は生きている」“...justice lives /In Saturninus' health,...” (IV.iv.23-24) ということを知らせてやると激怒する。しかし Titus の息 Lucius が Goths 軍を従えて Rome に攻め寄せてきたという知らせを聞くと、Saturninus は意気消沈し、民衆が愛しているのは Lucius であり、民衆は Lucius 追放が不当であると思っており、Lucius を皇帝に望んでいるのだと言って、自分の非を認めるのである。

講和のために Titus 邸で Saturninus と Lucius と会談することになる。Titus は Saturninus に故事を持ち出して、辱めを受けた娘を自らの手にかけた Virginius の行為が正当であったかどうかを問う。Saturninus は正当だと答えると、更に Titus はその根拠を尋ねる。それに対して Saturninus は辱めを受けた女は生き永らえるべきでなく、生きていれば、父の悲しみを日々新たにすからだと答える。その言葉を聞くや、Titus はまさしくその同じ理由によって、またその例に従って自分も同じことを行うのだと、次のように言いながら Lavinia を刺すのである。

Die, die, Lavinia, and thy shame with thee,
And with thy shame thy father's sorrow die.

(Viii.45-46)

死ね、死ね、ラヴィニア、おまえとともにおまえの恥も死ね。
そしておまえの恥とともにおまえの父の悲しみも死ぬのだ。

驚いた Saturninus は“*What hast thou done, unnatural and unkind?*” (Viii.47) と言う。「年老いた慰め」であり、「自分の魂より大事な」娘を自らの手で刃にかけることはまさに *unnatural* で *unkind* な行為であることは明白である。当時の自然観については前述したが、Schmidt はこの *unnatural* について 2) *contrary to the feelings of human nature, violating the first principles of nature, inhuman in the highest degree; used of persons:*の意味に該当するとしている。また *Hamlet* において亡霊が Claudius の兄王殺害を「やつの邪な、極悪非道の人殺し」“*his foul and most unnatural murder*” (I.i.25) であり、「人殺しはいかに斟酌しても極悪であるが、これは極悪、奇怪、非道なものだ」“*Murder most foul, as in the best it is, /But this most foul, strange and unnatural*” (I.i.27-28) と

言う。この unnatural について Harold Jenkins は The reiteration of this word (from 1.25) emphasizes the violation of the natural tie between kin. Its sense is also reinforced by strange. と注を付けているが¹⁹⁾、*Titus Andronicus* においても unnatural は unkind の語によって強められている。

しかし Saturninus は Virginius の行為を正当であると言ったのである。Titus は Lavinia の受けた真相を明らかにし、Tamora を刺殺する。怒った Saturninus が Titus を刺す。それを見た Lucius が「父が血を流しているのを息子が見ていられようか、目には目だ、悪事には死だ」“Can the son’s eye behold his father bleed?/There’s meed for meed, death for a deadly deed.” (V.iii.64-65) と言って Saturninus を刺す。

* * * * *

barbarism と対極をなす city であるはずの kind Rome は Saturninus と Bassianus による継承争いと、人身御供により barbarism と city との境界が曖昧になる。更に王妃となった barbarous Tamora と Aaron は Rome の大自然を悪が跳梁する場所にしてしまう。Rome は injustice によって蹂躪され、wilderness of tigers となる。その結果 Rome の徳の体現者である Pius Titus が unnatural で、unkind な行為に及んだ。しかし Titus をそのように追い詰め、justice を追放し、悪が跋扈する Rome にした張本人は Saturninus である。その Saturninus を「不当にも追放された」“unkindly banished” (V.iii.103) Lucius が成敗するのである。因みにこの unkindly について OED は c. Contrary to right feeling or conduct; improperly; ungratefully. *Obs.* という定義を与えている。動揺する人々に対して、Marcus がこの経緯を明らかにし、justice を喪失し、injustice の横行した Rome を再度団結した Rome に回復する施策を語らせて欲しいと言い、了解される。Lucius の行為が正当とされ、Lucius は皇帝に推挙されるのである。Lucius はそれに感謝の意を表明し、傷ついた Rome を癒す政治を行うと誓う。しかし Lucius はまず「肉親の情が私に悲しい仕事を課しているのですから」“For nature puts me to a heavy task.” (V.iii.149) と述べ、Titus への肉親の情を吐露する。今 Lucius の心を占めるのは nature である。unnatural で、unkind な Rome の状態を正し、Rome を本来の kind Rome に復

活するのが Lucius の役目なのである。

テキストの引用は Jonathan Bate, ed., *Titus Andronicus*, (The Arden Shakespeare) による。

- 1) 廣川洋一、「ソクラテス以前における自然概念」、上智大学中世思想研究会編、『古代の自然観』、創文社、1989年、pp.3-23.
- 2) T. McAlindon, *Shakespeare's tragic cosmos*, Cambridge U. P., 1991, p.3.
- 3) Jonathan Bate, ed., *Titus Andronicus*, (The Arden Shakespeare), Routledge, 1995, Introduction, p.5.
- 4) T. McAlindon, *op. cit.*, p.22.
- 5) Jonathan Bate, *op. cit.*, note.
- 6) Maurice Charney, *Titus Andronicus, Harvester New Critical Introductions to Shakespeare*, Harvester wheatsheaf, 1990, p.14.
- 7) Charles Wells, *The Wide Arch*, Bristol Classical Press, 1993, p.23.
- 8) Jonathan Bate, *op. cit.*, note.
- 9) Jonathan Bate, *ibid.*, note.
- 10) Maurice Charney, *op. cit.*, p.14.
- 11) Maurice Charney, *ibid.*, p.16.
- 12) Charles Wells, *op. cit.*, p.26.
- 13) Charles Wells, *ibid.*, p.24.
- 14) Jonathan Bate, *op. cit.*, note.
- 15) T. McAlindon, *op. cit.*, p.18.
- 16) Jonathan Bate, *op. cit.*, note.
- 17) Jonathan Bate, *ibid.*, note.
- 18) Maurice Charney, *op. cit.*, p.59.
- 19) Harold Jenkins, ed., *Hamlet*, (The Arden Shakespeare), Methuen & Co. Ltd., 1982, note.

第九章

『トロイラスとクレシダ』 *Troilus and Cressida*

この劇に登場する人物たちは Homer の *Iliad* で活躍する英雄像とはいささか趣を異にする。Shakespeare は Homer の描いた人物をなぞるようなことはしていないのである。名誉、価値、自然法等について登場人物たちに発言させて、その矛盾する言動の背後にある動機について観客が考えるように仕向けているのである。古代ギリシャ以来の伝統的な思想である位階論 (Degree) と自然法 (Natural Law) に関して理路整然と論が展開され、観客に極めて強烈な印象を与える。ところがこの両論とも竜頭蛇尾に終わり、論者の意図がきわめて不明瞭になる。しかし作品全体において大きな意味を有しているように思われる。Shakespeare の意図は奈辺にあるのかを考察するのが小論の目的である。

1

まず Ulysses の位階論 Degree (I. iii.5-135) から見てみよう。ギリシャ方全体に厭戦気分が蔓延している。Ulysses はこの事態の根本原因が「統帥権が蔑ろにされている」“The specialty of rule hath been neglected,” (I. iii.78) ことにあるとし、位階の他に身分、序列等の意味を有する degree の語を繰り返し用いて滔々と弁ずるのである。degree を無視すれば、身分の低いものも高いものも区別がつかなくなり、混乱をきたす。そして大自然に言及して、天体も、惑星も、地球も degree を、地位を守り、秩序を保っている。だから太陽は玉座につき、遊星の不正を正し、その威光が善にも悪にも及ぶ。大自然 (macrocosm) と人間界 (microcosm) には呼応関係があり、惑星どもがその秩序を乱せば、混乱が生じて、天変地異が起り、国家の安寧も乱される。また degree がなくなれば、長子の相続権、年長者の特権、王冠の特権が正当な位置を守れなくなる。更に degree がなくなれば、混乱が続き、体力のあるものが弱いものを支配し、力が正義となる。正と不正との区別がつかなくなり、その正と不正との絶え間ない争いで裁く正義も廢れる。将軍が一階級下の者から蔑ろにされると、また順にその者がその下の者から蔑ろにされ、それが

やがて嫉みという熱病になる、それが Troy を陥落できない原因だと Ulysses は説くのである。それを聞くと Agamemnon は病状のことはわかった、その治療法は如何と問う。Ulysses は我々首脳部を蔑ろにしている傲慢不遜な Achilles にこそ原因があると言うのである。そして Achilles の態度を非難する言葉が続く。頭脳明晰を自負する Ulysses は、Achilles から無視されて誇りを傷つけられているのである。これまでの戦功によって得た過去の名声を鼻にかけ、総司令部の指令を無視し、戦争は腕力がものをいうのだとする Achilles の傍若無人振りが他に影響を及ぼして、ギリシャ軍は統制がとれなくなり、弱体化していると主張する。しかし Ulysses は Achilles を戦闘に参加させる具体策を示すことはできない。

そこへ Aeneas が Hector の挑戦状をもって登場する。早速聡い Ulysses はこの挑戦状を利用することを思いつく。挑戦の相手が Achilles であることはすべての人の知るところであるが、籤に細工を施して、これまた傲岸不遜な Ajax を選出し、Achilles の鼻をあかそうと Ulysses は奸計を巡らせるのである。そうすれば、仮に一騎打ちで Ajax が破れても、Ajax より強い者がいるということになり、決してギリシャ方の恥になることはない。Ajax が勝てば Achilles の高慢の鼻をへし折ることができ、どちらに転んでも損はないのである。このように Ulysses の degree 論は意外な結末に落ち着く。Ulysses は当時の正統的な degree 論を弁じるが、彼の弁説は事態の解決に少しも寄与しないのである。

また Ulysses は無能な Agamemnon を誇張した言辞で神の如き人物に祭りあげるが、Achilles に対する非難に事寄せて、Patroclus による Agamemnon の真似を実際に演じて見せて、無能で、威厳のない Agamemnon の実体を結果的に暴露している。Ulysses は degree (高い身分の人) が面を付けて顔を隠せば、上下の区別がわからなくなると述べているが、Aeneas は当人を前にして、どなたが Agamemnon かと尋ねるように、総大将たる Agamemnon には全く威厳などないのである。Ulysses の言葉は額面通りに受け取るべきではないということを観客は悟るのである。

Ulysses は計画通りに Ajax を煽りたてて、Hector の挑戦を受けさせること

に成功する。しかし横柄な Achilles の鼻を折り、自分たちの指令に従わせることが Ulysses の意図であった筈であるが、決闘相手に選ばれただけで Ajax は戦う前から Hector と一騎打ちして勝利を取めた気分になり、ますます傲慢になるという皮肉な結果になる。

一方で Ulysses は Ajax の評判を話題に持ち出して、Achilles を奮起させ、何とかして戦に参加させようと腐心する。Bradshaw は、Ulysses は情報網を張り巡らせ、Achilles に対し情報を握っていることを明らかにし、Ulysses の位階論が Agamemnon と Nestor を操る計算された修辭的な演技であったが、time 論も Achilles を操る巧妙に計算された演技であることを指摘している¹⁾。人心掌握術を心得ている Ulysses の言動には、あらゆる手段を用いて相手を従わせ、実権を一手に掌握しようという下心が見える。

こうして人物たちの言葉を額面通りに取らず、少し割り引いて受け取るべきことを観客は知るのである。Bradshaw が言うように、Hector の自然法論の弁舌の場合と同様に、正統的な発言の内容と発言者との間の違和感を観客に意識させることである²⁾。それでは次に Hector の人物像を見てみよう。

2

第2幕第2場はこの戦争のそもそもの原因である Helen を引き渡しさえすれば、これまでのことは一切問わないというギリシャ方の Nestor からの申し入れについて語る Troy 方の御前会議の場である。

まず Hector は犠牲を払い、血を流すに値しない Helen を返すのが道理であると主張する。それに対して Troilus は Helen を守ることに名譽がかかっているのだから彼女を引き渡すのは反対だと主張する。当然 Helen の夫である Paris は Troilus の意見に賛成である。そこで Hector は2人の弟たちの反対の意見は皮相だとたしなめた上で、自然法を持ち出して次のように述べる。

Nature craves

All dues be render'd to their owners: now

What nearer debt in all humanity

Than wife is to the husband? If this law

Of nature be corrupted through affection,

And that great minds, of partial indulgence
 To their benumbed wills, resist the same,
 There is a law in each well-order'd nation
 To curb those raging appetites that are
 Most disobedient and refractory.
 If Helen then be wife to Sparta's king,
 As it is known she is, these moral laws
 Of nature and of nations speak aloud
 To have her back return'd: thus to persist
 In doing wrong extenuates not wrong,
 But makes it much more heavy.

(II. ii. 177-189)

自然はすべてのものをその正当な所有者に戻す
 ことを要求している。ところで、
 すべての人間関係において夫にとって妻ほど
 密接なものがあるか。もしこの自然の掟が
 人間の欲情に破られたり、偉大な人が麻痺した
 欲望に溺れて、自然の掟に反抗するなら、
 秩序ある国家には、御しがたい、反抗的な
 荒れ狂った欲望を制御する法律が存在する。
 それ故にヘレンが周知のごとくに、スパルタ王の
 妻であるから、これらの自然法も国家の法も
 彼女を返すべきだと声高に言っている。
 このように間違いを犯して、これを押し通すことは
 間違いを減ずるのではなく、増大させるものだ。

自然は、すべてのものは正当な持ち主に返すことを要求している。そうだと
 すると夫にとって妻ほど正当な持ち物はない。これが自然法であって、欲望
 によって破られるなら、このような欲望を抑える法が秩序ある国に存在する。
Helen はスパルタの王の后なのだから、自然法からも国法からも **Helen** を返

還するのが道理だと言うのである。ここで nature と law of nature と law of nations について調べてみたい。

Schmidt は nature について、1)の意味として the world around us as created and creating by fixed and eternal laws という定義を与え、更に human institution or tendencies に対立するものとし *Henry V* の“by law of nature and of nations” (II. iv. 80) と *Troilus and Cressida* の (II. ii. 176) を引用している。

また判断の根拠となる基準を意味する nature は自然観 (concept of Nature) と関連しているのである。Edgar C. Knowlton は自然観を次のように要約している。God is good, and so is Nature, the divine agent, His agent. Man must follow the law of nature, which is the same as the law of reason. This principle postulates the existence of free will, urges the ideal of the golden mean, and involves discipline not for its own sake but the sake of a higher purpose.... the purpose of conduct and of art are to know Nature and to follow her, by reason to learn her principles to practise them, and not to eliminate feeling.そしてこの自然観はプラトン以来の伝統的なものであり、ルネッサンスの中心的思想であると述べている³⁾。

A. P. ダントレーヴは自然法の歴史は法および政治学における自然の思想の歴史にほかならないというリッチイの指摘に触れているが⁴⁾、このように自然観と自然法は密接な関係を有するのである。

OED は law の項において The term law of nations (L. jus gentium) meant in Roman use the rules common to the law of all nations (often coupled with law of nature in sense 9 c; so in Shakes. *Hen. V*. II. iv. 80 and *Troil.* II.ii.184). と説明し、そして 9 c. as implanted by nature in the human mind, or as capable of being demonstrated by reason. Formerly often the law of nature (now rarely, because of the frequency of that expression in sense 17) と記述しているように、自然法が生来 (by nature) 心に刻まれた法なのである。更に The expression law of nature (lex naturae or naturalis, jus naturale) in Cicero, Seneca, and the Roman jurists, is ultimately derived from the physikon dikaion of Aristotle. と記している。

この *physikon dikaion* (natural justice) について Aristotle は修辭論の中で Antigone に関して述べている。Oedipus の 2 人の息子、Eteocles と Polyneices が 1 年交代で王位に就くことになる。1 年が過ぎても Eteocles は王位を譲らず、そのため Polyneices がアルゴス王の援助を得て、Thebes を攻める。一騎打ちで Eteocles と Polyneices は相打ちとなり、2 人とも倒れる。王位についた Creon は Polyneices が祖国 Thebes を攻めた理由により、国賊として、その遺体の埋葬を禁ずるのである。しかし Antigone はその布告を無視して埋葬する。何故国法を犯すのだと Creon に問われて、Antigone は死者を埋葬することは天の法に反するものではないからだと答える。

Aristotle は法には共同体の特定の法と普遍的な法の 2 種の法があり、普遍的な法は自然に基づいている、それは自然の正義と自然の不正が存在するからで、Antigone が国法で禁じられていても、Polyneices の埋葬は自然の正義にかなうが故に正しいと述べている⁵⁾。Aristotle は普遍的な法に由来する自然法のことを言っているのである。

また R. A. Foakes が *Troilus and Cressida* の *moral laws/ Of nature and of nations* について、*law as implanted by nature in the mind, and the laws which bind nations in a mutual agreement. The best-known discussion of the derivation through reason of the laws of nations from the laws of nature, and their relation to divine law, is in Book I of Richard Hooker's The Laws of Ecclesiastical Polity.* と注釈を付しているように⁶⁾、国法が理性に、自然法は神の法に由来しているのである。

このように自然法は古代ギリシャから伝わってきた伝統的な思想なのである。R. S. White は *Natural Law* について、Saint Augustine の ‘There is no law unless it be just.’ また Thomas Aquinas の ‘And if a human law is at variance in any particular with the Natural Law, it is no longer legal, rather a corruption of law.’ という言葉を引用して、*Natural Law* は本質において、正義であり、正義そのものであり、すべての実定法の基であり、試金石であると述べ、更に A. P. ダントレーヴの「正邪の究極の尺度である」という言葉を引用している⁷⁾。

Hector はこのように深い意味を持つ正統的な自然法を持ち出して、Helen をギリシャ方に引き渡すのが正当で、これが真の道としての自分の意見であると主張する。しかし Hector は一転してこの正当な主張を撤回して、この件には全体の名誉がかかっているから Helen を Troy に留めておくという弟たちの意見に賛成だと言い出すのである。実は初めから Hector は自然法を持ち出すことによって Helen 返還について他の人たちを説得する気などさらさらなかったのである。それ以前に Hector は会議に諮ることなく独断で Aeneas を使者としてギリシャ方に挑戦状を送っている。観客は Ulysses に対してと同様に、己の見識を誇示するためにこのような議論のための議論をする Hector の態度に疑問を抱く。

また Bradshaw が言うように、「名誉」“dignities”(II.ii.194)という大義名分の故に自然法を斥ける Hector は「大義のない戦で良くない結果」“bad success in a bad cause”(II. ii. 118)に終わる戦には名誉が得られないという彼自身の主張とも矛盾する⁸⁾。また Troilus がこの戦について、「この大義名分では戦えない。己の剣を揮うには貧弱すぎる名分だ」“I cannot fight upon this argument;/ It is too starv'd a subject for my sword.”(I.i.92-93)と言っているように、名誉という観念に観客は疑問を抱くのである。Shakespeare は人物を一面的に描くのではなく、多面的に描いて発言者の真の動機が奈辺にあるかを観客が絶えず考えるように仕向けているのである。

Cressida の使用人 Alexander は、Hector の忍耐力はこの上なく強いと評するが、Hector は Ajax に一撃を受けたとき、不機嫌になり、妻を叱りつけ、また甲冑もちを殴りつけたりもする。また決闘の作法については、一切かまわないと言って鷹揚を気取る Hector の態度は挑戦相手を侮辱するものであり、傲慢な男だと言って Achilles は軽べつする。また戦で敵に情けをかけ、見逃す Hector は自分の行為を“fair play”(V. iii. 42)だと主張する。しかし Troilus は Hector の独り善がりの行動を「馬鹿のやるまね」“Fool's play”(V. iii. 43)だと言って批判する。そして Bradshaw は Hector が立派な甲冑を身に付けたギリシャ人を追い回し、倒して、その立派な甲冑を手に入れる挿話は Hector 自身の立派な外観が隠しているものに観客は疑惑を抱くと述べてい

る⁹⁾。このように Hector の言辞や行動は他の人物から様々に批評されるのである。

値打ちは付けるものと言う Troilus に対して Hector は value について次のように言っている。

But value dwells not in particular will:
It holds his estimate and dignity
As well wherein 'tis precious of itself
As in the prizer.

(II. ii. 54-57)

だが、値打ちというものは個人の意思によって決まるのではない。そのものに貴重な尊厳があって、他人が値打ちを付けるだけではない。

価値というものは人の評価だけでなく、そのもの自体に値打ちがあるのだと価値の客観性を主張する。Hector は自分に価値が内在していると確信しているのである。名誉を重んじ、騎士道精神を尊び、寛大に振る舞うことが、武将である Hector にとって人間的に価値のあることなのである。そして Hector は Achilles と剣を交えた際、容易に相手を倒すことができたのに、fair play を演じ、Achilles を討つ機会をみすみす逃し、己と Troy を破滅に導くのである。このように Hector は Natural Law を説きながら、自らその教えを裏切る挙に出るのである。次に他の人物たちを見てみよう。

3

Troilus は Cressida に対する愛の苦しみを戦になぞらえて、心の中で戦をしているのにギリシャ方とどうして戦えようかと言い、公よりも私を優先させようとする。更に Helen の誘拐が原因であるこの戦について大義名分が貧弱だと言う。しかし Helen をギリシャ方に引き渡すべきかどうかを決める御前会議では、名誉に係ることだから、Helen を返還すべきではないと主張する。Hector が「彼女は引き留めておくに値しない女だ」*“She is not worth what she doth cost the keeping.”* (II.ii.52) と反論すると、Troilus は「なんであれ値をつければ値打ちはない」*“What’s aught but as ’tis valued?”* と言って、値打ち

(value) というものは主観的なものと主張する。そして実際に Troilus は Cressida に過大な値をつけるのである。

Troilus は Cressida をたえず理想化し美化する。一方観客は Pandarus と Cressida との会話や Cressida 自身の独白によって現実の Cressida を常に見ているのである。Antenor との人質交換で Cressida がギリシャ方にやって来た際、Ulysses は「淫蕩な性質が身体のあらゆるところからのぞいている」“her wanton spirits look out/ At every joint and motive of her body.”(IV.v.56-57) と言い、また「色恋を事とする女」“daughters of the game”(IV. v. 63) だと言って、彼女を辛辣に評する。

Cressida は父 Calchas が Troy の滅亡を予見して Troy を去った後も Pandarus と残り、Troilus と相思相愛の仲になる。それも束の間 Calchas の願いで、人質交換として Troilus と別れ、ギリシャ方に行き、世話人の Diomedes の愛人になる。その2人の逢瀬を Troilus は目撃し、初めて Cressida の現実の姿を見る。しかし Troilus は Cressida が永遠の愛を誓いながら、愛の形見の品さえ Diomedes に渡すのを目の当たりにしても、現実の Cressida を否定しようとする。目の当たりにした現実の Cressida を認めるならば、母親を含む女性全体が非難されることになるとして、現実の Cressida をあくまで否定するのだと Troilus は言うのである。その言葉を聞くと Ulysses は冷やかに「我々の母親の名を汚すようななどんなことをあの女はやらかしたのですか」“What hath she done, prince, that can soil our mothers?”(V. ii. 133) と言いつつ。そして Troilus は「あれはクレシダであってクレシダでない」“This is Cressida and this is not Cressida”(V.ii.145) という苦悩の言葉を発するが、これが間違いなく現実の Cressida の姿なのである。この Troilus の言葉は美化し理想化した Cressida と乖離した現実の Cressida を認めたくない心情を如実に示しているのである。

Helen の返還問題では Troilus は返還に強く反対したのであるが、Cressida と Antenor との人質交換の際は一言も発言しなかったのである。若く、激情的な性格であり、値打ちは付けるものという Troilus は値打ちのない Cressida に値打ちを付けて己の主観的な価値観に裏切られたのである。そしてその腹

いせに Troilus は Diomedes に対する復讐を心に誓うのである。

4

序幕で序詞役が「誘拐された、Menelaus の妃、Helen が色好みの Paris と眠っている。これが戦争の原因である」と語っている。

Troy 方でも Troilus はこの大義名分で戦えないと言っている。また Hector は「大義のない戦での良くない結果」を予想し、懸念を示している。しかしこの戦争に最も批判的な人物は Thersites である。

Thersites はすべての人間を口汚く罵り、すべての事柄を戦争と好色に矮小化してしまう。Iago と同様に、nature の中の baseness しか見ようとせず、love をすべて lust に置き換えてしまう。そして Thersites にかかっては Agamemnon も Achilles も阿呆であり、Achilles に仕える自分も Patroclus もまた阿呆なのである。更に欺瞞ばかり、争いの原因は「淫売と間男」“a whore and a/ cuckold” (II.iii.74-75) であり、それは党派を組んで争い、血を流すのに誂え向きの事であり、「戦争と淫乱」“war and lechery” (II.iii.77) によってなにもかもめちゃくちゃになってしまえと喚き散らす。

また Thersites は Diomedes と Cressida の逢瀬を目撃したときも、「色気だ、色気だ。いつも戦争と色気だ。他のことは何もはやらない」“Lechery, lechery, still war and lechery!/ Nothing else holds fashion.” (V.ii.193-4) と口を開けばこの世は戦争と色気ばかりだと言う。しかし Thersites はこの劇において決して Shakespeare の代弁者などではない。Achilles は Thersites を「根性悪の吹き出物、自然のかさぶた」“core of envy!/ Thou crusty botch of nature” (V. i. 4-5) と言い、Patroclus は Thersites を「罰当たりの根性悪」“damnable box of envy” (V. i. 24) と言っている。自然のかさぶたである Thersites は自然界の中の病的存在である。彼の発言の背後には自分よりすぐれた者への嫉みがあることを皆が知っている。Bradshaw が言うように、独りでいる時に、「あいつが俺を殴り、俺がやつを罵る。結構なことさ。これがあべこべだといいいのだがなあ、俺がやつを殴り、やつが俺を罵る」“He (=Ajax) beats me, and I rail at him. O worthy satisfaction!/ Would it were otherwise—that I could/ beat him, while he railed at me.” (II.iii.3-5) と言い、Thersites は自分の置かれた境遇に不満である

ことを認めているのである¹⁰⁾。戦場において Hector に出会い、「お前はヘクターの相手になれるやつか、由緒ある家柄の出か」「Art thou for Hector's match?/ Art thou of blood and honour?」(V.iv.26-27)と問われて、命あつてのものだねとばかりに、Thersites は「いえいえ、ちがいます、ろくでなし、卑しい毒突くばかりのやつで、汚らしい野郎です」“No, no: I am a rascal, a scurvy railing knave:/ a very filthy rogue.”(V.iv.28-29)と答える。命拾いをする、脅しやがってと強がり口にする。そして Menelaus と Paris の戦いを見て cuckold と cuckold-maker との一騎打ちだと面白がり、はやし立てるが、Priam の庶子 Margarelon から戦を挑まれると、またもやすたこら逃げ出すのである。

Bradshaw が言うように、Thersites にとってすべてを戦争と色気に矮小化することが自分を高める唯一の手段である。すべての人間が戦争と色気に血眼になっていると罵倒することが Thersites の誇りであり、喜びなのである。他人を貶すことによって自分が偉くなった気になり、それが自分の存在感を示す手段なのである。そして他の人物たちは人生に意味や価値を見出すことが必要であるが、Thersites にはそういうものを否定することが必要なのである¹¹⁾。つまり人生の意味や価値を否定することが彼の生き甲斐だからである。Thersites にとって理想とか名誉とか騎士道精神とかは無縁の存在なのである。

Kenneth Palmer が指摘するように、Achilles は過去の功績によって名声を得ているのに、その名声は彼自身に内在するものと考え、行動しようとしな¹²⁾い。Agamemnon や Ulysses 達首脳部の指令を無視して、Patroclus 相手に無為に時を過ごし、Achilles は情報戦や緻密な作戦など何の役にも立たないもの、戦で重要なものは個人の腕力であると考えているのである。Hector に対して敵愾心を抱いていて、寛大な人柄で、名誉を重んじる人物という評判がしゃくであり、常に Hector を貶さないではいられないのである。Hector と剣を交えて Achilles は不利になった際に、Hector が「待った、しばらく」“Pause, if thou wilt.”(V.vi.14)と言って、見逃してくれたお陰で命拾いをする。しかし Achilles は、戦の醜い現実を見ず、騎士道精神を重んじる Hector を軽べつして、「高慢なトロイ人、その騎士道の作法を軽蔑する。おれの剣が役に立たな

くなったのはお前の幸いだ」“I do disdain thy courtesy, proud Trojan./ Be happy that my arms are out of use:”(V.vi.15-16)と負け惜しみを言ってその場を去るのである。Achilles は、戦は気晴らしなどでなくて、Patroclus が殺され、部下のマーミドン達が鼻をそぎ落とされ、手を切り落とされているという醜い現実を知っているのである。またこれまで出陣を拒んでいたが、Patroclus の死に接して復讐の鬼となるのである。Achilles は手段を選ばず、ただ Hector に対して復讐することだけを考える現実主義者である。そして Achilles はマーミドン達と共に武装を解いて休んでいる Hector の隙を突き、惨殺するのである。

5

Bradshaw は、この劇ではある人物の発言は行動の動機を他の人物が明らかにするが、同時にその人物の動機をも明らかにするのだと言い、更に Hector の行動を見てくると、Cressida が求められるのを必要とするように、Hector は称賛されることを必要とする浅薄な男と結論できるだろうと述べ、Hector の言葉と動機に関するかぎり、honour と chivalry と fair play の精神は pride と egotism と appetite for self-display によるものと考えたら、Hector の発言や動機の矛盾は解決する。しかしそうだとすれば、Hector が惨殺され、この地上が闇に覆われ、名誉がその意味を失い、情け容赦のない現実主義者の Achilles がそれにとって代わる時に受ける我々の精神的な衝撃を説明できる視点がなくなると述べている¹³⁾。当時のマキアベリ主義の政治状況を反映しているであろう。

Bradshaw は行動の動機は Swift にとって Nothing but Self-love であり、Thersites にとっては Nothing but lechery であり、また As a man is , so he sees. という Blake の言葉や we interpret the world as we interpret. という Nietzsche の主張に触れ、Thersites のような精神的に正常でない人間はすべてを戦争と色気に矮小化し、すべての人間を罵り、阿呆呼ばわりするが、それが Thersites の誇りであり、喜びであり、我々は人生に価値や意味を見出すことが必要であるが、Thersites は価値のある人生や意味のある人生を否定することが必要なのであると述べているように¹⁴⁾、判断はその人の有り様を示しているので

ある。

また Bradshaw は J. L. Mackie の *Ethics : Inventing right and wrong* の中の *There are no objective values.* で始まる一文の主旨を Shakespeare 流に言えば、*There are, or may be, no objective values, but the need to endow life with value and significance is an objective fact about human nature.* ということになるかと述べている¹⁵⁾。

価値は主観的なものと主張した Troilus は Cressida に対する lust を love と信じ込み、lust に値打ちを付けようとするが、その試みに失敗したのである¹⁶⁾。Troilus は Cressida を愛することが人生に価値をまた意味を見出すことであった。現実の Cressida を目撃して絶望するのは己の人生が意味を失うことを意味するからなのである。そこには虚無と絶望しかない。だから後は Diomedes に復讐することが Troilus には人生の意味を回復する手段であると考える。それは Troilus の自暴自棄の姿を示している。

Bradshaw が言うように、Ulysses は位階論において nature が動乱の、倫理的に意味を持たないプロセスであり、正邪の別を失い、意味の欠如した世界を想像しているのである¹⁷⁾。Ulysses の弁説は文脈においては Agamemnon や Nestor を敬服させ、巧妙に操る狡猾な Ulysses を浮かび上がらせる結果に終わったが、より広い文脈においては位階の崩壊による自然的秩序の喪失した世界がいかなるものかを示している。それは当時の中世から近代への政治的、社会的変革期をも示しているのである。

Hector は自然法に則って生きることが真の道であることを観念的には知っているのである。「パリスという松明が私たちを焼き尽くす。トロイ人よ、泣け、ヘレンは災いだ。泣け、泣け、トロイが燃える。ヘレンを追い出せ」「Our firebrand brother Paris burns us all./ Cry, Trojans, cry! A Helen and a woe./ Cry, cry! Troy burns, or else let Helen go.” (II.ii.111-113) と言って、Troy の破滅を予言する Cassandra の警告を狂人の戯言だとして無視する Troilus が「ヘレンは名誉と名声の的です、勇敢で高邁な行為への拍車です」「She (=Helen) is a theme of honour and renown,/ A spur to valiant and magnanimous deeds” (II.iii.200-201) と言う。このような世界では武将である Hector が自然

法に従い Greek 方と和睦しては自我を実現することは不可能であり、人生に意味を見出すことはできない。Hector は名誉を重んじ、フェアプレイの精神と騎士道精神を尊び、価値の客観説を信奉する人である。そして人からもそのように評価されることを期待する。それを実現するには戦うことが必要なのである。したがって Hector は自然法すなわち nature と reason を斥け、戦の道を選択する。その結果手段を選ばない現実主義者 Achilles の手にかかって命を失い、Troy を破滅に導くのである。

テキストの引用は Kenneth Palmer, ed., *Troilus and Cressida*, The Arden Shakespeare, Methuen, 1981.による。

- 1) Graham Bradshaw, *Shakespeare's Scepticism*, The Harvester Press Limited. 1987, p. 156.
- 2) Graham Bradshaw, *ibid.*, p.152.
- 3) Edgar C. Knowlton, "Nature and Shakespeare", PMLA, LI, 1936, p. 719.
- 4) A. P. ダントレーヴ、『自然法』、久保正幡訳、岩波書店、1952、p. 8.
- 5) Aristotle, *The Art of Rhetoric*, The Loeb Classical Library, edited by John Henry Freese, William Heinemann Ltd., 1959, pp.139-141.
- 6) R. A. Foakes, *Troilus and Cressida*, The New Penguin Shakespeare, Penguin Books Ltd., 1987, note.
- 7) R. S. White, *Natural Law in English Renaissance Literature*, Cambridge U. P., 1966, p.1.
- 8) Graham Bradshaw, *op. cit.*, p.130.
- 9) Graham Bradshaw, *ibid.*, p. 137.
- 10) Graham Bradshaw, *ibid.*, p. 141.
- 11) Graham Bradshaw, *ibid.*, p. 161.
- 12) Kenneth Palmer, *op. cit.*, Introduction, p. 54.
- 13) Graham Bradshaw, *op. cit.*, p. 142.
- 14) Graham Bradshaw, *ibid.*, p. 126. p. x. p. 161.
- 15) Graham Bradshaw, *ibid.*, p. 37.
- 16) Graham Bradshaw, *ibid.*, p. 162.
- 17) Graham Bradshaw, *ibid.*, p.142.

第十章

『尺には尺を』 *Measure for Measure*

Shakespeare の他の作品と比較して、*Measure for Measure* では派生語を含めて、nature という語の使用頻度はあまり高くない。しかし nature はこの作品においても重要な意味を有している。nature という語はラテン語の natura に由来し、その natura はギリシャ語の physis から来ている。また *OED* の nature の項に The native English word is kind n. とあるように、nature に相当する英語固有の語は kind である。Shakespeare の他の作品と同様に、この劇においても、kind and natural というように kind と natural とが相互に他を強調する形で用いられている。またこの作品では Natural Law と Positive Law の対立が中心テーマの1つである。そして A. P. ダントレーヴが自然法の歴史は法学および政治学における自然観の歴史にはかならないと言うリッチイの指摘に言及しているが¹⁾、自然観と Natural Law との関わりも重要な問題である。*Measure for Measure* は Shakespeare の作品の中で、今日最もよく論じられる作品の1つであり、その議論はまさに甲論乙駁である。その理由について H. Hawkins はこの劇に描かれている、性、社会、法律、また倫理などの対立に関して究極の解決を求めても、神学、批評、歴史、精神分析などに権威ある拠り所は存在しない、何故ならこうした問題には観客はそれぞれの価値観、世界観を有していて、その価値観、世界観の違いによってこの劇の見方が変わってくるからであると述べている²⁾。この劇のこうした諸問題を nature という観点から考察することが小論の目的である。

1

Vienna の公爵である Vincentio は性に関わる厳しい法律の違反を取り締まらず、寛大な政策を続けた結果、公国は風紀紊乱をきたし、放置できない事態に至っている。いまさら綱紀の引き締めをはかるなら、為政者は暴君の誇りを免れないであろう。Duke はそれを嫌い、謹厳実直の聞こえが高い Angelo を公爵代理に任命し、全権を委任して、自分は重大な用件で外国に出かけるという情報を流し、修道僧に変装して Vienna に残り、施策について Angelo

のお手並み拝見という手段をとる。代理の任命の際、 Duke は nature という語を用いて、持てる才能を十分発揮することが nature の意に適うことになると、Angelo に次のように言う。

Spirits are not finely touched
 But to fine issues, nor nature never lends
 The smallest scruple of her excellence
 But, like a thrifty goddess, she determines
 Herself the glory of creditor,
 Both thanks and use.

(I.i.36-41)

人間の心が立派に造られているのは立派な行為をするためである。自然の女神がほんのわずかの美点でも人間に貸すとすれば、けちな女神らしく、債権者の榮譽として、感謝だけでなく利子もとろうと決めているのである。

この nature の基本的な意味は Schmidt が与えている *the world around us as created and creating by fixed and eternal laws.* の意であり、すなわち自然の造化を指すであろう。しかし Angelo には国を治める者の務めを説きながら、Duke 自身はその言葉とは裏腹に己の「個人としての私」“my nature” (I.iii.42) に傷の付くのを恐れ、nature の意に背き、公爵の職務を全うしなかったのである。

代理に就任するや Angelo は厳しい法律を即刻適用し、綱紀の肅正をはかり、市外にある売春宿の取り壊しを布告し、一罰百戒を狙って、Juliet を孕ませた廉で、Claudio を逮捕し、死刑を宣告する。そして見せしめのため市中を引き回すことを命じる。その際に Lucio から引き回しの理由を尋ねられると、放縦のなれの果てだと自嘲気味に Claudio は次のように答える。

From too much liberty, my Lucio, liberty,
 As surfeit, is the father of much fast;
 So every scope by the immoderate use
 Turns to restrain. Our natures do pursue,

Like rats that ravin down their proper bane,
A thirsty evil; and when we drink, we die.

(I. ii. 124-129)

放埒が過ぎたからなのだ、ルーシオ、放埒が。
飽食のために断食するはめになるように、
放埒が度を越すと拘束されることになる。
我々人間は、猫いらずをががつ食らう鼠のように
悪を飢え求めて、それを飲んで死ぬのだ。

“our natures”は毒を食らって死ぬ鼠のように、欲望に耽って命を落とすというように、*nature* という語が *evil* との関わりで用いられていることがこの劇の特異性を示しているのである。*Othello* における *Iago* の「我々生まれながらの卑しさ」“baseness of our natures”(I.ii.329)という言い方を思い起こさせる。そして死刑を免れたい *Claudio* は、尼僧になる決意をし、修道院に入ろうとしている妹の *Isabella* の許に行き、*Angelo* に己の助命嘆願をしてくれるよう *Lucio* に頼むのである。*Claudio* は特に品行方正とは言えないにしても、正常な青年であり、人々に好感をもたれている人物である。*Lucio* は *Isabella* に *Claudio* が死刑の判決を言い渡された次第を説明するとき、*Claudio* と *Juliet* の関係を自然の比喩を用いて次のように語っている。

Your brother and his lover have embraced.
As those that feed grow full, as blossoming time
That from the seedness the bare fallow brings
To teeming foison, even so her plenteous womb
Expresseth his full tilth and husbandry.

(I. iv. 40-44)

あんたの兄さんと恋人は抱き合った。
ものを食べると太るように、種まきから花が
咲くと何も生えていなかった畑にたくさん実
を結ぶように、女のお腹も兄さんが耕した結果
豊かに実ったってわけだ。

この言葉は Lucio の性格を逸脱しており、したがってこれは chorus の言葉であり、いかに 2 人の関係が自然に適ったものであるかを端的に示している。この作品には 3 組の男女が登場し、Claudio と Juliet だけが相思相愛の間柄であり、しかもこの 2 人だけが罪人とされているのである。このようにこの劇では nature が否定されることが特徴である。そのことは性を取り締まる法が nature に反していることを意味している。また Claudio の行為に関して、良識的な Provost が

He hath but as offended in a dream!
 All sects, all ages smack of this vice, and he
 To die for't?

(II. ii. 4-6)

あの男は夢の中で罪を犯したようなものだ。

身分や年齢を問わずだれでもこの罪は免れない。

あの男だけがこのために死なねばならないとは。

と言い、誰もが何時の時代においてもこの vice を共有するものであるのに、何故 Claudio だけがこの罪故に処刑されなければならないのか納得できないのである。更に Provost は僧侶に変装した Duke から、Claudio と Juliet の犯した罪は何かと問われた時も、Claudio について「この件で死なせるよりも、もう一度同じ過ちを繰り返させるのが相応しい若者です」“a young man / More fit to do another such offence / Than die for this.”(II.iii.13-15) と同情的な言葉を述べる。また処刑の為に Barnardine と Claudio を呼びにやる際も、「一方の者には同情するが、もう一方の者は殺人者だから、わしの弟であっても同情はしない」“The one has my pity, not a jot the other, / Being a murderer, though he were my brother.”(IV.ii.58-59) と言い、殺人者と同じ扱いを受ける Claudio に深い同情の気持ちを示している。男女の関係を lechery としか見ない Lucio は子を孕ませた廉で死刑にする法律を嘲笑する。また「突っ込み遊び」“a game of tick-tack”(I.ii.188)、「一物の謀反」“the rebellion of a codpiece”(III.i.177)、「漏斗をびんに突っ込む」“filling a bottle with a tun-dish”(III.i.430)、「ズボンを脱いだだけで」untrussing”(III.i.437) という猥

雑な言葉を繰り返し口にし、そしてただそれだけのことで、人を死刑にする法律の理不尽を笑うのである。Pompey も Overdone から Claudio の罪は何かと聞かれると、「他人の川で鱒を探っていたので」“Groping for trouts in a peculiar river.”(I.ii.88)と同じ調子で答えている。このように Claudio と Juliet の関係が自然にかなっているにもかかわらず、2人の行為が vice であり、sin であり、crime であると裁く法は unnatural であることを示しているのである。

Escalus は裁きに引き出された Pompey に bawd が a lawful trade だと思うかと問うと、Pompey は「法律が許してくれさえしたらですがね」“If the law would allow it, sir.”(II.i.224)と答え、性を取り締まる法律が man-made law、つまり positive law であることを強調する。R. S. White が positive law と Natural Law の違いに関して、Aristotle の言葉を引き合いに出し、male in se (evil in themselves) と male prohibita (evil by enacted law) とを述べているが³⁾、Claudio の罪は evil by enacted law の典型を示すものであろう。Pompey は再度逮捕されるが、Provost から首切り役人が足りないのも、もしその助手になれば、刑を免除すると言われて、「違法な淫売屋」“an unlawful bawd”(IV.ii.14)をやめて、「合法的な首切り役人」“a lawful hangman”(IV. ii. 15)になることを承諾する。生命を生み出す手助けをする職業が unlawful で、首切り役が lawful という Pompey の言葉はこの劇を象徴している。Bradshaw は illegal procreation を legal murder によって罰する法律は a natural act の結果を an unnatural act によって罰する犯罪とする点で、二重に Nature に反すると言っている⁴⁾。次に Isabella と公爵代理の Angelo との対面を見てみよう。

2

Duke は Angelo の性格について

... Lord Angelo is precise,
 Stands at a guard with envy, scarce confesses
 That his blood flows, or that his appetite
 Is more to bread than stone. Hence shall we see
 If power change purpose, what our seemers be.
 (I. iii. 50-54)

アンジェロ卿は厳格で、悪から身を守り、
 血が通っているようにも、石よりパンを食べたがって
 いるようにも見えない。だから、もし権力が性癖を
 変えるなら、見掛けの我々はどう変わるか見ようと思う。

と Angelo が性に冷淡であることを述べている。N. W. Bawcutt は blood に関して used in Elizabethan English to signify sexual appetite (*OED* 6) as well as the bodily fluid. と注を付け、更に to bread than stone については biblical vocabulary (Matthew 4: 3 and 7: 9) but used to convey Angelo's extraordinary lack of sensual appetites. と注を施しているように⁵⁾、Angelo が極端に禁欲的な人物であり、そのことは nature に反していることを示すものである。Lucio も Angelo に関して

...a man whose blood

Is very snow-broth, one who never feels
 The wanton stings and motions of the sense,
 But doth rebate and blunt his natural edge
 With profits of the mind, study and fast.

(I. iv. 57-61)

血が溶けた雪のように冷たい人間です。
 官能のみだらな刺激や疼きを感じず、学問や断食
 など精神修養に努め、自然な欲情の刃を鈍らせた男。

と言い、Angelo が natural edge を鈍らせた unnatural 存在であるということ
 を Isabella に語っている。また Lucio は相手が変装している Duke とも知らず
 に、Angelo のことを

... this ungenitured

agent will unpeople the province with continency.
 Sparrows must not build in his house-eaves, because
 they are lecherous.

(III.i.431-434)

この性的不能の公爵代理は禁欲で国の人口を絶えさせようと

している。雀もあの人の軒先に巣を作ってはいけないのだ、
雀が好色だからって。

と Angelo が異常なまでに性に嫌悪感を抱いている様を述べている。R. S. White は *Measure for Measure* の中心的な部分である法が nature と相容れない存在であり、そしてこの状況を多くの人物が、繰り返し口にしてしていると述べ、Lucio の言葉は公の顔としての Angelo が unnaturalness であることを端的に示すものと言っている⁶⁾。

Isabella は Angelo と対面し、兄の助命を乞う。勿論撥ねつけられ、一度は嘆願を諦めかけるが、Lucio に促されて再度助命を嘆願する。過ちを犯すのは人の常であることを主張して、Angelo の慈悲心に訴える。神が原罪を背負った、罪深い人間に慈悲をかけていることを知るならば、他の人にも慈悲をかけないではいられないだろうと mercy という語を繰り返し、Angelo の慈悲心に訴えるのである。この訴えに Angelo は Claudio を裁くのは私でなく、法であると応じる。それに対して Isabella は多くの人がこの罪を犯したが、これまでこの罪で処刑されたものは1人もいなかったと反論する。すると Angelo は最初に罪を犯した者を処罰しておけば、それを教訓として多くの者はそのような罪を犯さなかった筈であると切り返す。同情ぐらいはしてもよいのではと言う Isabella に対して、Angelo は法に照らして裁くことが最も同情を示すことになるのだ、罪人を放置したら、罪のない人々を苦しめることになるろう、今罰することにより、未来の罪のない人々に哀れみかけることになるのだと応戦する。Isabella は権力を笠にきた小役人の傲慢さに言及し、権力者は同じ誤りやすい人間であるのに、己れの罪を隠蔽する術を知っていると権力者批判を行ったのち、最後に natural の語を用いて、Angelo の深奥に兄と同じ感情が潜んでいないかどうか自分の心に問うよう次のように言う。

Go to your bosom,

Knock there, and ask your heart what it doth know

That's like my brother's fault; if it confess

A natural guiltiness, such as is his,

Let it not sound a thought upon your tongue

Against my brother's life.

(II. ii. 138-143)

ご自分の胸を訪ねて、扉をたたいて、胸に兄の罪と同じものがあるかどうかお尋ねください。もし兄と同じような生来の罪があるとお分かりになれば兄の命を奪うという考えを口にしないでください。

Schmidtはこの natural について subject to, or caused by, the laws of nature. という定義を与えている。では the laws of nature はどういう意味であろうか。R. S. White は Gaius の the law of nature について、R. W. Lee から次の文を引用している。

The law of nature is the law which nature has taught all animals. This law is not peculiar to the human race, but belongs to all living creatures, birds, beasts and fishes. This is the source of the union of male and female, which we called, as well as of the procreation and rearing of children; which things are characteristic of the whole animal creation.⁷⁾

このような意味を有する natural が guiltiness という語との関わりで用いられている。H. Hawkins はこの劇におけるあらゆる guiltiness と最も強く結びついている語が natural と言っているように⁸⁾、nature と guiltiness の関わりこそこの作品を最も特徴付けているのである。そして Angelo は「この女はよう言うわい。とても理に適ったことを言うので、心が動かされる」“She speaks, and 'tis such sense / That my sense breeds with it.”(II.ii.143-144) という言葉を口にする。‘sense...sense’に関して N. W. Bawcutt は1つの解釈として‘her justification of sexual desire as natural has stimulated my own sexuality. There is also a larger irony in the speech as a whole; Angelo does compare himself to Claudio, and finds they have something in common, but his deduction from this is totally at variance with Isabella’s.’と注を付けているように⁹⁾、Isabella の言葉が Angelo の心の奥底に潜む「欲情」natural edge を意識させるのである。Angelo は Isabella の美貌と弁舌の術とひたむきさに心を動かされ、Isabella に欲情を抱く。そして再度尋ねてくるようにと彼女に告げる。独りになると Angelo は娼

婦などの手練手管には心を動かされなかったが、chaste の権化に見える Isabella に心引かれる様を nature の語を用いて

Never could the strumpet
With all her double vigour, art and nature,
Once stir my temper, but this virtuous maid
Subdues me quite.

(II.ii.186-189)

娼婦なら2倍の力、手管、持って生まれた魅力をもつても私の心を動かしたことは決してなかった。だがこの貞淑な乙女に私はすっかり参ってしまった。

と言っている。art and nature に関して N. W. Bawcutt が her skill as a courtesan combined with her inherent sexuality. と注しているように¹⁰⁾、Angelo は nature を娼婦の inherent sexuality の意味に用いている。そしてこのことは「ほんの今まで、男が女に溺れるのを見て、不思議がって笑っていた」“Ever till now / When men were fond, I smiled and wondered how.” (II.ii.189-190) と言う Angelo が sexuality を natural な行為と認めたことを示しているとも言えよう。しかしその natural な欲望の故に Claudio には死刑を宣告しながら、己は権力を笠に最も卑劣な手段で欲望を満たそうとする。Duke が “If power change purpose,” (I.iii.54) と言っているが、ここには権力によって墮落する人間の姿があり、暴君の姿がある。

3

Angelo は Isabella と再会し、欲情抑えがたく、Claudio の助命と交換に Isabella の肉体を暗に求める。Angelo のいう意味が飲み込めない Isabella の、殺人と庶子を産むということが共に天においては罪であるが、この人間の世界では、罪ではないという言葉聞いて、Angelo はあからさまに条件を持ち出す。本性を現した Angelo の言葉を盾に、Claudio を即刻釈放しなければ、Angelo の正体を暴露すると Isabella は脅迫的な言葉を吐く。それに対して己の穢れなき名声、厳正な私生活、Duke 代理の地位にいる自分が Isabella の非難など誹謗中傷だと言え、逆に Isabella は窮地に陥るであろうと典型的な暴

君の言葉を吐く。更に Angelo は己の意に従わねば、Claudio の命はなく、Isabella の「情愛の欠如」“unkindness”(II.iv.167)によって Claudio の苦しみを長引かせることになるだろうと脅迫する。前に述べたように、nature に相当する英語固有の語は kind であって、unkindness は unnaturalness を意味する。婚約までしていながら、兄を亡くし、持参金を失った Mariana を見捨てた Angelo の冷酷非情さを Duke は「不当な非情さ」“his unjust unkindness”(III.i.242)と言っている。一方 Mariana への兄の強い愛が「妹への思いはこの上なく情の深い」“in his love toward her ever most kind and natural”(III.i.229)と表現されているのである。更に Angelo は思いを遂げた後は、罪を許すとの約束を踏み躪って、Claudio の処刑を命じている。これも Angelo の unjust unkindness を示すものである。Isabella は自分の置かれた抜き差しならぬ状況に途方にくれるが、事情を話せば、Claudio は喜んで、死の道を選んでくれると信じ、「じゃ、イサベラ、操を守って生きなさい、兄さんは死んでも、兄よりも女の操の方が大切ですから」“Then, Isabel, live chaste, and brother, die; / More than our brother is our chastity.”(II.iv.185-186)と言って、Claudio に望みを託すのである。

Claudio は処刑を前にして、Duke に諄々と生と死の意味を説かれ、最後には Duke に感謝する。「生きようと願うことは死を求めることになる」と悟りました。死を求めることは生を見出す。死よ、来るなら来い”“To sue to live, I find I seek to die, / And seeking death, find life. Let it come on.”(III.i.42-43)と殊勝な言葉を口にし、死を覚悟するかのように見える。しかし尋ねてきた Isabella の姿を見るなり、Claudio は「で、妹、何かいい報せか」“Now, sister, what’s the comfort?”(III.i.54)と言って、Isabella に一縷の望みをかける。生への強い執着心が顔をのぞかせるのである。更に明日は死の旅に出なければならぬという Isabella の言葉にも、Claudio は「助かる手立てはないのか」“Is there no remedy?”(III.i.60)と尋ね、何としても生きたいという気持ちを明らかにする。そして助かる交換条件を知ると、Claudio は死の恐怖を切々と述べた後、次のように言う。

The weariest and most loathed worldly life

That age, ache, penury, and imprisonment
Can lay on nature is a paradise
To what we fear of death.

(III.i.132-135)

老齡、苦痛、窮乏、投獄が肉体に与える
この上なく辛く厭わしいこの世の命も
死の恐怖に比べれば楽園だ。

nature がどのような悲惨な状況であろうとも死の恐怖を患えば、nature が蒙る老齡、痛み、貧乏、投獄といった生活も楽園だというのである。Hamlet の「そう考えるからこそ不幸な人生をそのように長引かせるのだ」“there’s the respect / That makes calamity of so long life. (III.i.68-9)”という言葉を読み出させる。更に Claudio は nature という語を再度用いて、Isabella に必死になり

Sweet sister, let me live.
What sin you do to save a brother’s life,
Nature dispenses with the deed so far
That it becomes a virtue.

(III. i. 136-139)

妹、私を生かしておいてくれ。
兄の命を救うためにすることがどんなことであろうと
自然がその行為を許すだけでなく、
それは美德ともなろう。

と訴えるのである。

この Nature について、N. W. Bawcutt は *OED* に挙げられている natural feeling or affection (9e) or possibly the personified figure of nature, acting as a kind of judge. (11b) を注として引用しているように¹¹⁾、いわゆる Law of Nature という場合の判断の基準ともなり、普遍的、規範的な Nature を意味するのである。R. S. White が大文字の Law of Nature や Natural Law と、倫理的な意味を持たない、物理的な自然や動物界を意味する natural law や natural philosophy と区別しているが¹²⁾、Claudio がこの natural law や natural philosophy

を大文字の Nature にすりかえて、それが自分の命を救うために犯す sin を virtue へと変えることになるというのである。このように nature を恣意的に、己に都合のよいように持ち出し、自己を正当化しようとする言葉を聞いて、Isabella は激昂して Claudio を非難する。

O you beast!

O faithless coward, O dishonest wretch!

Wilt thou be made a man out of my vice?

Is't not a kind of incest to take life

From thine own sister's shame?

(III. i. 140-143)

まあ、けだもの。

信頼できない臆病者、恥知らず。

私に不義をさせても、あなたは生きたいの。

自分の妹を辱めて命を得ようというのは

近親相姦同然じゃあないの。

更に Isabella は Claudio の sin は偶然の事ではなくて、これは商売であって慈悲をかけることは bawd になることであるときえ言う。Brian Gibbons が過剰な禁欲は腐敗、歪み、異常をきたすと言っているように¹³⁾、Isabella や Angelo には相手に対する思いやりの気持ちが見られない。

2人が交わす言葉を立ち聞きしていた Duke は Claudio に対して Angelo の申し出は彼が Isabella の貞操を試し、人の心「人間の本質」“disposition of natures”(III.i.162)を判断するための一計であって、決して Angelo の本心ではないこと、したがって死を覚悟するように再度諭すのである。己の身勝手さを後悔する Claudio は Isabella に許しを願っていることを伝えて欲しいと言い、「私はこの世にすっかり愛想が尽きましたのでこの世におさらばしたいのです」“I am so out of love with life that I will sue to be rid of it.”(III.i.174-175)と口では言うのであるが、生への執着心はいや増すのである。H. Hawkins は Angelo は Eros の、Isabella は the will-to-autonomy の、また死に直面している Claudio は the will-to-live の elemental forces に駆られて、3人は悲劇の主人

公の行動をし、Angelo is absolute for the letter of the law, then for Isabella. Isabella is absolute for chastity. Claudio soon becomes absolute for life.と述べ、更にこのような状況であれば、Angelo は間違いなく、Isabella を汚し、Isabella は兄の命がかかっている、あくまで Angelo の要求を拒否し、また Claudio は死にまさる運命から妹を救うためであっても、進んで死を選ぶことはないであろうから、互いに悲劇的な災いを蒙ることになるだろうと、観客は確信すると言う¹⁴⁾。そしてこの纏れを紐解くのが Duke の役目である。しかしこのような問題には真の解決などありえない。

Duke は Claudio と Isabella をこの窮地から救うために一計を案じる。婚約までして、兄の船が難破し、持参金を失った為に、婚約を破棄され、それでも Angelo を慕い続ける Mariana を暗闇に紛れて Isabella の代わりをさせようと bed trick を提案する。Claudio の命を救い、Isabella の名誉を守り、Mariana を Angelo に添わせるということで Isabella はこの計画に喜んで協力する。そしてその計画は実行に移され、成功するのである。こうして Duke は一応の、measure に対して measure の裁きを行う。しかし相思相愛の仲であり、持参金の件で結婚を引き延ばして、妊娠していることが発覚した Juliet が sin を犯し、彼女は相思相愛である故に Claudio より重い罪を犯していると Duke は言う。然るに替え玉を演じる Mariana は Angelo が婚約をした夫なのであるから、「罪ではない」“tis no sin”(IV.ii.71)と詭弁を弄する。R. S. White が言うように、Duke の言葉は矛盾しており、nature に逆らった法の故に、権力者も法の網の目を潜り抜けるために策を弄したり、欺瞞行為を行わざるを得ない状況に追いやられるのである¹⁵⁾。

* * * * *

確かに Claudio と Juliet とは幸せが約束されているだろう。しかし信用を失い、面目を失った Angelo が望むのは死であり、決して Mariana との結婚ではない。Mariana は望みが叶い幸せになるだろうと考えられる人物である。Lucio は Duke への悪口で死刑の宣告を受けるが、遊び相手の Kate と結婚することを条件に罪は問わないと言われる。しかし Lucio は「淫売と結婚するのは、公爵、死の拷問です、鞭打ちです、縛り首です」“Marrying a punk, my lord, is

pressing to death, / whipping, and hanging.”(Vi.525-526)と言って、その処置に抗議する。Duke は「領主の悪口を言った報いとしてそれが適当だ」“Slandering a prince deserves it”(Vi.527)と言い放つ。このような問題に Duke の強権発動も真の解決にはならないのである。R. S. White は、nature と reason に反する法は Natural Law に反していて、根本的な解決には性風俗に関わる法律を廃止するか、改正するかである、またこの法律は施行すれば矛盾をきたし、不正義を行う可能性が常にあり、最も微妙で、個人的な問題に介入することになると述べている¹⁶⁾。しかしこの劇の中で「厳格な法令と峻烈な法律」“strict statutes and most biting laws”(I.iii.19)を廃止すべきだと言う人物は1人も存在しない。権威に逆らう者には厳しいが、人情の厚いとされる Escalus でさえ、Claudio の境遇に同情しながらも no remedy という言葉を繰り返し、この法律の改廃については一切口にしない。そして市外にある売春宿の取り壊し令が公布されるが、有力者のおかげで市内の売春宿は取り壊しを免れる。また Duke はウィーンの前には「腐敗が煮えたぎり、ふきこぼれそうになっているのを目にした」“I have seen corruption boil and bubble / till it o’errun the stew:”(Vi.320)と言っているのである。また N. W. Bawcutt は、姦淫を死罪にする法に反対して、「ミソサザイもやっている。小さい金蠅はわしの目の前でつるんでいる」“The wren goes to’t, and the small gilded fly / Does lecher in my sight”(IV.vi.111-112)と言う狂気の Lear の言葉について、...it may be significant that the speech as a whole presents a nightmare vision of a world in which all restraints on sexuality have broken down.と言っている¹⁷⁾。また R.S. White は Law of Nature の観点からは性は最も厄介な問題だと述べている¹⁸⁾。natural が guiltiness との、nature が evil との関わりで用いられていることがこの劇の暗い一面を暗示している。Duke の裁きとは別に measure に対する真の measure の裁きは各観客、読者に任されているのであろう。

テキストは、N. W. Bawcutt, ed., *Measure for Measure* (The Oxford Shakespeare), Oxford University Press, 1991.を使用し、他は The Arden Shakespeareを使用する。

第二部 作品論

- 1) A. P. ダントレーヴ、『自然法』、久保正幡訳、岩波書店、1952年、p. 8.
- 2) H. Hawkins, *Measure for Measure* (Harvester New Critical Introductions to Shakespeare), The Harvester Press Limited, 1987, p. xviii.
- 3) R. S. White, *Natural Law in English Renaissance Literature*, Cambridge University Press, 1996, p.24.
- 4) Graham Bradshaw, *Shakespeare's Scepticism*, The Harvester Press Limited, 1987, p. 218.
- 5) N. W. Bawcutt, *op. cit.*, note.
- 6) R. S. White, *op. cit.*, p. 178.
- 7) R. S. White, *ibid.*, pp. 27-28.
- 8) H. Hawkins, *op. cit.*, p.121.
- 9) N. W. Bawcutt, *op. cit.*, note.
- 10) N. W. Bawcutt, *ibid.*, note.
- 11) N. W. Bawcutt, *ibid.*, note.
- 12) R. S. White, *op. cit.*, p. xvii.
- 13) Brian Gibbons, ed., *Measure for Measure*, (The New Cambridge Shakespeare), Cambridge University Press, 1991, introduction, p. 26.
- 14) H. Hawkins, *op. cit.*, pp. 41-42.
- 15) R. S. White, *op. cit.*, p. 179.
- 16) R. S. White, *ibid.*, p. 184.
- 17) N. W. Bawcutt, *op. cit.*, introduction, p. 9.
- 18) R. S. White, *op. cit.*, p. 27.

第十一章

『ハムレット』 *Hamlet*

Saxo Grammaticus の *Historiae Danicae* は *Hamlet* の主要な材源の 1 つである。それは Philip Edwards が言うように、*Hamlet* に相当する人物 Amleth の成功物語であり、そこには old Fortinbras と old Hamlet の経緯、兄殺し、王妃の再婚、*Hamlet* の佯狂、*Hamlet* の本心を確かめるための Ophelia の利用、Polonius の立ち聞きと死、その後の遺体の処理、母に対する激しい非難の言葉、Rosencrantz と Guildenstern の件等の話が見られる。そして Belleforest はその物語を非キリスト教的な野蛮な要素と見て、*Hamlet* の復讐について正当化が必要と考え改変をしているのである¹⁾。

Hamlet の枠組みは復讐の成就であるから、Shakespeare も *Hamlet* を執筆するにあたって、ルネッサンス人 *Hamlet* の復讐を観客にその正当性をいかにして納得させるかということに全力を注いでいるのである。しかし Shakespeare はその困難な問題を逆手にとり、*Hamlet* に復讐の義務を課すことによって、主人公に死を、人生を、人間と世界との関係を深く考える契機を与え、*Hamlet* を偉大な悲劇に作り上げたのである。nature の意味を検討することによって、復讐の問題を考察するのがこの小論の目的である。それには先ず当時の宇宙観、世界観、人間観について触れておく必要がある。

T. McAlindon が言うように、ルネッサンスの時代は宇宙構造について大いに議論がなされた時代であり、それとともに人間の本性 (nature of mankind) の研究が行われ、それも宇宙という文脈のなかでなされ、そこでは人間は小宇宙 (microcosm) と呼ばれ、大宇宙 (macrocosm) と同じ物質から構成され、同じ原理で作用し、両者は緊密な関係があると見做されていたのである。したがって人間が中心の位置を与えられている世界のエムブレムや人間が肉体も精神も天体の影響を受けるというエムブレムが多く見られるのである。数字 4 と円のエムブレムは宇宙の構成を表すものである。自然が空気、火、水、土の 4 つの物質から成り立っていることや、その対立が均衡を保ち、変化と恒久、動と静を融和するのである²⁾。

更に T. McAlindon は conflict が nature において第一の勢力であると言う。Heraclitus は世界の秩序が争い (Strife, War, Hatred) であると主張する。それに対して Pythagoras は宇宙においても人間においても対立するものの融合あるいは調和が nature の法則と考えたのである。そしてこの2つの理論から Empedocles が nature は Love と Strife, sympathies と antipathy によって支配されているという論を打ち出したのである。そしてこの学説から世界を concordant discord また discordant concord の世界であるという考えが生まれているのである。相対立する二者から宇宙は成り立っているという学説、また対立する二者が相互依存という nature の原理は古代の神話では広く行き渡っていたという。それが生殖の自然の法則の世界に投影され、その理由で中世、ルネッサンスの偉大な著述家において、特に Shakespeare の作品において男女関係、夫婦関係、家族関係が宇宙観の中心となっていると言うのである³⁾。

そもそも nature という語はラテン語の natura に由来する。そしてその natura はギリシャ語 physis から来ているのである。そのことに関連して、廣川洋一氏は Socrates 以前の自然概念について述べているところで、全自然、自然万有、自然総体を端的に言い表す言葉を示すのは困難であるとしながらも、physis であろうと言い、最初に用いたのは Homer で、草木の成長・発育の結果としての形姿を意味し、Empedocles ではものの誕生・起源を表し、それから離れて性格・本性を意味するようになったことを指摘する。次に自然全体を表す言葉として、Heraclitus や Anaximenes の例を挙げて、panta を挙げている。もう1つの言葉は cosmos である。そして自然全体を意味する語は panta と cosmos が前6世紀後半に、physis が半世紀ほど遅れて使われるようになったと述べ、更に Anaximenes の「空気である私たちの魂が私たちをしっかりと掌握しているのと同じように、氣息と空気が宇宙世界全体(コスモス)を包み囲んでいる」という言葉には、自然世界と人間、macrocosm と microcosm の対応関係が見られることを指摘している⁴⁾。ここにルネッサンスの宇宙観、世界観、人間観の源流が見られる。

また Edgar C. Knowlton は Shakespeare の思想は自然観の歴史と深くむすび

ついていると述べ、その自然観は次のように要約している。

God is good, and so is Nature, the divine agent, His agent. Man must follow the law of nature, which is the same as the law of reason. This principle postulates the existence of free will, urges the ideal of the golden mean, and involves discipline not for its own sake but the sake of a higher purpose. ...The purposes of conduct and of art are to know Nature and to follow her, by reason to learn her principles, to practise them, and not to eliminate feeling.

そしてこれが Plato, Aristotle からルネッサンスまでの伝統的な自然観であると言う⁵⁾。Robin Headlam Wells は、ルネッサンスが中世から古代ギリシャ・中世哲学の宇宙理論を引き継いでおり、その中でもっとも知られていたのが ‘Chain of Being’ (存在の環)であり、それは世界秩序の静的な象徴でなく、ルネッサンス・ヒューマニストにとって向上へあるいは墮落への個人の潜在力を表す動的な象徴であったと述べ、ルネッサンス・ヒューマニストも神学者も共に墮落以前の世界においては感情が理性に支配されていたが、墮落後では人間は生来の性質を失い、その故にかつての神のごとき理性を有すると同時に、衝動に支配される獣性をも有するという世界の中でユニークな地位を占めていると信じていたと述べている⁶⁾。

しかしこうした人間の本性が善だという人間観に疑問を挟む新しい人間観が台頭し始める。R. H. Wells は本来善なる人間という考えに疑義を挟んだ人物として、*The Institution of Christian Religion* において人間が本質的に偉大だとするヒューマニストの考えを非難する Calvin、人間は生来邪悪だとする Machiavelli、*Apology for Raimond Sebond* において人間は自惚れが強く、横柄であると述べている Montaigne の3人を挙げている⁷⁾。当時このように伝統的な思想と新しい思想が拮抗する状況であったことを心に留めたうえで、nature の意味と *Hamlet* について考察する。最初に nature という言葉を口にするのは Claudius である。では Claudius は nature をどのような意味に用いているのだろうか。

第1幕第2場で先王 Hamlet の死後2ヶ月余りで王位を継ぎ、寡婦の

Gertrude を妃に迎えた Claudius は兄王 Hamlet の死を嘆き悲しむのは nature に従うことであるが、生きるためには自分たちのことも考えなければならない。つまり(自然の感情)nature を抑えて(分別)discretion によって Gertrude を妻にしたと語る。確かに old Fortinbras が old Hamlet との一騎打ちに敗れて失った土地を奪い返そうと企んでいる王子 Fortinbras がいる。しかしそれより己の秘密を隠し、先王の死を嘆く風を装うことが必要である。兄殺しを行い、その死を嘆くことが nature と言う。Claudius は嘆きを装い、nature を装っているだけである。父の死を嘆き悲しむ Hamlet に、「人間最初の死体」the first corse (I.ii.105)から今日亡くなった人に至るまで、父親の死というものは必然のことでありと理性は叫んできたと言う。the first corse は多くの注釈の指摘する通り、人類最初の亡きがらとは Abel のことだから、弟殺しを指すわけで、兄殺しの罪を犯した Claudius の口から出ることは極めてアイロニカルである。更に Claudius は、亡くなった父の喪に服することは「気立てが優しく立派である」“’Tis sweet and commendable in your nature,” (I. ii.87)が、何時までも父の死の悲しみに浸っているのは男らしくない振る舞いであり、死者に対する罪であり、「自然に対する罪」“a fault to nature” (I.ii.102)であると言う。この箇所について Jenkins は ‘offence against the natural order of things’ (自然の条理に対する罪)と注解を付けている⁸⁾。

そしてこれは Claudius 自身に向けられるべき罪であることがわかってくる。先王のことは過去のことにしたくない Claudius は nature に訴えることによって、Hamlet が父への思慕を態度に出すのを何としても止めさせたい意向が働いている。nature を恣意的に用いているのである。

Hamlet における nature の意味を考えるに際して重要なのは亡霊の用いる nature であろう。亡霊は Hamlet と 2 人だけになると、自分が Hamlet の父の亡霊であることを告げ、「生前」“my days of nature” (I.v.12)に犯した罪が浄化されるまで業火の中で苦しまなければならないこと、それ以上の恐ろしいことは生身の人間に語るのを禁じられていることを述べる。そしてもしそなたが父を愛したことがあるなら、「やつの邪な極悪非道の人殺しの復讐をしてくれ」“Revenge his foul and most unnatural murder.” (I.v.25)と Hamlet に訴え

る。“Murder!”と驚きの声をあげる Hamlet に亡霊は「人殺しはいかに斟酌しても極悪であるが、これは極悪、奇怪、非道なものだ」“Murder most foul, as in the best it is,/But this most foul, strange and unnatural.” (I.v.27-28)と再度 *unnatural* という言葉を使って、この行為が許しがたい行為であると訴えるのである。この *unnatural* に関して Jenkins は *The reiteration of this word (from l. 25) emphasizes the violation of the natural tie between kin. Its sense is also reinforced by strange.*と述べているように⁹⁾、人間が人間を殺すのは非道であるが、弟が兄を殺すということは肉親の自然な絆を断つ悪逆非道な行為なのである。

Schmidt は *unnatural* について、1) *contrary to the laws and order of nature.* 2) *contrary to the feelings of human nature, violating the first principles of nature, inhuman in the highest degree; used of persons:* の 2 項目に分けて、この *unnatural* は 2) の意味に該当するとしている。

しかし当時の自然観を考えると、‘*contrary to the laws and order of nature*’ の意味を含んでいるように思われる。亡霊はこの最も基本的な掟を破った行為は天人共に許されざる大罪であると訴えているのである。Bernard Lott はこの *unnatural* について、*For Shakespeare’s audiences, this word was sharper in its meaning and implications than it is today. To do something ‘unnatural’ was to act ‘against nature’, i.e. to break away from the proper order of things in the universe (like stars moving out of their ‘spheres’). To be ‘natural’ was to have ‘natural’ feelings of kindness and sympathy towards others, and to lack these feelings was to be ‘unnatural’.* In this sense the murder of a brother is supremely ‘unnatural’. という注釈を施している¹⁰⁾。星はそれぞれ天球層が決まっていて、その中で運行し、万物が秩序ある位階層にあって、1つでも指定された場所を逸脱することは他に連鎖して秩序の崩壊を来すという伝統的な宇宙観を踏まえているのである。

そして亡霊は罪業の真っ盛りに、聖餐も受けずに、罪障を負ったまま実の弟 Claudius によって命を奪われた次第を語り、「そなたに親を思う情があるなら、このままにしておいてはならぬ、デンマーク王家の臥所を情欲と忌ま

わしい不義の床にしておいてはならぬ” “If thou has nature in thee, bear it not, / Let not the royal bed of Denmark be / A couch for luxury and damned incest.” (I.v.81-83)と Hamlet に命ずるのである。父をかつて愛したことがあるなら、nature にもとった murder の復讐をするよう訴え、更に Hamlet に nature があるなら、Claudius をこのまま放って置いてはならないと訴える。この nature について Jenkins は natural feeling と注解を施し、(III.ii.384)の nature と比較するように言っている¹¹⁾。非業の死を遂げた父の復讐をすることが nature に適うことであると亡霊は言うのである。(III.ii.384)の nature というのは「おお、心よ、子としての情愛を失くしてはならぬ” “O heart, lose not thy nature.”” という Hamlet の言葉である。この nature について Jenkins は natural feeling, filial affection. The same ‘nature’ as demands revenge requires him to spare his mother.と注解を加えているが¹²⁾、このジレンマが Hamlet の悩みなのである。自分の nature を失うことは unnatural なことである。つまり母に手を掛けて、死にいたらしめるような事態を意味する言葉である。劇中劇によって、父王を殺害したのは叔父 Claudius であるという亡霊の言葉を真実であると Hamlet は確信する。亡霊が Hamlet に毒殺の秘密を語った際、母の関与については曖昧な言葉でしか言わなかった。だがその時「おお、なんと邪悪な女” “O most pernicious woman!” (I.v.105)” と言い、Hamlet は母に疑念を抱いた。しかし亡霊は母に手をかけてはならない、彼女の良心に委ねるようにと Hamlet に命じている。母は、仕組んだ芝居を Claudius に対する度の過ぎたいやがらせと考えて、自分の行動を厳しく非難するにちがいない。Gertrude は父の死を嘆き悲しむ Hamlet を慰める意図があったとしても、死は「当たり前の」common 出来事であり、生あるものは必ず死ぬものと諭す母に、Hamlet が「ええ、母上、当たり前のことです” “Ay, madam, it is common.” (I.ii.74)” と応えると、「それでは、何故あなたには特別のこのように見えるのですか” “If it be, / Why seems it so particular with thee?” (I.ii.74-75)” という無神経な母である。場合によっては亡霊の語った秘密を告げ、Claudius の父殺害に加担したのではないかと詰問する事態になり、いやでも母との事実関係が明らかになるかもしれない。もし加担していたということが事実である

としたら、母に対してどんなことでもやりかねないという不安を感じているのである。今は魔女が活動する真夜中である。人間の生き血をも飲み干し、昼間ならおぞましいこともいまならやりかねない殺気だった精神状態であることを意識している。母を殺害したローマ皇帝 Nero のことが頭をかすめ、「(母親殺しの)ネロの魂をこの堅固な胸にけっして入りこませてはならぬ。残酷であっても、子としての情愛に背くまい」“Let not ever / The soul of Nero enter this firm bosom;/ Let be cruel, not unnatural.” (III.ii.385-386)と自らに言い聞かせるのである。

Hamlet は亡霊によって nature に従うことを求められており、それは Claudius に対して復讐することを意味する。母に手を掛けることが nature に背くことは自明である。それでは父を毒殺した Claudius を復讐して殺すことが nature に適うことであるのか。Hamlet は役者達に nature の中庸ということの重要性を説いている。しかし人生には nature の中庸を守れないことがある。nature は二面性をもっているのである。Hamlet は父王を失った世界には卑しい、野卑なもののみが跋扈していると感じ、「自然界の卑しいけがらわしいものだけが独り占めにしている」“things rank and gross in nature / Possess it merely.” (I.ii.136-137)と心中を吐露している。この in nature について Jenkins は inherent in nature. Shakespeare recognizes that the weeds are a part of natural growth.と注解を施しているが¹³⁾、Empedocles の言うように、nature には対立するもの good と evil, love と hate が存在するということなのである。また Fall 後の世界の状況である。Hamlet は第1幕第4場で亡霊の出現を待つ間、遵守より、破る方が名誉だという夜を徹しての酒盛りの悪習の故に高い文化を誇り、高度の文明社会を築いていても他国から非難を浴びていることに言及して、他の点では立派な人間も、同じように「何かの生まれつきの欠点」“some vicious mole of nature in them”(I. iv. 24) の故に非難を招くと言っている。そして Claudius の秘密を知って、「この世は関節がはずれているのだ。ああ、いまいましい巡り合わせだ、それを正すためにこの世に生まれてきたとは」“The time is out of joint. O cursed spite, / That ever I was born to set it right!” (I.v.196-197)と世の乱れとその是正の困難さを口にする。

Claudius の罪は単なる個人に関わる罪ではないのである。Claudius は nature の中に巢食う害虫であると言うことができる。前に述べたように、Hamlet は芝居を見た Claudius の狼狽振りを目撃することによって亡霊の言葉が真実であると確信した。Gertrude の部屋へ行く途中に、己の罪深さに戦き、祈っている Claudius を目にして、復讐の絶好の機会と見て剣を抜く。しかし祈っている人間を殺すことはその者を天国へやることであり、罪障を負ったまま命を断たれた父の仇を打つことにはならないと思ひ直し、剣を鞘に収めながら次のように言う。

When he is drunk asleep, or in his rage,
Or in th'incestuous pleasure of his bed,
At game a-swearing, or about some act
That has no relish of salvation in't,
Then trip him, that his heels may kick at heaven
And that his soul may be as damn'd and black
As hell, whereto it goes.

(III. iii. 89-95)

酔って眠っているか、怒っているか、
床で邪淫の快楽に耽っているか、賭博をしているか、
罵っているか、またなにか全く救いのない行為を
している時、やつの足をすくってやる、そうすれば
やつの踵が天を蹴り、魂が落ちていく地獄のように
呪われ、真っ黒に染まるように。

Jenkins はこの箇所について18世紀では ‘too horrible to be read or be uttered.’ と感じたのは Dr. Johnson だけではない、現代の人間がそれほど衝撃を受けないのは地獄の存在を信じていないからだと言う。そして最初にそれを遷延の口実と解釈したのは役者の Thos. Sheridan であったが、Wm. Richardson が Hamlet の言葉は本心を表していないと発言して以来、遷延の理由は優柔不断であると主張されるようになった。これが伝統となったが、このような解釈は罪人の苦しみを見て満足するように中世から教わってきた

エリザベス朝の人には考えられなかったことであると言う。しかしそのときの Hamlet の気持が復讐者の気持であったとしても作者がそれを是認したということにはならないと言い、復讐が最も嫌悪感をおこさせる面を見せており、‘drink hot blood’ と言ったときの残忍な気分に対応しい言葉であると言う。そして Hamlet の double-sided nature と double-task の悪い面が一時的に一番強く表面化している Hamlet を示していると結論付けている¹⁴⁾。

しかし Hamlet にこうした感情を抱かせたものは愛する父の非業の死の無念を思いやる心情である。Bradley は Hamlet について父のことに話が及ぶと言葉は快い響きを帯びるようになっていっている¹⁵⁾。Horatio が立派な国王陛下でしたと言うと、Hamlet は「どこから見ても、立派な人間だった。あのような人間には二度とお目にかかれまい」“A was a man, take him for all in all: / I shall not look upon his like again.” (I.ii.167-168) と父の姿を思い浮かべているかのように言う。また祈祷している Claudius を殺せば、天国へ行く、これでは復讐にならないと思直して、見逃すのも父への強い思いの故である。Hamlet は父の死の状況を次のように述べている。

A took my father grossly, full of bread,
 With all his crimes broad blown, as flush as May;
 And how his audit stands who knows save heaven?
 But in our circumstance and course of thought
 'Tis heavy with him.

(III.iii.80-84)

やつは罪業の真っ盛りで、贅沢に耽り、5月の花のように
 咲き誇るあらゆる罪を背負ったままの父上の命を奪ったのだ。
 あの世での審判の罪状は天のみが知っていようが、
 どう考えてみても、罪は軽くはあるまい。

しかし Jenkins は81行の broad blown について Note the conception of sin as natural to growing life. と注しているように¹⁶⁾、Hamlet の父が重罪を犯していたとか、快楽の桜草の道を辿っていたということではない。この世に生を受け、生きていること自体が罪ということなのである。原罪という意識がこの

作品の底流にあるのは明らかである。Hamlet が第2幕第2場で Polonius に役者たちを歓待するようと言うとき、Polonius が「殿下、その者たちを分相応にもてなしいたします」「My lord, I will use them according to their desert.” (II.ii.523)と答えると、Hamlet はすかさず、「とんでもない、もっとよくもてなしてやれ、分相応にもてなしてみろ、鞭を免れるものはいないぞ」「God’s bodkin, man, much better. Use every man after his desert, and who shall scape whipping?» (II.ii.524-525)と言っている。

また尼寺の場でも、Hamlet は「元の台木に美德を接木しても元の性質は抜けないから」「...for virtue cannot so inoculate our old stock but we shall relish of it.” (III.i.117-118)と言っている。更に Hamlet は Ophelia に対して、

Get thee to a nunnery. Why, wouldst thou be a breeder of sinners? I am myself indifferent honest, but yet I could accuse me of such things that it were better my mother had not borne me. I am very proud, revengeful, ambitious, with more offences at my beck than I have thoughts to put them in, imagination to give them shape, or time to act them in. What should such fellows as I do crawling between earth and heaven? We are arrant knaves all, believe none of us.

(III.i.121-139)

尼寺へ行くがいい。罪びとを生みたいのか。

私は相当に誠実な人間だが、それでも母が産んでくれなかった方がよかったと思うような事でいくらかでも責めようと思えば責められるほどだ。傲慢で、復讐心が強く、野心満々で、考えにまとめたり、想像で形を整えたり、実行する時間もないほどの多くの罪を犯しかねないのだ。このようなやからが天地の間を這いまわってなにをしようというのだ。我々はみな大悪党だ。誰一人信じるな。

と言っている。ここでは Hamlet は多少偽悪家の面を見せてはいるが、世の有様を見て、人間の本性について考えているままを語っているのである。

Hamlet は人間性について、父をその典型として、「人間はなんという傑作か、理性は高貴で、才能は限りなく、姿と振る舞いは適切で立派だ、行動は天使さながら、理解力は神さながらで、この世の美、万物の霊長」“What piece of work is a man, / how noble in reason, how infinite in faculties, in form / and moving how express and admirable, in action / how like an angel, in apprehension how like a god : / the beauty of the world, the paragon of animals—” (II.ii.301-307) と言っているように、かつては人間の威厳、崇高さを信じていたと考えてよいだろう。父の非業の死とその後の母の行状に接した Hamlet の人間観は180度転回する。ここには Calvin や Machiavelli や Montaigne の人間観が垣間見られるのである。Claudius は一度犯した罪を隠蔽するために罪を重ねて行く。一時不意を突かれて狼狽し、「最初の最古の呪い」“the primal eldest curse” (III.iii.37) を伴う己の罪深さに戦くが、罪を犯して手に入れたものを手放すつもりは毛頭ない。それどころか秘密を知っている Hamlet の命を狙って先手を打つ。Polonius の事件を口実に Hamlet を英国へ遣って、英国王に殺させようと企む。それが失敗すると、Laertes を利用して Hamlet を亡きものにしようと策を弄するのである。Hamlet が航海から帰還した経緯を語ると、何という国王でございましょうという Horatio の言葉を受けて、Hamlet は、

Does it not, think thee, stand me now upon—
 He that hath kill'd my king and whor'd my mother,
 Popp'd in between th' election and my hopes,
 Thrown out his angle for my proper life
 And with such coz'nage—is't not perfect conscience,
 To quit him with this arm? And is't not to be damn'd
 To let this canker of our nature come
 In further evil?

(V. ii. 63-70)

こうなったら、私の義務ではないのか。王であった父を殺し、母を汚し、私の希望の王位を横取りし、更にこの命を狙ったやつ、それにあのような策を弄して。あんなやつをこの腕で片付けることこそ良心にかなうことではないのか。我々人間に対するこの害虫を蔓延らせて悪を重ねさせることこそ墮地獄の罪に値するのではないのか。

と語っているように、Claudius を *this canker of our nature* であると言う。Jenkins は *canker* について、*a spreading sore - and thus a corruption inherent in our 'nature', rather than (as Schmidt) a grub preying on it.* と注を付けているが¹⁷⁾、これまでの *nature* の意味を考えると、どちらの意味をも有しているように思われる。Claudius は *nature* のなかの膿であり、*nature* を損なう害虫である。国王を殺害し、母を汚し、王位継承権を篡奪し、あまつさえその罪を隠蔽するために、Hamlet の命まで奪おうとしているのである。Claudius は目的の為には手段を選ばない卑劣な人間である。Hamlet は無鉄砲がかえって身を救い、見つけ出した王の英国王への親書を書き替えた時、署名用の父王の印章を持っていたことに摂理を感じたと言う。そして Laertes との御前試合に胸騒ぎを覚えると告げると、それなら試合を中止するようにと Horatio が言うと、Hamlet は「ちっともそんな必要はない。前兆などに気かけはしない。雀一羽落ちるにも摂理がある」“Not a whit. We defy augury. There is special providence in the fall of a sparrow.” (Vii.215-216) と言い、更に「覚悟がすべてだ」“The readiness is all.” (Vii.218) と覚悟を決める。これは G. R. Hibbard が言うように、キリスト教的諦念ではなく、必要なら、死の心構えとともに行動の心構えでもあるのだ¹⁸⁾。

Hamlet の *double-sided nature* に悪の一面があるとすれば、それを浮き彫りにするのは G. R. Hibbard が言うように¹⁹⁾、*lex talionis* の観念である。Hamlet の心情には父王の無念さがある。Hamlet は誇り高い、自尊心の強い皇太子である。Claudius は大罪を犯した人間であるが、今は国王である。Hamlet をおいて誰が Claudius を裁けるだろうか。無念さは Hamlet を通して観客に伝えられる。Claudius は卑劣な奸策を練り、幾重にも Hamlet に罠を仕掛ける。し

かしそれが「手許が狂って張本人たちの頭に落ちた策略」“purposes mistook / Fall'n on the inventors' heads” (Vii.389) と Horatio が言うように、計った者の上に降りかかるのである。母を死にやった毒杯を Claudius の口に注ぎ込み、Laertes の毒を塗った剣で Claudius を刺し、Hamlet の正義は成就する。「罪の価は死」‘the wages of sin is death.’ (Rom. 6:23) であり、Claudius の死はまさしく「非道の行為」“unnatural acts” (V. ii. 386) の報いである。この unnatural は against nature の意味であり、その nature にはこれまで述べてきた宇宙観、自然観の意味が込められているのである。

テキストの引用は、Harold Jenkins, ed., *Hamlet*, The Arden Shakespeare, Methuen, 1982. による。

- 1) Philip Edwards, ed., *Hamlet* (The New Cambridge Shakespeare), Cambridge U. P., 1985, p.1.
- 2) T. McAlindon, *Shakespeare's tragic cosmos*, Cambridge U. P., 1991, p.3.
- 3) T. McAlindon, *ibid.*, p.6.
- 4) 廣川洋一、「ソクラテス以前における自然概念」、上智大学中世思想研究所編、『古代の自然観』、創文社、1989、pp.1-10, p.21.
- 5) Edgar C. Knowlton, “Nature and Shakespeare”, PMLA, LI, 1936, p.719.
- 6) Robin Headlam Wells, *Shakespeare, and Politics and The State*, Macmillan, 1986, p.5.
- 7) Robin Headlam Wells, *ibid.*, p.22, p.26, p.159.
- 8) Harold Jenkins, ed., *Hamlet* (The Arden Shakespeare), Methuen & Co. Ltd., 1985. note.
- 9) Harold Jenkins, *ibid.*, note.
- 10) Bernard Lott, ed., *Hamlet*, Longman, 1970, note.
- 11) Harold Jenkins, *op. cit.*, note.
- 12) Harold Jenkins, *ibid.*, note.
- 13) Harold Jenkins, *ibid.*, note.
- 14) Harold Jenkins, *ibid.*, longer note.
- 15) A. C. Bradley, *Shakespearean Tragedy*, Macmillan & Co. Ltd., 1956, p.111.
- 16) Harold Jenkins, *op. cit.*, note.
- 17) Harold Jenkins, *ibid.*, note.
- 18) H. R. Hibbard, *Hamlet* (The Oxford Shakespeare), Oxford U. P., 1978, p.65.
- 19) H. R. Hibbard, *ibid.*, p.56.

第十二章

『オセロ』 *Othello*

Shakespeare では nature の語の使用頻出度が極めて高い。nature は natural や unnatural などの派生語を含めると、Shakespeare の作品には523回余使用されていると言われている。John Danbyはその著 *Shakespeare's Doctrine of Nature* において *King Lear* では40回以上、*Timon of Athens* で25回、*Macbeth* では28回使用されていると指摘している¹⁾。*Othello* においても nature の語が *King Lear* や *Macbeth* に劣らず重要な役割を有している。小論はこの nature が *Othello* においてどのような意味と役割とを担っているか明らかにすることである。

Othello に己の罪を考えよと言われ、自分の罪は夫を愛していることであると言う Desdemona に対して、Othello はその故に殺すのだと言う。その理不尽な言葉を聞いて、Desdemona は「愛しているから殺されるなんて自然の条理に反します」“That death's unnatural that kills for loving.” (Vii.42)と叫ぶ。unnatural は against nature の意味であり、この nature の意味は明らかである。観客はこの nature の意味を即座に理解し、Othello の行為が unnatural であることを認識する。L. C. Knights は ‘Killing may be common in wild nature, but it is not natural to man as man; it is a violation on his essential humanity.’ と述べている²⁾。*Hamlet* において Claudius の所業に対し、亡霊は Hamlet に「非道な、最も人情に反した殺人の復讐をせよ」“Revenge his foul and most unnatural murder.” (I.v.25)と命じ、「殺人はどんなに斟酌しても、非道であるが、これは最も非道で、忌まわしく、人情にもとっている」“Murder most foul, as in the best it is; / But this most foul, strange, and unnatural.” (I.v.27-28)と Claudius の行為の非道さを訴える。Claudius は国王であり、兄でもある人物を毒殺したのであって、ただ単に人が人を殺すというだけではない。故 Hamlet は神の代理である王であり、かつ肉親である。国王であり、実の兄でもある故 Hamlet を殺害するということは極悪非道の行為である。unnatural という語が繰り返して用いられているのは大きな意味を有するのである。それでは Othello は何故愛の故に殺すという unnatural な罪を犯すのであろうか。また Othello

とはどういう人物なのであろうか。

I

Othello が「誠実で、情愛のある、高潔な性格」“of a constant, loving, noble nature,” (II.i.287)であるということは極めて重要である。Shakespeare は肌の色を除いて Othello がすべての点で理想的な人物に描こうとしているのであり、特に Othello の高潔さを強調していると考えられる。娘の Desdemona が Othello と秘密裏に結婚したという知らせを受けた際、Brabantio は次のように独りつぶやく。

This accident is not unlike my dream.

Belief of it oppresses me already.

(I.i.140-141)

この件は見た夢に似ていなくもない。

こうなるのではと気懸かりであった。

この言葉は Brabantio が Othello の高潔な人柄を無意識のうちに認識していたということを明らかにしている。だからこそ Brabantio は Othello を幾度も自宅に招き、これまで彼が辿った波乱万丈の話に娘ともども耳を傾けてきたのである。また Othello の悠揚迫らぬ態度は、Desdemona が出奔したとの知らせを聞き、役人とともに剣を抜いて、捕らえようとやって来た時の Brabantio の狼狽ぶりと対照的に示される。その際 Othello は威厳を保ち、落ち着き払った言葉で次のように言う。

Keep up your bright swords, for the dew will rust 'em;

Good signor, you shall more command with years

Than with your weapons.

(I.ii.59-61)

きらめく剣を鞘におさめよ。夜露で錆びようから。

閣下、閣下は武器でよりも、年の功で命令なさる方が

よろしいでしょう。

元老院議員の Brabantio をたしなめる Othello の言葉は観客に彼の威厳に満

ちた態度を強烈に印象付けるものである。ここでは Othello と Brabantio との立場が逆転しているのである。元老院議員であり、年功を積んだ Brabantio は事態收拾には言論を用いるべきであるのに、武力に訴えようとするが、軍人である Othello は言葉を用いるのである。また Venice の全元老院議員は、Othello が「感情に心を揺るがされることのなかった高潔な人柄の人物」“the noble nature, / Whom passion could not shake...” (IV.i.265-266)であることを認めていたのである。

Othello を誹謗する Brabantio に我慢がならないと言って、Iago が怒って見せるとき、Othello は Iago の言葉を意に介さず、ただ「放っておくがいい」“’Tis better as it is.” (I.ii.6)と言うだけである。このように Shakespeare は主人公の寛大さをも強調するのである。Iago は Othello が「率直で、隠し立てなどしない人柄の」“of a free and open nature.” (I.iii.398)人物であると言い、それを付け入る隙と見るのだが、まさにその通りの寛容な人物なのである。Walter Raleigh は Othello の人柄について、

Everything..., up to the crisis of the play, helps to raise Othello to the top of admiration, and fix him in the affections of the reader:

と言い、更に Shakespeare は Othello を ‘tender, generous, brave, and utterly magnanimous.’ である人物に描いていると述べている³⁾。

また Othello が Desdemona と知り合ってから結婚に至るまでの経緯は極めて自然な成り行きとして描かれていると言えよう。Othello は7歳以来戦塵にまみれる生活を送り、幾度も危険をかいくぐり、独力で今日の地位を築いてきたのである。そして Desdemona の愛は Othello にとって栄光の証なのである。また Othello が何よりも重んじていた自由の身を潔く捨てる気になったのも Desdemona への愛であったと言う。Desdemona との愛の経緯を元老院議員の前で語るよう要請されると、Desdemona との出会いから彼女の愛を勝ち得るまでを語り、更に次のように言う。

She loved me for the dangers I had pass'd,
And I lov'd her that she did pity them.

(I.iii.168-169)

私が冒した危険ゆえに彼女は私を愛してくれましたし、
私も、私に同情してくれました故に彼女を愛しました。

これまで数奇な生涯を送り、あらゆる危険を人知の限りを尽くして乗り越えてきた Othello を Desdemona は愛し、Othello は己に対する理解と、優しさの故に Desdemona を愛したのである。Othello の言葉は Duke の心を強く動かし、Duke は「この話を聞けばわしの娘も心を動かされるだろう」“I think this tale would win my daughters, too.” (I.iii.172) と Othello に共感を示すのである。

この Duke の言葉は Othello に対する Brabantio の非難が的外れであることを示すものであり、またこの劇で重要な意味を持っているのである。つまり Venice 共和国の最高責任者である Duke が Othello の結婚の経緯に非がないことを認めたのである。

他方 Desdemona は Othello と会うことによって新しい女性に生まれ変わり、人生観、社会観を変えるまでに至るのである。Desdemona は「決して大胆などでなく、大変おっとりとしていて、物静かで、いかなる心の動きにも気付くと顔を赤らめる娘」“maiden never bold of spirit, / So still and quiet, that her motion / Blush'd at her self.” (I.iii.95-97) と言われるような女性であったのだが、夫と父のどちらを選ぶか問われた時、元老院議員の並み居る前で、自分の正しいと信ずることを躊躇うことなく毅然として次のように言う。

I do perceive here a divided duty.
To you I am bound for life and education:
My life and education both learn me
How to respect you, you are lord of all my duty,
I am hitherto your daughter: but here's my husband:
And so much duty as my mother showed
To you, preferring you before her father,
So much I challenge that I may profess
Due to the Moor my lord.

(I.iii.181-189)

いま義務は2つに分かれています。

生み育ててくださったことでお父様に恩義がございます。
その生み育ててくださいましたことでお父様を敬うべきであり、
あらゆる義務を果たすべきことを知っております。これまで
私はお父様の娘でしたから。でもいまは私の夫がおります。
それでお母様がその父親よりもお父様を大事になさり、
妻としての務めを果たされました。それと同じ務めを私も
主人のムーア様に捧げたいと思います。

この台詞は Desdemona が Othello への愛に目覚め、物静かで、内気な乙女から 1 人の女性に成長し、さまざまな障害をもものともせず、自分の信念にしたがって生きようとする女性であることを示している。Desdemona は新しい女性であるが、Cordelia の意味においてである。これは自分が住み、家長である父が己の好む男性と娘を結婚させようとする社会の風俗習慣から自由である Desdemona を示している。彼女は自ら Othello を愛し選んだ女性なのである。他の人には見えない美を見出させるものが真の愛である。Desdemona はそのことを「オセロ様のお顔をその心に見ました」「I saw Othello's visage in his mind.」(I.iii.253)と言っているのである。

Desdemona はまた Othello の名誉と勇気に自分の魂と運命を捧げたとも述べている。

...to his honours, and his valiant parts
Did I my soul and fortunes consecrate,
(I.iii.254-255)

オセロ様の名誉と勇気に私の魂と運命を
捧げました。

Desdemona は Othello の勇気と男らしさの故に心を引かれたのであり、Othello は自分を理解してくれる Desdemona を愛しく思い、社会的地位や財産の故でなく、己の人柄の故に愛してくれたことを知っている。Othello もまた Desdemona の思いやりと優しさによって別の人間に変わったのである。G. R. Hibbard は次のように言っている。

... just as Othello has, in part at least, created the Desdemona that he

loves, actualizing possibilities within her that have hitherto lain dormant, so she, in her love for him, has, as it were, completed him by recognizing in him a beauty invisible to other eyes yet indubitably there.⁴⁾

Desdemona は Othello にとって何にも変えがたい、絶対的な価値ある存在なのである。

Bradshaw は “Nature and Value” の章で nature と value との関わりを論じている。*Troilus and Cressida* において、Hector が Troilus に向かって、Helen は Troy 方に留めてその犠牲を払うだけの値打ちはないと主張すると、Troilus は「何だって値打ちなんてものは人が付けるものです」「What's aught but as 'tis valued?» (II.ii.52) と言り返す。それに対して Hector は

But value dwells not in particular will;
It holds his estimate and dignity
As well wherein 'tis precious of itself
As in the prizer.

(II.ii.53-60)

だが、ものの値打ちは個人的な気持ちによるのではない。
そのものが価値を有するから値打ちがあるのであって、
評価する者が値を付けるからだけではない。

と反論する。この議論において、Bradshaw によれば、Hector は値打ちというものは個人の気持ちだけで決まるのではなく、そのものに本質的な価値があり、優れた知性のある人間が本質的な値打ちを識別できるので言っているのである。Troilus は客観的なものの値打ちなど存在しないと言うが、Hector にとっては、ものに内在する本質的な値打ちが存在するということになる⁵⁾。値打ちをつけるということ、つまり評価の問題は *Othello* において nature との関係で重要である。

また Bradshaw が言うように、Hector の nature 観は *natura naturans*, of 'great creating Nature' に対するヒューマニスト的な見方であり、この nature 観は Hector のいう、ものや人に本質的な価値を認める価値観を伴うのである。Othello はヒューマニスト的な自然観を有するが故に Desdemona に価値を認

め、Desdemona が己を生かし、己の人生に意味を付与する存在であると感じているのである⁶⁾。Othello は Iago に謀られて、Desdemona と Cassio との間を疑い、苦しい胸中を吐露する時、次のように言う。

But there where I have garnered up my heart,
Where either I must live or bear no life,
The fountain from the which my current runs...
(IV.ii.58-60)

だが、私の心を大事にしまっている場所、
私の生甲斐がかかっている所、
わが命の川の流れる源。

Bradshaw は理想主義的な Othello がまず Desdemona に掛け替えのない意味を付与し、心を託し、Desdemona を storehouse of value とし、そして彼女を彼の人生に意味と値打ちを与える泉に例えていると言う⁷⁾。

生きがいであり、人生に意味を与える存在である Desdemona と Cassio との不倫は Othello からその生きがいを奪うことである。Othello は肉体的な苦痛ならどんなことにも耐えることができるが、この生きがいを奪われる苦痛には耐えられないのである。それでは Othello と Desdemona とが生活を送っている世界は一体どんな世界なのであろうか。

II

彼らが住む Venice 共和国は Othello と Desdemona の精神世界と対照的な世界である。A. Sewell がその世界を次のように述べている。

It is a world in which soldiers compete for office and prestige. It is a world in which, as Emilia well knows, men will do each other's officer in the women's beds. It is a world in which lust flaunts its finery and is not abashed. It is a world, indeed, from which spirit has been drained, and all is measured by use and entertainment and position. It is a kingdom of means, not ends.⁸⁾

第1幕第1場で観客は早々に Iago が Othello の副官の職に就けるよう

Venice の 3 人の大物を買収しようとしたことが示され、腐敗した世界を目撃する。cynic である Iago は女性の貞節などを信じず、Othello と自分の妻 Emilia との関係まで疑い、また Cassio と Emilia との関係も疑っているのである。Emilia は事情しだいでは浮気をしないでもないとは Desdemona にはっきり言う。また Roderigo は財力によって Desdemona の愛を得ることができると考えている。このようにして Othello と Desdemona の精神性と対照させることにより、Shakespeare は Iago や Venice 社会の世俗性を強調しているのである。

Brabantio は世俗的世界の一員であり、元老院議員であって、体制の擁護者である。そして Brabantio は Othello の幸福を最初に揺るがし、Othello を悲劇に至らしめる遠因となる。彼は Othello の人柄のよさを十分認識しているが、娘との結婚を決して許そうとはしない。2 人の秘密の結婚は Brabantio に大きな衝撃を与える。Desdemona の Othello への愛は世間知らずの初心な娘の愚かさによるものと Brabantio は信じて疑わない。Desdemona のこのような行動は Brabantio にとって「親への裏切り」“O treason of the blood!” (I.i.167) である。この社会は厳しい身分社会であり、他国者との結婚は親や一門への反逆であると Brabantio は考えるのである。Othello は確かに有能で、勇気ある軍人であっても、この社会にとってはアウトサイダーであり、かつ黒人である。それ故に Desdemona と Othello との結婚が「自然の情に逆らった」“in spite of nature” (I.iii.97) 行為であると Brabantio は言うのである。社会体制が真の正義に適っていようとなかろうと、その掟を遵守することが nature の法に適うことであると Brabantio は確信している。したがって Brabantio は Othello と Desdemona の行為は「自然の条理のあらゆる掟に逆らっている」“against all rules of nature” (I.iii.102) と言って非難するのである。そして Brabantio は Othello を「世を欺く者」“an abuser of the world” (I.ii.78) として厳しく糾弾する。Brabantio は Othello に圧力を加え、政治の力を頼んで、Desdemona を彼から引き離そうとする。Othello の行為は社会の慣習に背き、社会の秩序を脅かすものである。このような不埒な行為を許しておくならば、Brabantio は文明社会が崩壊すると次のように言うのである。

... if such actions may passage free,

Bond-slaves, and pagans, shall our statesmen be.

(I.ii.98-99)

このような行為が通用するなら

奴隷や異教徒に我々の国事を任せましょうぞ。

Brabantio は nature を社会の慣習と同一視し、社会的、人種的偏見が根強いその社会の慣習に Othello を従わせようとするのである。しかしそのような社会の慣習が絶対の正義を意味するものではない。観客は、人生観でもあり、世界観ともなっている Brabantio の nature 観に疑問を抱くであろう。

このような Brabantio の信条を継承し、Othello と Desdemona の幸福を完全に破壊するのが Iago である。Iago は小人であって、物質の世界しか理解が及ばないのであり、その知恵は彼の住む卑俗な社会の常識を出ず、彼の独断と偏見の目を通してしかものごとを見ない人物なのである。

Iago はある意味で階級社会を是認する社会的慣習を尊重しているようにみえる。彼も社会秩序の擁護者を演じ、Othello の行為を社会の掟に反するものだと非難するが、実は Iago は Othello が己を退けて、Cassio を副官にしたことに対する私怨を隠している。年功序列の規則が無視されたと嘆く Iago は次のように言う。

Preferment goes by letter and affection,
Not by the old gradation, where each second
Stood heir to the first.

(I.i.35-37)

立身出世は推薦や情実によるのだ、二番目の者が一番目のものの後を継ぐといった昔の順番によるのではないのだ。

ここでは Iago は伝統的な秩序観に立っている。しかし Iago がその立場に立つのはそれが正しいと信じるからではなくて、己に有利に働くからである。また Iago の理性尊重も同様である。もっとも Iago にとって理性というのは己の社会的地位を高め、物質的生活を豊かにする手段となる如才なさを意味するにすぎない。

そして Iago は Othello と対照的な nature に対する見方を示すのである。Bradshaw はヒューマニスト的な自然観とそれと対立する自然観、すなわち Edmund が信奉する the utterly amoral 'Goddess' という自然観は17世紀の最初の10年間に書かれたシェイクスピアの劇に現れる idealists や cynics や nihilists の人物造形に深く関わっていると述べている。そして Iago は the utterly amoral 'Goddess' の信奉者であり、Nature を a merely bestial, amoral process と考えていると述べている⁹⁾。Iago は人間の善性や無私無欲などを信じない cynic である。Bradshaw が言うように、Iago は Othello の幸福を破壊するために、まず Othello 自身を疑わせることによって、Desdemona を疑わせるのである¹⁰⁾。つまり Iago は Othello の nature 観を己の nature 観に引き込むことによって Desdemona を疑わせ、2人を破滅に導くのである。

cynic である Iago にとって、男女の間にあるものは「欲情」“sensuality”で、また「われわれの生まれながらの性質である卑しい欲情」“the / blood and baseness of our natures” (I.iii.328-329) であり、また「激しい情欲」“our raging motions”、「うずく性欲」“our carnal stings”、「奔放な色欲」“our unbitted lusts” 以外のなにもものでもないのである。Iago はその“sensuality”と均衡を保つために理性というものがわれわれになれば「生来の卑しい血気」“the / blood and baseness of our natures” (I.iii.288-289) のためにとんでもないことをやらかすと言うのである。そして Roderigo の言う love というのはそういった欲望の挿し木か接ぎ枝であると Iago は言う。まさかと言う Roderigo に対して、更にそれは「激しい色欲で奔放な肉欲」“a lust of the blood and a permission of / the will.” (I.iii.335-336) なのだと Iago は言っている。これが Iago の人間観であり、human nature に対する見方なのである。

Iago は Roderigo のようなお人よしをいい鴨にし、己の私利私欲のために利用する能力を理性と考え、Othello や Cassio を陥れる能力を己の知性の高さだと信じている。彼は Othello の高潔さを認めても、それを己の目的を果たすための格好の手段としか考えない。Iago にとって高潔さとは相手も同じ考えで行動すると信じる単細胞の、迂闊な性格の謂でしかないのである。そして Iago は男と女とを結びつけるものは「外見の魅力」“loveliness in favour”

や、「年齢が釣り合っていて、風俗習慣も同じで、兩人どちらもきれいな
“sympathy in years, manners and beauties” (II.i.228-9)といった外面的な事柄
であり、Othello がこれらの性質を欠く故に、Desdemona はやがて Othello に
失望し、若くて美男の Cassio に好意を抱くようになると結論付けるのである。
これが Iago にとって nature に適う事象なのである。彼は nature の語を用い
て、「自然な本能に教えられ、彼女はきっと他の誰かを選ぶだろう” “... very
nature / will instruct her in it and compel her to some / choice.” (II.i.23-233)と言
うのである。

そして Iago にとってのこのような nature の観念は、Iago が軽蔑し、馬鹿に
している Roderigo によっても否定される。この判断においては Roderigo の
の方が Iago よりも正しいと観客は認識する。Iago が Desdemona は nature に教
えられて、やがて Cassio に恋するようになると主張するとき、Roderigo はあ
の人がそのようなだなんて信じられない、聖女のような人だもの” “I cannot
believe that in her, she’s full of / most blest condition.” (II.i.247-248)と断言する。
このように Shakespeare は Iago の独断と偏見と nature 観の偏向を強調するの
である。

III

King Lear における Edmund と Iago とは同じマキアベリ主義者として描か
れている。しかし Edmund の自然観、秩序観は Iago のそれと異なるものであ
る。庶子である Edmund は自己実現の障害になる伝統的な秩序を容認するこ
とができない。社会の習慣や慣習は庶子の Edmund にとって「疫病のような
習慣” “the plague of custom” (I.ii.3)であり、「うるさい世間の習慣” “the
curiosity of nations” (I.ii.4)である。アウトサイダーである彼は現状の社会で
は己の居場所を見出すことができない。Edmund が己の目的のために尊重し、
利用することのできるのはジャングルの掟であり、適者生存の原理である。

他方 Iago はいわばインサイダーであり、社会の掟を利用し、それに与ろう
とする。したがって Iago が尊重し、遵守すべきは社会の掟であり、社会的習
慣であると主張するのも不思議ではない。そうしてそれらに反する行為は

unnatural, against nature と Iago は主張するのである。この意味で Iago は伝統的な秩序観、自然観に忠実であるようにみえる。しかしこれは Iago が自己中心的であり、功利主義者であることを示すものに他ならない。このような Iago の自然観は己の意に添わない Cordelia を「自然がわが子と認めるのを恥じるような奴」“a wretch whom Nature is asham'd / Almost t'acknowledge hers.” (I.i.213-214) と言う時の Lear の nature 観に似ている。Lear の nature 観も Iago の nature 観も観客は到底是認することはできないであろう。しかし Iago はその nature 観でもって Othello を破滅に導くのである。

前に述べたように、Othello 自身を疑わせることによって Desdemona を疑わせるように Iago は謀る。そのためには Othello を Iago の世界に引き下ろすことが必要である。Iago は Othello が Venice という社会の生活経験に乏しい点を突き、Othello の nature と Brabantio が信奉する、社会的な nature を混同させることによって Othello を自分の世界に引き込むのである。それは Othello の nature 観を Iago の nature 観に同化させることによって Othello の本来の nature を見失わせることである。Brabantio が別れ際に Othello に対して言った「あの女に気をつけるがいい、ムーア、見る目があるならな。父親を騙したのだ、お前を騙すかもしれない。」“Look to her, Moor, if thou hast eyes to see: / She has deceived her father, and may thee.” (I.iii.293-294) という言葉を思い出させるかのように、Iago は「彼女は父親を欺いて、あなたと結婚したのです」“She did deceive her father, marrying you,” (III.iii.209) と言う。更に Iago は Brabantio の「彼女が見るのを恐れたものと恋に落ちるなどと」

“To fall in love with what she feared to look on?” (I.iii.99) という言葉を「あのの方があなたの顔に震え恐れている風に見えた時に、あなたを最も愛しておられました」“And when she seem'd to shake and fear your looks, / She lov'd them most.” (III.iii.210-211) と言い換える。

Iago は Desdemona の Othello に対する愛は元々 nature に反するものであると Othello に暗に言うのである。そして「そうだった」“And so she did.” (III.iii.211) と答える Othello は Iago と同じ目で物事を見始めていることを示している。この言葉は Othello が Iago の世界に引き摺り下ろされつつある最

初の徴であると言えよう。Othello が「あれには目があって、わしを選んだのだ」“she had eyes and chose me.” (III.iii.192)と言った際の自信はぐらつき始める。そして Othello の「どうして自然が道を踏み外して」“how nature erring from itself” (III.iii.231)という言葉は Othello が Iago の世界にまた一步踏み入れつつあることを示すものであろう。Othello のその言葉を聞くと、Iago は間髪を入れず、次のように言う。

Not to affect many proposed matches
Of her own clime, complexion and degree,
Whereto we see in all things nature tends;
Fie, one may smell in such a will most rank,
Foul disproportion; thoughts unnatural.

(III.iii.233-237)

どの点から見ても自然の条理に適っていると思われる、
同じ国の、同じ肌色で、同じ身分の男から
申し込まれた結婚話が気に入らずに。
チェ、非常に汚らわしい欲情の匂いがしましょう。
とんでもない不似合なことです。自然の条理に反した考えです。

Iago は Brabantio の nature の観念を継承し、社会の掟に反することを極度に恐れる部外者である Othello の急所を突き、行動の unnaturalness を強調するのである。Iago は同国人で同じ社会的身分の男女の結婚が natural であって、したがって Desdemona と Othello の結婚は“foul disproportion”であり、“thoughts unnatural”だと言うのである。そして社会全体が自分の言い分を是認しているということを強調するかのように“I”ではなく、“one”という言葉で Iago は用いるのである。

そして Othello の「なにかの理由がなければ、人間がこのような暗澹たる激情に身を任せるものだろうか」“Nature / would not invest herself in such shadowing passion / without some instruction” (IV.i.39-41)という言葉は Othello が完全に Iago の世界に落ち込んだことを明白にするものである。それは Othello が物事を Iago の目で見えるようになったということであり、Othello 本

来の nature を喪失し、Iago の nature に取り込まれたことを意味する。その結果 Othello は unnatural な行為を犯すのである。

IV

Shakespeare は *Othello* においては nature の否定的な面を強調しているように思われる。その点では Danby の ‘the optimism of *Macbeth* showed the victory of Nature.’ と ‘the pessimism of *Othello* showed the death of good Othello and immaculate Desdemona.’¹¹⁾ という言葉は納得できるのである。

まず Brabantio が nature を社会の慣習と同一視し、Othello の幸福を脅かす。次に Iago が偏見と欲に歪められた社会の慣習に従うことが nature に適うことであると納得させることによって、Othello の悲劇を完全なものとするのである。Sewell が言うように、*Othello* のテーマは ‘Natural man is at odds with social order.’¹²⁾ であろう。Natural は「誠実で、高潔で、情け深い性格の」“of a constant, noble, loving nature” (II.i.287) の意味と「社会の俗塵にまみれていない」という意味とを併せ持つ。Othello の悲劇は Iago の陰謀によって、己の nature と社会的な nature を混同することによって、そのような彼本来の nature を喪失し、「私の魂の喜び」“my soul’s joy” (II.i.182) であり、愛することがなくなれば、「私の魂は破滅するがよい」“perdition catch my soul” (III.iii.90) と言い、「再び混沌が来たのだ」“Chaos is come again.” (III.iii.92) と言っていたその Desdemona を死に至らしめるのである。また Iago と謀って Desdemona を亡き者にせんと決意しても、Othello は「この世界にあれほどかわいいものはいない。彼女なら皇帝の側にいて、皇帝に命令できるだろう」“O, the / world hath not a sweeter creature: she might lie by / an emperor’s side and command him tasks.” (IV.i.180-181) とおれず、また「畜生」“Hang her,” (IV.i.183) と言いながら、一方で

... I do but say what she is: so

delicate with her needle, and admirable musician, O,
she will sing the savageness out of a bear! Of so high
and plenteous wit and invention!

(IV.i.184-187)

わしはただ彼女のありのままを言っているだけだ。
針仕事も上手だし、音楽もすばらしい。彼女の歌を聴けば
熊もその獐猛さをなくしてしまう。この様に高尚で、豊かな
知性と創意の才。

と芸に秀で、人を魅了してやまない、知性と心の豊かな Desdemona の姿が浮
かんでくるのである。Othello は己に人生の意味と価値とを与えてくれた
Desdemona を殺害するのである。それは “That death’s unnatural that kills for
loving.” と言う Desdemona の言葉通りにまさしく unnatural な行為であった
のである。

Othello の典拠である *Gli Hecatommithi* において、Cassio に相当する Corporal
と夫の間を取り成そうとする Disdemona に対して、ムーア人は怒り、何故親戚
でもない男にそのような肩を持つのかと迫る時、Disdemona はその理由を述
べた後、‘But you Moor are so hot by nature that any little thing moves you to
anger and revenge.’¹³⁾ Ma voi Mori sete di natura tanto caldi, ch’ ogni poco di
cosa vi muove and ira, et a vendetta.¹⁴⁾と不満の言葉を口にする。*Othello* では
Emilia が「嫉妬深くないのですか」“Is he not jealous?” (III.iv.29)と
言う時、Desdemona は「誰が、主人が？あの人生まれ故郷の太陽がそのような
気質をみんな吸い取ってしまったと思います」“Who, he? I think the sun
where he was born / Drew all such humours from him.” (III.iv.30-31)と
言っている¹⁵⁾。また *Othello* に相当するムーア人の夫がすっかり変わってしま
い、その原因を測りかねて、Disdemona は Emilia に相当する旗手の妻に ‘...and I
fear greatly that I shall be a warning to young girls not to marry against their
parents’ wishes; and Italian ladies will learn by my example not to tie themselves
to a man whom Nature, Heaven, and manner of life separate us.’¹⁶⁾ ‘et temo molto
di non essere io quell, che dia essemplio alle giovani di non maritarsi contra il
voler de suoi; et che da me le Donne Italiane imparino, di no si accompagnare
con huomo, cui la Natura, et il Cielo, et il modo della vita disgiunge da noi.’¹⁷⁾と
語る。このような Disdemona の2つの言葉を Shakespeare は完全に無視して
いる。そして

Disdemona の la Natura に対する考えはまさしく Brabantio の nature 観であり、それを継承し、Iago が Othello を陥れるため利用する nature 観である。Shakespeare の Desdemona は最後まで Othello を庇い、彼女の最後の言葉は「やさしい主人によろしく。ああ、さようなら」“Commend me to my kind lord — O, farewell!” (Vii.123)である。Edgar C. Knowlton は A doctrine of Nature constitutes the core of the view life held by Shakespeare. と述べている¹⁸⁾。nature という語を通して *Othello* を見るとき、Shakespeare の芸術観の一端を窺うことができるように思われる。

テキスト E. A. J. Honigmann, ed., *Othello* (The Arden Shakespeare), Thomas Nelson and Sons Ltd. 1997.

Harold Jenkins, ed., *Hamlet* (The Arden Shakespeare), Methuen, 1982.

R. A. Foakes, ed., *King Lear* (The Arden Shakespeare), Thomas Nelson and Sons Ltd., 1997.

- 1) John F. Danby, *Shakespeare's Doctrine of Nature*, London, Faber and Faber, pap. p. 19.
- 2) L. C. Knights, *Some Shakespearean Themes and an Approach to Hamlet*, Penguin Books, pap. p.10.
- 3) Walter Raleigh, *Shakespeare*, London, Macmillan, 1965, p.141.
- 4) G. R. Hibbard, *Shakespeare Survey* 21, Cambridge Univ. Press, 1968, p.44.
- 5) Graham Bradshaw, *Shakespeare's Scepticism*, Sussex, The Harvester Press Limited, 1987, pp.1-2.
- 6) Graham Bradshaw, *ibid.*, pp.4-5.
- 7) Graham Bradshaw, *ibid.*, p.4.
- 8) Arthur Sewell, *Character and Society in Shakespeare*, London, Oxford University Press, 1961, p.93.
- 9) Graham Bradshaw, *op.cit.*, pp.4-5.
- 10) Graham Bradshaw, *ibid.*, p.17.
- 11) John F. Danby, *op. cit.*, p.167.
- 12) Arthur Sewell, *op. cit.*, p.92.
- 13) Geoffrey Bullough, ed., *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*, Vol. VII, p.245
- 14) Horace Howard Furness, ed., *Othello*, A New Variorum Edition, Dover Publicans, Inc., 1963, p.380
- 15) Geoffrey Bullough, *op. cit.*, p.245.
- 16) Geoffrey Bullough, *ibid.*, p.248.
- 17) Horace Howard Furness, *op. cit.*, p.384.
- 18) Edgar C. Knowlton, “Nature and Shakespeare”, PMLA, LI, 1936, p.719.

第十三章

『リア王』 *King Lear*

King Lear を論じる際に問題となるのはテキストに関するものであり、1608年出版の第一クォート版(The First Quarto)と1623年出版の第一フォリオ版(The First Folio)との関係である。「オックスフォード・シェイクスピア全集」の編者は、これまでのクォート版とフォリオ版を校合した合成のテキストでなく、『リア王の物語』*The History of King Lear* (Quarto)と『リア王の悲劇』*The Tragedy of King Lear* (Folio)との独立した2種のテキストとして出版している。そして Shakespeare が最初に書いたのがクォート版であり、その後改訂したのがフォリオ版であるという改訂説 ‘revision theory’ をその序文で述べている¹⁾。

これに対して R. S. White はフォリオ版が最初に書かれ、クォート版がタイトルページにあるとおり国王の御前での上演のため改訂されたという Christopher Worthan の提唱しているもう1つのより有力な説を挙げている²⁾。そして R. S. White は Natural Law の観点から *King Lear* を考察する際フォリオ版もクォート版も Natural Law に関しては重要なテーマをなすが、大きな違いとしてクォート版は Natural Law の問題を明確に提示しており、フォリオ版は大体暗黙裡に提示していると述べて、その理由を Natural Law refrain を有するクォート版の人物や挿話の多くがフォリオ版には現れないが、フォリオ版のアクションには Natural Law 的な解釈を促すものがあると言う³⁾。たとえばクォート版のテキストにのみある従僕たちが Cornwall や Regan に対する非難の言葉を交わす場面 (III.vii.98-106) である。

しかし引用する際は *King Lear* のテキストとしては合成本ではあるが、クォート版にのみ現れるテキストの部分の前後を上付文字 Q で挟み、またフォリオ版にのみ現れるテキスト部分の前後を上付文字 F で挟んでいるアーデン版(The Arden Shakespeare) (third series) を用いている。

1

Lear は己の意に添わなかった Cordelia と親子の縁を切り、隔月交互に百人

の従者とともに滞在することを条件に王国を分割し、Goneril と Regan に与える。しかし Lear は最初に身を寄せた Goneril から冷遇を受けて怒り、Goneril と違って大事にしてくれると信じていた Regan からひどい仕打ちに遭う。Lear は Regan の心が理解できずに、

Then let them anatomize Regan ; See what breeds
about her heart. Is there any cause in nature that make
these hard hearts ?

(III. iv. 73-75)

ではリーガンを解剖してもらおう。あれの心臓に何が
生えているか見てもらおう。自然にこのような堅い心臓を
造り出す何か原因があるのだろうか。

と言って、nature にはこのような薄情な心を生む原因が何かあるのだろうか
と nature に疑いの目を向ける。そして Lear によるこの原因を探求する過程
がこの作品の主題だということができる。

nature という語は *King Lear* において多様な意味で用いられている。まず
nature の意味を見ておくことが必要であろう。The New Shakespeare の *King
Lear* には nature の意味が7通りに分類されている。(i)として the goddess
personifying the forces that create the phenomena of the material world とある。
いわゆる能産的自然、造化の女神である。(ii)は the natural order of things
で、自然の条理・理法である。(iii)は human nature, the human race であり、
人間性、人類の意味である。(iv)は character, disposition で、性格、性質を
指す。(v)は natural affection between relatives—filial affection 及び parental
affection を挙げている。身内間の自然な情愛—親に対する子の情愛及び子
に対する親の情愛である。(vi)は bodily constitution, vital functions, natural
powers, natural life であり、体質、活力、体力、生命を意味するのである。(vii)
として natural impulse, as opposed to traditions and customs of society とあり、
社会の伝統や慣習に対立する衝動である⁴⁾。

また英語の nature という語はラテン語の natura に由来しており、それはまた
ギリシャ語の physis から来ているのである。更に *OED* の nature の項に The

native English word is kind *n.*と説明があるように、*natura* に相当する固有の英語は *kind* である。*King Lear* の典拠の1つとされる『レア王年代記』*The True Chronicle Historie of King Leir* においても *nature* や *kind* の語が頻出する。そして T. McAlindon は『レア王』*King Lear* には *kind* とその派生語が40回余り用いられており *love-contest* において、*love* でなくて *kind* を用いて、‘Which of you three to me would prove most kind’ (line 233) としているのであり、『レア王』の著者は *to be kind* は *to be natural* (*loving, compassionate*) という意味であり、*to be unkind* は *to be unnatural* という意味であることは当然であるとして、そういう意味を内包する *kind* という語の地口 (*pun*) を絶えず用いていると述べている。更に Shakespeare においても、Regan のことを Lear は「わたしにはもう1人娘がいる、あれはきっと孝心厚く、やさしくしてくれよう」「I have another daughter, / Who I am sure is kind and comfortable :” (I.iv.298) と言う。そして Lear が Regan の館に出かける際に、Fool はその娘は“kindly” (I.v.14) に迎えてくれるだろうと答えるが、*kindly* は「狼のような気性にしがって」「according to her (wolvish) nature or kind” (I.V.13) つまり「残酷に」の意味をきかせていることを指摘している⁵⁾。*King Lear* においても *nature* との関わりにおいて *kind* とその派生語は頻出するのである。その *nature* との関連で当時の自然観について見ておこう。

Edgar C. Knowlton は自然観 (*concept of Nature*) について次のように要約している。

God is good, and so is Nature, the divine agent, His agent. Man must follow the law of nature, which is the same as the law of reason. This principle postulates the existence of free will, urges the ideal of the golden mean, and involves discipline not for its own sake but the sake of a higher purpose….

The purpose of conduct and of art are to know Nature and to follow her, by reason to learn her principles, to practice them, and not to eliminate feeling. そしてこの自然観はプラトン以来の伝統的な自然観であり、ルネッサンスの中心的思想であると述べている⁶⁾。そして A. P. ダントレーヴは自然法の歴史は法学および政治学における自然の思想の歴史にほかならないというリ

ッチイの指摘について言及しているが⁷⁾、ここで自然観との関連で自然法 (Natural Law) について触れなければならない。

Troilus and Cressida において Hector は「自然はすべてのものは正当な持ち主に返すことを要求している」‘Nature craves/All dues be render’d to their owners : , (II . ii.174–175)、「この自然の掟」‘this law/Of nature, (II . ii.177-178)、「これらの自然の掟は国家の法」‘these moral laws/Of nature and of nations’ (II . ii.185-186) というふうに、nature と law of nature なる語を用いて自然法を展開している。

R. A. Foakes は ‘moral laws/Of nature and of nations’ について ‘law as implanted by nature in the mind, and the laws which bind nations in a mutual agreement. The best-known discussion of the derivation through reason of the laws of nations from the laws of nature, and their relation to divine law, is in Book I of Richard Hooker’s *The Laws of Ecclesiastical Polity*.’ と注釈を付している⁸⁾。

そしてまた *OED* は law の項において ‘The term law of nations (*L. jus gentium*) meant in Roman use the rules common to the law of all nations often coupled with law of nature in sense 9c’ と説明している。また ‘9c. as implanted by nature in the human mind, or as capable of being demonstrated by reason. Formerly often *the law of nature* (now rarely, because of the frequency of that expression in sense 17)’ とあるように、Natural Law は生来人の心に植え付けられ、理性によって証明されうるものなのである。更に *OED* は ‘The expression *law of nature* (*lex naturae* or *natualis, jus naturale*) in Cicero, Seneca, and the Roman jurists, is ultimately derived from the physikon dikaion of Aristotle.’ と記述している。

Aristotle は、埋葬してはならないという Cleon の布告を無視して Polyneices を埋葬することは天の掟に反するものでないと言う Antigone に関して natural justice のことを述べている。法には国家などの特定の法と普遍的な法がある。すべての人に関わる自然の正義と自然の不正義が存在するから、普遍的な法は自然法であり、Antigone は埋葬が自然の正義を意味していると言っているのである⁹⁾。

そして R. S. White によれば、イギリスのルネッサンス期には制度的にもまた専門的にも法律と文学とが相互に作用し合い、具体的に文学の中に Natural Law が導入された理由は、第一に人類の生存は作家が love と呼ぶ繁殖と、第二に殺人を避けることにより可能であるという自然法の中心的問題がルネッサンス文学の中心的な主題である性行動(喜劇)と殺人(悲劇)の問題を直接提起することになるからである。更に、R. S. White はこの2つの主題が豊饒なのは「なにが natural で、なにが善であり、そしてなにが悪であるのか」を知ることが本質的に困難であると述べ、ただそのような善悪の認識の違いや natural の認識の違いは Natural Law の構造そのものにあるのではなくて、適用の仕方にあると言い、*King Lear* において一方の観点から Gloucester は Edmund が庶子であることを natural と見るが、別の見方ではその存在と結果とは無法であり、反共同社会的であり、政治的には ‘illegitimacy’ であると述べている¹⁰⁾。このように nature のあいまい性を *King Lear* においてもつとも有効に用いているということが出来る。このように多様であいまいな意味を有する nature と kind と Natural Law および自然観を理解した上で劇をみていきたい。

2

王は法であり、責任を伴うが、Lear は王としての責任という重荷を下ろし、ただ王の称号と権威だけを持ち続ける意図で3人の娘に王国を分割するために、love-contest なる儀式を行うのである。

Which of you shall we say doth love us most ?

That we our largest bounty may extend

Where nature doth with merit challenge.

(I.i.51-53)

そなた達のうちだれが父をもっとも愛していると言えるかな。

親への孝養に子への愛情が加わるところに

父の最大の恩恵を施そうから。

nature と merit によって最大の分け前を与えるという言葉には nature を重んじる気持ちが強く現れている。The New Shakespeare の編者が注釈を加えて

いるように、nature は「肉親への自然な情愛」natural affection (of child towards father)の意味であり、merit は父への愛の公言を意味する¹¹⁾。そして Lear は愛の公言はすなわち愛の実行であると信じているのである。しかし Lear は姉娘たちの言葉と実践の乖離を痛切に思い知らされることになる。

Goneril と Regan は Lear の意に添って、父への愛を言葉巧みに述べて Lear を喜ばせる。そして Lear は2人の姉娘以上の自分への孝養の言葉を Cordelia に期待するが、Cordelia は‘Nothing’ としか答えない。言葉が即実践を意味すると信じる Lear にとって nothing は「無」以外のなにもでもない。そのために Lear は激怒し、Cordelia に対して親子の縁を切ると宣告し、勘当するのである。Lear は後に Goneril の冷遇にあい、

O most small fault,

How ugly didst thou in Cordelia show,

Which like an engine wrenched my frame of nature

From the fixed place, drew from my heart all love

And added to the gall.

(I. v. 258-262)

おお、ほんの些細なあやまちよ、
それがコーディリアではなんと醜く見えたことか、
そのあやまちが梃子のように、わしの親としての自然な情愛を
その土台からねじ取り、わしの心から全ての愛情を抜き取り
憎悪を加えたのだ。

と言ってこの時の Cordelia に対する仕打ちを後悔する。‘Nothing’の裏にある真実の心を理解せずに、Cordelia と縁を切ったことを悔いているのである。Foakes が注を付しているように、‘frame of nature’は自然の情愛の意味であり、それが情愛のありかである心から愛情が引き裂かれたという思いなのである¹²⁾。frame は建造物の比喩を用いているのである¹³⁾。その時から Lear の nature は正常なものではなくなったと考えられる。

したがってただ己の意に添わず、‘Nothing’としか言わなかった Cordelia を「造化の自然も自分のものだと思えるのも恥ずかしいような奴」‘a wretch

whom Nature is sham'd/Almost t'acknowledge hers.' (I.i.212-213) と言い、己を造化の女神と同一視するのである。

そのような理不尽な Lear に対し Kent は身体を張って Cordelia を弁護し、Lear の逆鱗に触れる。愚かな Lear は身命を賭して諫言する Kent の言葉を「出過ぎた傲慢さ」‘strained pride’ であると断じ、

That thou hast sought to make us break our vows,
Which we durst never yet, and with straind pride
To come betwixt our sentence and our power,
Which nor our nature nor our place can bear,

(I.i.168-171)

予はそうしたことは嘗てしたことがないのに、
おまえは予の宣言を取り消させようとした、
それに出過ぎた傲慢から予の宣告と実行する力に
割って入った。予の性格からも地位からも我慢ならないのだ。

と言い、即刻追放するのである。Kent の命を懸けての諫言を ‘our nature’ も ‘our place, も許し難いものであると Lear は言うのである。この nature について The New Shakespeare は「性格、気質」character, disposition の意味を与えているが¹⁴⁾、Lear は正常な nature を失い、暴君と化しているということが明らかになる。Kent はこのような暴君が治める国には自由はなく、追放があるだけだと嘆く。Lear の横暴の内に実定法 (positive law) と Natural Law との乖離が見られる。

ここで Lear は nature という語を準繩、判断の基準の意味でも用いているのである。王が神の代理であり、nature が神の代理であるとすれば、Lear が己を nature と同一視するのも当然である。そのように準繩という倫理的な意味合いをもつ nature は Natural Law と同一の思想である。しかし Lear の nature は Natural Law の精神に反するものである。

R. S. White は Natural Law について、Saint Augustine の ‘There is no law unless it be just.’ という言葉と Thomas Aquinas の ‘And if a human law is at variance in any particular with the Natural Law, it is no longer legal, but rather a

corruption of law.’ という言葉を引用して、Natural Law は本質において、正義であり、正義そのものであり、すべての実定法の基であり、試金石であると述べ、更に A. P. ダントレープの「自然法は正邪の究極の尺度である」という言葉を引用している¹⁵⁾。

これまで Lear の最愛の子であった Cordelia が突然憎しみの対象になったことが信じられずに、「その罪は極悪非道というほどの自然の条理にもとるものにちがいない」‘Sure her offence/Must be of such unnatural degree/That monsters it.’ (I. i.220-221) と言うフランス王の言葉は逆に Lear の Cordelia への処遇が unnatural であることを浮き彫りにする。フランス王は Lear から勘当される原因が Cordelia の「生まれつき口が重いこと」‘a tardiness in nature, (I.i.237) にすぎないことを知って驚くのである。

Gloucester は Edmund の讒言を信じて、Edgar を「情愛に欠けた」‘Unnatural’ (I.ii.76) 悪党と呼び、また Cordelia を勘当し、高潔な Kent を「心の誠」‘honesty’ (I. ii.117) の故に追放した Lear について「王は自然の道を踏み外している」‘The King falls from bias of nature’ (I.ii.111) と言い、これは最近の日食月食が凶兆である印だと考える。Lear が Goneril の館に滞在してしばらくすると 1 人の Knight はこの館には以前のような「肉親への情愛」‘kindness’ (I.iv.58) が感じられないということを Lear に遠慮がちに言う。Lear もそのことを意識していたが、それは意図的な「よそよそしい振る舞い」‘unkindness’ (I.iv.69) ではなくて、自分のひがみだと思って黙っていたのである。Goneril の館には ‘unkindness’ が蔓延している。そして Goneril たちの冷たい仕打ちに怒り、Lear は Regan の許に行く決心をする。Lear は Nature に祈願して薄情な Goneril を呪うのである。

Hear, Nature, hear, dear goddess, hear,
Suspend thy purpose if thou didst intend
To make this creature fruitful.
Into her womb convey sterility,
Dry up in her the organs of increase,
And from her derogate body never spring

A babe to honour her. If she must teem,
Create her child of spleen, that it may live
And be a thwart disnatured torment to her.

(I. iv. 267-275)

聞いてくれ、自然の女神よ、聞いてくれ、女神よ、
この者に子供を産ませるという意図があるなら、
やめてくれ。
この女の胎を不妊にしてくれ。
この女の生殖器官を乾上らせ、腐敗したこの女の
身体から母の名誉となる子を産ませないでくれ。
どうしても産むと言うのなら、
悪意の子を産ませてくれ、その子が捨かれて
情愛のない苦しみの種となるように。

Jay L. Halio は Nature について The goddess Lear appeals to is very different from Edmond's (1.2.1). It is closer to a personification of the orthodox Elizabethan conception of nature as described, for example, Richard Hooker in *Of the Laws Of Ecclesiastical Polity*, I. iii: ...God being the author of Nature, her voice is but his instrument (cited by Danby, p.26). と注釈を付けているように¹⁶⁾、伝統的な造化の自然を意味する。一方 Foakes は Nature recalling Edmund's appeal to Nature at 1.2.1, but with a difference; Lear invokes Nature as a creative force, but his horrible curse would make nature unnatural (disnatured, 275), and almost aligns him with Edmond. と注を施している¹⁷⁾。Lear の Nature は Edmond の Nature と少し異なるが、万物を反自然になれと呪うことで Lear はほとんど Edmond と同列であるというのである。では Edmond の Nature とはいったいいかなるものなのだろうか。

3

Edmund は「大自然よ、おまえこそ私の女神だ。おまえの掟におれは従う」
“Thou, Nature, art my Goddess; to thy law / My services are bound.” (I. ii.1-2)
と Nature に呼びかける。Foakes はこの劇では nature という語が様々な意味

で使われ、特に Lear の言う「人としての道、子の務め」“The offices of nature, bond of childhood,” (II. ii. 367)である「自然の絆、親子間の自然な情愛の絆」“the bonds of nature, the ties of natural affection between parent and child”をししばしば思い起こさせるものであり、これらの「絆」ties を斥けるときに、Edmund は実は the law of jungle に訴えているのであり、自己を正当化する方便として獣 (lusty stealth) の側に与し、慣習や道徳や秩序を敵視しているのだと注を施している¹⁸⁾。

また Halio はこの Nature について The natural son of Gloucester, Edmond naturally takes Nature as his deity. と注を施し、law については as opposed to religion's laws and those of society. と注をつけている¹⁹⁾。Edmund の讒言に騙され、Gloucester は Edgar を勘当し、Edmund を ‘Loyal and natural boy’ (II. i.83) と呼ぶ。そして Jay L. Halio はこの natural について The ambiguity — (1) naturally loyal and loving, (2) illegitimate — is further compounded since ‘natural’ could also refer to a legitimate child. Thus Gloucester may already indicate that Edmond is his heir (Muir). と注を付している²⁰⁾。McAlindon も natural の地口は Shakespeare 時代では今よりはるかに強力な地口であったであろうと述べ、何世紀もの間 a natural child というのは a legitimate child の謂であったものが、16世紀には illegitimacy という事実を糊塗するため、related by blood rather than adoptive という古い意味から illegitimate の魅力的な同意語として natural の語を用いたと言い、OED の natural の項に言及している²¹⁾。OED は natural の 13. a. として Of children : Actually begotten by one (in contrast to adopted, etc.), and especially in lawful wedlock ; hence freq. = legitimate. Obs. の定義を、そして 13.c. として In later use denoting a mere blood-kinship not legally recognized ; hence, illegitimate, bastard. の定義を与え、引用として 1586 J. Ferne *Blaz.Gentrie* 90 He hath smoothed up the matter with a fine terme, in calling him a sonne naturall, a prety word. を挙げている。また Edmund 自身が「人目を憚る自然な欲望」(lusty stealth of nature) (I. ii. 11) によって生まれたと言っている。

R. S. White は物質的意味での nature から類推による自然の法則という考

え方があり、天体の運行、月の満ち欠け、動物界や植物界の生殖や自衛的本能、生物の成育や死などの物質界において予測ができ、均整のとれた働きに見られる法則が倫理的意味での法と同じ *moral law* の存在を仮定する根拠となっているが、この種の *natural law* は種々の点で *Natural Law* そのものと考ええるよりはむしろ、もっと根本的には *the Law of Nature* の前段階と考えられる「自然哲学」*natural philosophy* に近いものと呼ぶべきで、*Natural Law* と区別することが可能であると述べている²²⁾。

R.S.White は自然哲学が Pliny, Cato, Virgil, Lucretius 等の思想に基づく知的伝統に由来するものであり、ソクラテス以前の自然哲学者や Cicero や Aquinas に由来する *Natural Law* と区別すべきであると述べ、更に *natural philosophy* は *Natural Law* の下位部門であり、それは宇宙が *Natural Law* または物理的な自然の法則によるこの上ない合理性を強調するものであり、*nature* に従えという詩人への勧めは動物界や植物界の法則に従えということではなく、*Natural Law* に従えという意味であり、重大な違いは理性が人間の倫理的選択に確証を与えることにあって、ここに *King Lear* における Edmund の *flawed reasoning* を解く鍵があり、Edmund は *Natural Law* の特徴である構成要素の理性と良心を斥けて、物理的世界の *amoral* で無反省な *nature* を選んでいると述べている²³⁾。

R.S.White は、Edmund は *law of nature* について自然界を支配する自然の法則の意味で用いていると言い、Edmund の “*Thou, Nature, art my goddess.*” に始まる *Nature* を例外なくすべての批評家は額面通りにとっているが、Edmund は *nature* を本質的な意味でなく、嵐の場における自然の猛威が人間と対立するという意味で社会と対立するものとして用いており、またそれは人間の貪欲さを正当化するためであると言う²⁴⁾。Shakespeare は死の間際の Edmund をして Lear と Cordelia の命を救うことを「己の自然に反して」“*Despite of mine own nature,*” (V.ii.242) と言わしめている。

4

このような Edmund の *Nature* とは異なるが、すべてを与えた娘に苦渋を舐めさせられた Lear が訴える *Nature* は呪詛ゆえに *nature* に反するものであり、

Gloucester の言うような日食月食の所為ではなくて、彼自らの行為によって「人間を含めて自然界はその結果鞭で打たれる」“nature finds itself / scourged by the sequent effects.” (I.ii.105-106)のである。

Lear は Regan が「孝心厚く、やさしい」“kind and comfortable”娘であると思って、彼女の許に行こうとすると、Fool は Goneril と Regan とが野生のりんご(crab)と apple が似ているのと同じほど似ているのを知っていて、Lear に向かって「もう 1 人の娘さんは娘さんらしくお前さんを扱ってくれることがわかるだろう」“Shalt see thy other daughter will use thee kindly, . . . ”(I. v. 14)と言う。この kindly については前に触れたが、Foakes が注を付けているように²⁵⁾、Regan の「性質・性格」kind(=nature)にしたがって、すなわち「残酷に」cruelly という意味を込めている。Lear にもその意味がわからないわけではない。Goneril への激しい怒りが再びこみあげてきて、Lear は「父親の情愛を忘れよう。あれほど子思いの父親であったのに”I will forget my nature : so kind a father ! ”(I.V.31)と口走る。すべてを与えた子思いの(kind)親にひどい仕打ちをする Goneril を呪って、自然界が unnatural になるように祈願し、己自ら unnatural になろうと考えるのである。

Lear は Regan に会い、幼い子供が訴えるように Goneril のひどい仕打ちを告げる。Goneril の「非道の鋭い牙」“sharp-toothed unkindness” (II.iv.324)で心臓を剥げたかのように刺したと言う。更に Lear は Regan に、お前は Goneril と違って「やさしい気性」“tender-hefted nature” (II. iv. 360)だから、「人の道、子の務め、礼儀の道、恩義」“The offices of nature, bond of childhood, / Effects of courtesy, dues of gratitude”(II. ii. 367-368)を知っている筈だと言う。子としての義務からも、またすべてのものを与えたのだから、当然感謝の念を抱いている筈で、自分を温かくもてなすのは至極当然だと言うのである。そして Goneril に対して己に対するむごい仕打ちの復讐をしてくれるものと期待をかける。しかしそこへ Goneril がやって来て、Regan と握手するのを見て愕然とする。Regan は従者の半分を減らして Goneril の許に帰るように Lear に言うのである。Lear は従者を半分の50人に減らされ Goneril の許に戻るのを一度は拒否して、娘たちに二度と会うまいと考える。しかし Lear は思

い直して、次のように言う。

But yet thou art my flesh, my blood, my daughter,
Or rather a disease that's in my flesh,
Which I must needs call mine. Thou art a boil,
A plague sore, or embossed carbuncle
In my corrupted blood.

(II. ii. 410-414)

だがおまえはわしの肉、わしの血、わしの娘だ、
というよりわしの肉の中にある病だ。いやでも
わしのものだと言わないわけにはいかない。
おまえはわしの腐った血にある腫れ物だ、
疫病が原因の腫れ物だ、膿んだ腫れ物だ。

Lear はこのように Goneril が自分の肉であり、血であり、己の娘であることを認めないわけにはいかない。むしろこれは己の腐った身体にできた吹き出物であると認識するのである。したがって Foakes が言うように娘たちを呪うことは自らを呪うことを意味する²⁶⁾。

Lear が100人の従者のままで Regan と暮らしたいと告げると、それは駄目で、25人ならかまわないと Regan が応える。その言葉を聞くと Lear は50人の従者を認める Gonerilの方が Regan の2倍の愛情があるから、Goneril の許に行くと言う。Cordelia の Nothing を理解できなかった Lear は未だに精神的なものと物質的なものを同一視しているのである。すると Goneril が10人もいや5人も必要でしょうかと言い、それに追い撃ちをかけるように、Regan が「1人だって必要でしょうか」「What need one?」(II. ii. 452)と言いつつ。Lear はそのような必要かどうかの議論は無用だと叫ぶ。

O, reason not the need ! Our basest beggars
Are in the poorest thing superfluous ;
Allow not nature more than nature needs,
Man's life is cheap as beast's.

(II. ii. 453-456)

おお、必要を論ずるな。どんなに卑しい乞食でも
 ごく貧しいものの中にも余分なものをもっている。
 人間に生きものに必要以外のものを与えないなら、
 人間の生活は獣の生活と同様に値打ちはない。

Foakes は Allow. . . beast's について If you do not allow (human) nature more than (animal) nature needs, then man's life is as worthless as that of a beast. という注釈を施しているが²⁷⁾、やがて激しい嵐の荒野で (human) nature と (animal) nature との区別がつかない事実を目撃する。そしてすべてを与えた娘達を「人情にもとる鬼婆」“unnatural hags” (II .ii.467)にするものが神々ではないのかという疑念を抱く。娘達に絶望した Lear は嵐の中に飛び出して行くのである。

Knight は子熊に乳を吸い尽くされて空腹の親熊も身を潜める風雨の激しい夜に「人間という小世界」“little world of man”(III. i. 10)である Lear が激しい風雨とたたかっていると Kent に語る。娘たちの薄情に怒り狂う人間 (microcosm) が荒れ狂う大自然 (macrocosm) に立ち向かっている。Kent もこの夜ほどの嵐の激しさは記憶にないと言い、「人間の身体はこの苦痛、この恐怖を耐えることはできません」“Man's nature cannot carry / Th' affliction nor the fear.” (III. ii. 48-49) と言う。Halio は Kent の言葉は Lear の巨大さ (titanism) を明確に示すものであり、人間の身体 (physical nature) の激動が国際関係 (フランスとの争い) と国家 (両公爵間の分裂) との激動を反映していると注釈を付しているように²⁸⁾、ここには人間と国家と世界との呼応関係が見られるのである。荒野の納屋の中へ Lear に入るように勧める時も、Kent は「夜の嵐は激しくて人間は絶えられません」“The tyranny of the open night's too rough / For nature to endure.” (III. iv. 2-3) と nature という語を繰り返して言う。

しかしこのような未曾有の大嵐の真つ只中であっても、Lear は己の心の中の嵐である「子の恩知らず」“filial ingratitude” (III. iv. 14) という心を持つ感情以外は何も感じないと言う。Lear にとって大自然の猛威よりもはるかに人間の忘恩が重大なのである。「リーガン、ゴネリル、気前よく一切を与えた、年取った、やさしい父を」“O, Regan, Goneril, / Your old, kind father, whose

frank heart gave you/all—” (III. iv. 19-20)と嘆く。何故娘たちがこのようなひどい仕打ちをするのか Lear には理解できないのである。Lear の心を占めているのは娘たちの unkindness である。そして小屋の中にいた Poor Tom に変装している裸姿の Edgar を見て、「親不幸な娘以外に誰も人をこんなに惨めな姿にするはずがない」“Nothing could have subdued nature/To such a lowness but his unkind daughters.” (III. iv. 69-70)と言うのである。

それ故に Lear はこの世を呪い、Jupiter にこの世の破滅を祈願するのである。

And thou, all-shaking thunder,
Strike flat the thick rotundity o' the world,
Crack nature's moulds, all germens spill at once
That make ingrateful man !

(III.ii.6-9)

全てを揺るがす雷よ、
厚い、妊婦のお腹のように丸い地球を打ち砕いて平たくしてくれ、
造化の自然の鑄型を打ち壊し、恩知らずの人間を産む
すべての種をすぐにも打ち砕いてくれ。

更に Lear は unkindness だと言って、荒れ狂う大自然を責めたりはしない、お前には王国を与えなかったし、自分の子供と呼んだことがないのだからと言う。しかし邪悪な娘たちに加担するから卑劣な輩と呼ぶのだと言うのである。

一方 Goneril と Regan の「人情にもとる仕打ち」“unnatural dealing” (III. iii. 2)を見て、Gloucester は命を顧みず Lear を救おうという人間性、「情愛の火」“all the sparks of nature” (III. vii. 85)に目覚める。それは心に刻みつけられている Natural Law に従うことである。そして Lear に救いの手を差し延べたことを Edmund に密告され、Gloucester は Cornwall たちに拷問を受けることになる。復讐を考える Cornwall の

Though well we may not pass upon his life
Without the form of justice, yet our power

Shall do a courtesy to our wrath, which men
May blame but not control.

(III.vii.24-27)

正式の裁判の手続きをしなければ、死刑を
宣告することはできないが、怒りのために
大権を行使するのだ、非難はできても
止めることはできまい。

という言葉は実定法(positive law)を権力者の意思と同一視している典型的な
ケースである。Natural Law の精神は法と倫理を結びつけるものであるが、
Cornwall 達は人間が本来有する理性を無視して恣意的に法を行使するのである。

Natural Law が促す all the sparks of nature に目覚めて立ち上がるのは
Gloucester だけではない。従僕の1人が Gloucester の目を抉り取る Cornwall
に立ち向かい、背後から Regan に刺され命を落とすが、致命傷となる一撃を
浴びせる。このように Cornwall や Regan の残忍な行為を見て、フォリオでは
省かれている箇所であるが、2 Servant の「この男が幸福になるぐらいなら、
わしはどんな悪事をしてもかまうものか」“I'll never care what wickedness I
do/If this man come to good.” (III.vii.98-99)という言葉や3 Servant の「あの
女が長生きして、人並みに往生を遂げるなら、女はみな怪物になるだろう」
“If she live long/And in the end meet the old course of death, /Women will
all turn monsters.” (III.vi.99-101)という言葉は Natural Law の精神に促されて
発せられているのである。

疲れ果てて眠り込んでしまった Lear のことを Kent は「疲れ果てた方はよく
眠っておられる」“Oppressed nature sleeps.” (III. vi. 95)と言う。また
Cordelia は傷ついた Lear を「虐待を受けた身体」“abused nature” (IV. vii. 15)
と言う。ここでも自然界と人間界の呼応関係が見られ、異常な自然現象、動
乱の国家、心に病をもつ Lear が Oppressed nature や abused nature という言
葉で表現されているのである。このように病んだ nature を生み出したものは
Goneril と Regan である。しかしこの2人のためにすべてのものによって呪

われる存在となった nature を贖う人物が Cordelia である。すべてを与えた実の娘たちのひどい仕打ちを受けて、精神に異常をきたした Lear を前にして Gentleman が次のように言っている。

A sight most pitiful in the meanest wretch,
Past speaking of in a king. Thou hast one daughter
Who redeems nature from the general curse
Which twain have brought her to.

(IV.vi.200—203)

最も卑しいものでもこの上なく痛ましい光景だが
まして国王となれば言語を絶するもの。あなたには
もう 1 人娘があって、2 人の娘が人情に世の呪いを
もたらしたが、その方がその呪いから人情を贖われた。

Halio はこの Gentleman の言葉が chorus であり、general は universal ; with connotations of original sin. の意味であり、また twain は Goneril と Regan を指すが、Danby, p. 125, sees an indirect allusion to Adam and Eve. と注釈を施している²⁹⁾。Foakes も general...to について The universal curse of original sin was brought on human nature by Adam and Eve, the first twain, who lie behind the more immediate pair, Goneril and Regan. と注釈を付しているが³⁰⁾、大自然の猛威、権力者たちが己の意思と法とを同一視することによる国家の混乱、Lear の精神異常という人間の精神の混濁等、すべてがカオスの状態ということができよう。威厳に満ちたかつての姿を見ている Gloucester は今の精神に異常をきたした Lear の姿を見て、「ああ、ぼろぼろの自然の傑作が。そうなればこの大世界も無になってしまうだろう」“O ruined piece of nature ! This great world / shall so wear out to naught.” (IV. vi. 130—131) と嘆き悲しむ。しかし既に Gloucester や彼の従僕たちに見られた Natural Law に基づく all the sparks of nature に促され、混乱の中に natural order が力を持ち始めるのである。Lear と Cordelia の再会の場がそれを象徴する。

R. S. White が言うように、Cordelia は劇の進行とともに自然の治癒力 (healing natural forces) となっていき、苦しむすべての生き物たち (all natural

things)を憐れみ、drugs でなくて、nature とその「効能のある薬草」“simples operative” (IV. iv. 14)を用いる医者との協力のもとに傷ついた Lear の心身を治すのである³¹⁾。

荒野を彷徨する Lear の有り様を耳にして Cordelia は胸を痛める。Doctor は病を治すには休息が必要で、睡眠をもたらす多くの薬草があると nature の治癒力に言及して言う。

Our foster nurse of nature is repose,
The which he lacks ; that to provoke in him,
Are many simples operative, whose power
Will close the eye of anguish.

(IV.iv.12-15)

身体を養う乳母は休息です。
陛下はそれが欠けておいでです。眠りを誘うのに
有効な薬草は多々あります。その効能は
お苦しみの眼を閉じましょう。

Cordelia も「すべての恵みの薬草、大地のまだ知られていないすべての薬草が私の涙で生え出できますように」“All blest secrets, / All you unpublished virtues of the earth, / Spring with my tears.” (IV. iv. 15-17) と言って、nature の治癒力に祈願する。そして R. S. White が言うように、ここではかつて良心に固執した Cordelia が慈悲深い、また倫理的力としての nature と手を携えて、Natural Law の象徴となり、natural philosophy と結びつき、Cordelia の nature はホップズ流のどん欲な human nature に近い Edmund の nature の対極となる³²⁾。unpublished virtues について R. A. Foakes は undisclosed or secret restorative herbs. Their virtues are the powers they have to do good, but the image is of plants springing up, fertilized by Cordelia's tears ; ... と注を付しているように³³⁾、ここには Cordelia の涙によって育つ植物のイメージがある。そして Cordelia の涙が不信に陥って頑になった Lear の心を潤し、和ませるのである。Lear は眠りから覚め、Cordelia の流す涙を見て次のように言う。

Be your tears wet ? Yes, faith ; I pray weep not.

If you have poison for me, I will drink it.
I know you do not love me, for your sisters
Have, as I do remember, done me wrong.
You have some cause, they have not.

(IV. vii. 71-75)

涙を流しているのか。そうだ、涙だ。泣かないでくれ。
おまえがわしに毒を飲めと言うなら、それを飲もう。
おまえがわしを愛していないのはわかっている。おまえの
姉たちは、忘れはしないが、わしをひどい目にあわせたからな。
そうしていい理由はおまえにはあるが、あれらにはない。

すべてを与えた姉娘たちが自分に対してひどい仕打ちをしたが、自分が何も与えなかった Cordelia は自分を愛さない理由があると Lear は言うのである。その言葉を聞いて Cordelia は「理由などありません、ありません」“No cause, no cause.” (IV.vii.75) とだけ口にする。この Cordelia の万感こもる言葉と癒す自然 (healing nature) とが、「傷ついた自然」“abused nature” であり、「ぼろぼろの自然」“ruined piece of nature” である Lear の心身を治すのである。Lear は Goneril と Regan の仕打ちを理解できず、「自然の中にこのような冷酷な心臓を作り出すなにか原因があるのだろうか」“Is there any cause in nature that make / these hard hearts?” と言って、自然に疑念を抱いた Lear は Cordelia と再会し、Cordelia の “No cause, no cause.” という言葉を聞くことによって、nature には人の心を冷酷にする原因などないということを納得するのである。Lear は healing nature と Natural Law とを体現する Cordelia に無償の愛の真の姿を見たのである。McAlindon は Nothing のような 1 語がカオスをもたらし、no cause, no cause. のような数語の言葉が奇跡的な再生をもたらすと述べている³⁴⁾。

戦に破れて Lear と Cordelia は捕虜になる。Cordelia は父のために悲しむが、Lear には権謀術数渦巻く政治の世界などにまったく未練はない。牢獄での Cordelia との生活が Lear にとって至福の時なのである。

一方 Albany は Lear へひどい仕打ちをする Goneril を見て、「自分の親をない

がしろにするような気性では自分の本分を守りえまい” “That nature which contemns its origin / Cannot be bordered certain in itself.” (IV.ii.33-34) と言うが、Goneril の nature は Edmund の nature に通じるものがある。そして Albany は天がこのような行為を懲らしめなければ、必ずや人間は怪物のごとく共食いをするようになると言ったように、Natural Law を無視し、どこまでも私欲を追求した Goneril は嫉妬にかられて Regan を毒殺し、自殺する。Edmund も Edgar の挑戦を受け、敗れるのである。しかし Edmund は Edgar が語った父の過酷な運命の話にいたく感動し、Lear と Cordelia の処刑命令を取り消す気になる。

しかし一瞬の手違いで Cordelia は処刑され、Cordelia を失った Lear は再び狂乱に陥る。Lear にとって他のすべてのものが存在しても、Cordelia の存在しない世界はカオスでしかない。そして Cordelia の唇が動いたと信じ、激しい情動で Lear は事切れる。McAlindon は錯覚であろうとなかろうと、Cordelia の唇が動いたと Lear は信じる、それは Nature の残酷さの後の Nature の優しさ (kindness) のかすかな、はっきりとは聞き取れないほどの反響であると述べている³⁵⁾。

Lear の「名づけ子」“godson” (II. i. 91) である Edgar が乱れた王国の再建を任される。Edmund の奸計のために不幸のどん底を経験した Edgar は権力者の暴政がいかなる事態を招くかを見ている。「人に危害など決して加えることのない人柄」“Whose nature is so far from doing harms” (I.ii.173) の Edgar は「王に相応しい徳」“The King-becoming graces” (*Macbeth*, IV.iii.91) を備え、Natural Law の精神に基づいて、政治を行うことのできる人物である。そして R. S. White は Cordelia の死がいかに衝撃的で、予期しない出来事であろうと、それは彼女自身の罪ではなくて、他の人間達の犯した罪の必然的な結果であり、Natural Law を理性と良心によって心に刻まれている観客も読者もその悲劇を「わずかばかりの権威を笠に着た」“Drest in a little authority” (*Measure for Measure*, II. ii. 120) 一群の人物たちが Natural Law を破った結果として受け取るように³⁶⁾、Edgar は「正義に適わなければ、法ではない。自然法と齟齬をきたす法は法ではない」という理性と良心に由来する Natural

Law に則って王国を治めていくことが期待されるのである。

テキストの引用は R. A. Foakes, ed., *King Lear*, The Arden Shakespeare, Thomas Nelson and Sons Ltd., 1997.による。

- 1) Stanley Wells and Cary Taylor, eds., *The Oxford Shakespeare: The Complete Works*, Oxford U.P., 1986, p. 1025.
- 2) R. S. White, *Natural Law in English Renaissance Literature*, Cambridge U. P., 1966, p.198.
- 3) R. S. White, *ibid.*, pp. 186-187.
- 4) George Ian Duthie and John Dover Wilson, eds., *King Lear*, The New Shakespeare, Cambridge U. P., 1962, Glossary.
- 5) T. McAlindon, *Shakespeare's tragic cosmos*, Cambridge U. P., 1991, pp. 172-173.
- 6) Edgar C. Knowlton, "Nature and Shakespeare", PMLA LI, 1936, p. 719.
- 7) A. O. ダントレーヴ、『自然法』、久保正幡訳、岩波書店、1952、p. 8.
- 8) R. A. Foakes, ed., *Troilus and Cressida*, The New Penguin Shakespeare, Penguin Books Ltd., 1987, note.
- 9) Aristotle, *The Art of Rhetoric*, The Loeb Classical Library, edited by John Henry Preese, William Heinemann Ltd., 1959, pp. 139-141.
- 10) R. A. White, *op. cit.*, pp. 8-9.
- 11) G. I. Duthie and J. Dover Wilson, *op. cit.*, note.
- 12) R. A. Foakes, ed., *King Lear*, The Arden Shakespeare, Thomas Nelson and Sons Ltd., 1997, note.
- 13) G. I. Duthie and J. Dover Wilson, *op.cit.*, note.
- 14) G. I. Duthie and J. Dover Wilson, *ibid.*, note.
- 15) R. A. White, *op. cit.*, p. 1.
- 16) Jay L. Halio, ed., *The Tragedy of King Lear*, The New Cambridge Shakespeare, Cambridge U. P., 1992.
- 17) R. A. Foakes, *op. cit.*, note.
- 18) R. A. Foakes, *ibid.*, note.
- 19) Jay L. Halio, *op. cit.*, note.
- 20) Jay L. Halio, *ibid.*, note.
- 21) T. McAlindon, *op. cit.*, p. 173.
- 22) R. S. White, *op. cit.*, p. 9.
- 23) R. S. White, *ibid.*, p. 10.
- 24) R. S. White, *ibid.*, p. 198.
- 25) R. A. Foakes, *op. cit.*, note.
- 26) R. A. Foakes, *ibid.*, note.

- 27) R. A. Foakes, *ibid.*, note.
- 28) Lay L. Halio, *op. cit.*, note.
- 29) Lay L, Halio, *ibid.*, note.
- 30) R. A. Foakes, *op. cit.*, note.
- 31) R. S. White, *op. cit.*, p. 32.
- 32) R. S. White, *ibid.*, p.206.
- 33) R. A. Foakes, *op. cit.*, note.
- 34) T. McAlindon, *op. cit.*, p. 160.
- 35) T. McAlindon, *ibid.*, p. 196.
- 36) R. S. White, *op. cit.*, p. 7.

第十四章

『マクベス』 *Macbeth*

John Donne は This terme the law of Nature, is so variously and unconstantly deliver'd, as I confesse I read it a hundred times before I understande it once.と 言っている¹⁾。d'Entreves は、nature という語は諸刃の剣であるが、柔軟な用い方のできる語であり、自然法の意味が多様であるのは nature の意味が多様であるからだと述べている²⁾。

nature という語はラテン語の *natura* に由来するものであり、*natura* はギリシヤ語 *physis* の訳語である。ギリシヤ語の *physis* もラテン語の *natura* も多様な意味を有していたのである。そして *natura* に相当する英語固有の語は、*OED* の nature の項に The native English word is kind n.とあるように kind である。

Edgar C. Knowlton は自然観 (concept of Nature) について、神は善であり、その代理人である Nature も善であり、人は the law of reason でもある the law of nature に従わねばならない、この法は自由意志の存在を前提とするもので、中庸の理想を促し、より高尚な目的のために修練が求められる、行為と art の目的は感情を押し殺すのではなくて、理性によってその法則を学び、それを実践することであると言ひ、更にこの自然観はプラトン以来の伝統的な自然観であり、ルネッサンス期の中心的な思想であったと述べている³⁾。

また A. P. d'Entreves が自然法の歴史は法学および政治学における自然の思想の歴史にほかならないという Ritchie の指摘に言及しているが、自然と自然観は自然法とも当然密接な関連性がある⁴⁾。自然法に関して、*OED* は law の項の中で、The expression law of nature (lex naturae or naturalis, jus naturale) in Cicero, Seneca, and the Roman jurists, is ultimately derived from the physikon dikaion of Aristotle.と記述している。Aristotle は *Antigone* において、natural justice について Antigone の行為は国家の法には背いているが、普遍的な法である自然法に照らせば、自然の正義に適っていると述べている⁵⁾。

Geoffrey Bush は多様な意味を持つ nature の理解の仕方は2種類ある、つまり、ものの本性と自然物そのものを指し、また世界の法則と世界そのものを

表す名称であると言ひ、更に2つの主要な意味があるという *The French Academy* の定義を引用している。

When they speake generallie of nature, they make two principall kindes: the one spirituall, intelligible and the unchangeable beginning of motion and rest, or rather the vertue, efficient, and preserving cause of all things: the other, sensible, mutable, and subject to generation and corruption, respecting all things that have life, and shall have end.

そして Bush は nature が森羅万象を強力に保持する原因である、世界の変わらぬ自然の原理 *natura naturans* (能産的自然) と、生命をもち、終わりを迎える森羅万象、変化するこの世の事象 *natura naturata* (所産的自然) との2つを意味すると言っている⁶⁾。

また Graham Bradshaw はその著 *Shakespeare's Scepticism* 中の“Nature and Value”の章で Shakespeare の人物たちの自然観が価値観と結びついていることを述べ、そしてこの自然観の対立が17世紀の最初の10年間に書かれた作品の人物像と密接に関連している。それは一方には、*natura naturans* すなわち *great creating-Nature* に対する人道主義的な見方と、他方には Edmund の信奉する‘Goddess’に対する没倫理的な見方、この2つの自然観の対立である。それが対立する価値観を生み出しているのである。肯定的で *humanistic* な自然観では、Nature は *human values* を是認し、その人間的な価値は客観的な存在とされる。もう一方の自然観は人間が「衣服を剥ぎ取られた」“unaccommodated” (*King Lear* III.iv.104) 存在であり、*King Lear* において跳梁する Rossiter の所謂 *under-nature* の恐怖に晒され、価値というものは客観的な存在などでなく、つくられるものだとする⁷⁾。Shakespeare はこのように多様な意味を有する nature を四大悲劇において効果的に用い、各悲劇の特質を如実に示しているのである。

1

Hamlet においては、Knowlton のいう *good nature* と対立する nature が現れる。*Hamlet* は第一独白で、父王の死後のデンマークを「この国は実を結ぶに任せてある雑草を刈り取っていない庭であり、自然界の下劣で卑しいものだ

けが庭を独占している」“‘tis an unweeded garden / That grows to seed; things rank and gross in nature / Possess it merely.” (I.ii.135-1137) と言っている。Harold Jenkins はこの nature について Shakespeare recognizes that the weeds are a part of natural growth. という注を施している⁸⁾。雑草、下劣で卑しい存在も自然の一部である。

更に Hamlet は人間の欠点を「何かの生まれつきの欠点」“some vicious mole of nature” (I.iv.24) や「造化の自然のお仕着せにせよ、運命の女神の所為にせよ、1つの欠点という刻印」“the stamp of one defect, / Being Nature’s livery or Fortune’s star” (I.iv.31-32) と言っている。このような状況において、Ghost が、Claudius の行為を「やつの邪な極悪非道の人殺し」“his foul and most unnatural murder” (I.v.25) と言い、更に「極悪、奇怪、非道だ」“most foul, strange and unnatural” (I. v. 28) と unnatural という言葉を繰り返し、Claudius の極悪非道の罪を告げ、「そなたに親を思う情があるなら、このままにしておいてはならぬ」“If thou has nature in thee, bear it not.” (I.v.81) と言い、Hamlet の nature に訴えて復讐を命じる。しかし Jenkins が言うように、Hamlet は nature of revenge よりむしろ nature of man とは何かを追求する。そして復讐も、また復讐を促す nature も unqualified approval を得ているわけではないのである⁹⁾。善と悪とからなるこの自然界において、Hamlet は復讐の命令を契機に人間とは何かを問い、また、nature の意味を求め続けるのである。

2

Othello において、Bradshaw は Othello と Iago との nature of Nature 観の対立が Othello の悲劇を生むが、humanistic な自然観を有する Othello は価値を客観的に存在するものとし、Desdemona に価値を与え、己の生甲斐の源泉としていると述べている¹⁰⁾。Iago は Othello に己をまず疑わせ、Othello の理想の対象に対して自分が資格において不十分だという意識に付け込むことにより、Desdemona を疑うように謀る。Othello と Desdemona の年齢の相違や肌の色の違いを持ち出すのである。こうした事柄が nature に反しているということを受容させることで、Othello を己の術中に引き込んでいくのである。Othello は Iago から自分たちの結婚がいかにも unnatural であるかを匂わされて、

Desdemona が自分と結婚したことを「どうして自然が道を踏み外して」“how nature erring from itself” (III.iii.231) と口走ってしまう。Othello がこのように口走るのには理由がある。

Brabantio は Othello が魔法という手段によるのでなければ、Desdemona が Othello を愛するなどということはとても信じられず、次のように言う。

For nature so preposterously to err,
 (Being not deficient, blind, or lame of sense,)
 Sans witchcraft could not.

(I.iii.62-64)

無分別でも、盲目でもなく、感覚も備わっている
 人間が魔法にでもかけられなければ、
 あのような途方もない間違いをしでかすわけではない。

年齢に大きな差があり、他国の人を愛することは「自然の条理に逆らった」“in spite of nature” (I.iii.96) ことである。更に Brabantio は Desdemona の行動は「あらゆる自然の掟に反する」“Against all rules of nature” (I.iii.101) ことであって、このような nature に反する行動に赴かせるものは悪魔の技としか考えられな
 いと言って、激しく Othello を非難する。しかし Desdemona 本人の口から Othello を愛しているということを聞くと、Brabantio は2人を引き離すことは無理だと判断して諦める。しかし別れ際に、Othello に向かって、「その女に気をつけるがいい、ムーア、目があるなら。その女は父を騙したのだ、お前をも騙しかねないぞ」“Look to her, Moor, have a quick eye to see: / She deceiv'd her father, may do thee” (I.iii.292-293) と言う。こうした Brabantio の言葉が Othello の心の奥底に残っていたのである。

Iago は Venice 女性の節操のなさを語り、「心が広く、高潔な人柄」“free and noble nature” (III.iii.203) である Othello が欺かれているのを黙って見ているのが辛いと義憤を装い、Desdemona の浮気を匂わす。Othello がふと「どうして自然が道を踏み外して」“how nature erring from itself” という言葉を漏らす。すかさず Iago はその言葉を捉え、同国人で、肌の色も同じで身分もふさわしい縁組こそ nature に適うことであり、Desdemona の Othello に対する気

持ちは “thoughts unnatural” であると言うのである。

Not to affect many proposed matches,
Of her own clime, complexion, and degree,
Whereto see in all things nature tends;
Fie, we may smell in such a will most rank,
Foul disproportion; thoughts unnatural.

(III.iii.233-237)

どの点から見ても自然の条理に適っていると思われる、

同じ国の、同じ肌色で、同じ身分の男から

申し込まれた結婚話を気に入らずに。

ちえ、非常に汚らわしい欲情の匂いがしましょう。

途方もない不似合いなことです。自然の条理に反した考えです。

こうして Brabantio と Iago の自然観に取り込まれることによって、Othello は愛する故に「卓越した造化の自然」“excelling nature”(VII.16)の傑作である Desdemona を殺すという unnatural な行為に及ぶのである。Brabantio や Iago の nature は客観的な判断の尺度となる nature では決してない。社会の規範に従うことが nature に適うという、独善的な自然観ともいうべきものである。「率直で、隠し立てのない人柄」“of a free and open nature”(I.iii.398)であり、「誠実で、高潔で、情け深い性格」“of a constant, loving, noble nature”(II.i.287)である Othello が unnatural な罪を犯す社会、つまり、nature が歪められた世界、それが *Othello* の世界である。

3

King Lear においては Lear が nature とは何かを追求する遍歴の物語である。Lear は love-contest において、己の意に従わなかった Cordelia を勘当し、Goneril と Regan のもとで隔月に滞在することにすが、最初に身を寄せた Goneril に冷遇されたため、やさしい待遇を期待して Regan のもとに行く。しかし Regan からひどい仕打ちを受け、Lear は Regan が理解できず、「自然にこのような堅い心臓を造りだす何か原因があるのだろうか」“Is there any cause in nature that make /these hard hearts?”(III.vi.74-75)と nature に疑いの

目を向ける。

King Lear には Edmund という人物が登場する。彼は Nature に、「大自然よ、おまえこそ私の女神だ。おまえの掟に私は従う」“Thou, Nature, art my goddess; to thy law / my services are bound.”(I.ii.1-2) と呼びかける。この Edmund の呼びかける“thy law”つまり law of nature こそ law of the jungle であり、弱肉強食の世界の掟である。自然法もその適用にあたってはきわめて恣意的なものになることがあったのである。Thucydides の『歴史』においてペロポネソス戦争中にアテナイはメロス島の住民を皆殺しにして、次のように言っている。

Of the Gods we believe, and of men we know, that by a necessary law of their nature they rule wherever they can. And it is not as if we were the first to make this law, or to act upon it when made: we found it existing before us, and shall leave it to exist for ever after us; all we do is to make use of it, knowing that you and everybody else, having the same power as we have, would do the same as we do.¹¹⁾

The Republic において、ソフィストである Thrasymachos は What I say is that ‘just’ or ‘right’ means nothing but what is to the interest of the stronger party. と言っているが¹²⁾、この主張をアテナイ軍は実行したのである。nature に対するこの態度は政治を正義や倫理と関係ないとする思想である。

この nature が *King Lear* の世界を跋扈する。そしてこの nature に翻弄され、疲れ果てて眠っている Lear を Kent は「疲れ果てた方」“Oppressed nature”(III. vi. 95) と言い、心身ともに傷付いた Lear を Cordelia は「虐待を受けた身体」“abused nature”(IV.vii.15) と呼ぶ。そうした言葉には自然界、人間界の騒乱の状態が含意されている。そして Gentleman が Lear を前にして、

Thou hast one daughter
Who redeems nature from the general curse
Which twain have brought her to.

(IV.vi.201-203)

あなたにはもう 1 人娘があって、2 人の娘が人情に世の呪いを

もたらしたが、その方がその呪いから人情を贖われた。

と言っているが、傷ついた nature を贖うのが Cordelia である。

Lear は Cordelia と再会し、すべてを与えた姉妹たちの自分に対するひどい仕打ちは理不尽だが、何も与えなかったのだから、Cordelia が自分に孝行しない理由があると言う。Cordelia はただ「理由などありません、ありません」“No cause, no cause” (IV.vii.75) とだけ応える。この Cordelia の短い言葉によって Lear は nature への疑念を晴らすことが出来るのである。

4

Macbeth においては、Macbeth による Duncan 弑逆後の Scotland では「自然界」(macrocosm)にも、その縮図としての「人間」(microcosm)にも「自然に反した」unnatural, against nature 現象が起きている。Duncan 殺害時に自然界に異常な事態が生じた様子を城外で Rosse と老人が語っている。人間の行いを天が気に病んで、その血腥い舞台を暗くし、時計では昼であるのに夜の暗闇が太陽を窒息させて暗くしていると語り、老人はそのような有様を「まこと自然に反します」“’Tis unnatural.” (II.iv.10) と言う。Rosse は Duncan の駿馬が人間に戦争をしかけるかのように、言うことを聞かず暴れ回っていると言い、「気性が荒く」“wild in nature” (II.iv.16) になったと嘆いている。更に共食いし始めた馬を目撃し仰天している。

そこに Macduff がやって来て、Duncan 殺害の張本人の話に及び、こっそり逃げ出したこともあり、Malcolm と Donalbain の2人にその嫌疑がかかっている旨を話すと、Rosse は生みの親を殺害する行為は自分の命の源を食い尽くしてしまうようなものだから、「自然にもとる」“gainst nature” (II.iv.27) ものであると言う。しかし Macduff や Rosse は張本人が Macbeth であることを知っていて、とぼけてそのように言っているのであり、Macbeth や Lady Macbeth の行為が nature に反した大罪であり、このように自然界に異変を引き起こしている元凶であることを強く匂わせているのである。

Lady Macbeth は Duncan 王の訪問の知らせを聞くと、悪霊に自分を女性でなくさせるよう unnatural な祈願をし、更に王殺害計画を止めさせる憐れみが沸かないように、「悪事を阻止しようする自然の情」“compunctious visitings

of Nature”(I.v.45) を圧殺し、「自然に対して行う悪事」“Nature’s mischief”(I.v.50) に仕える悪霊たちに母乳を胆汁に変えるよう祈願する。

そして Lady Macbeth はことが成就して、王冠を手に入れても、不安がますますばかりであり、Macbeth が出陣してからは、孤独と罪の意識に耐えかねて、夢遊病に陥る。身体はぐっすり眠っているのに、起き上がり、ガウンを着て、小箱の錠を開け、用紙を取り出し、物を書いて読み、封をして寝床に戻るといふ話を侍女から聞いた Doctor は、Lady Macbeth の異常な精神の状態について「眠りという恩恵を受けると同時に目を覚ましている時の行動をするのは、自然における大混乱”A great perturbation in nature, to receive at once /the benefit of sleep, and do the effects of watching!”(Vi.9-10) という言い方をする。Doctor 本人も実際にぐっすり眠っていて視覚は閉じられているのに、15分も血の付いた手を洗うしぐさを目撃し、Duncan 殺害を思わせる言葉や、Macduff の家族に言及する言葉を耳にする。Duncan 殺害や Macduff の妻子惨殺という nature に反する行為が Lady Macbeth の異常な精神状態の原因であることを知り、「自然にもとる行為が尋常ではない病状を引き起こしている」“Unnatural deeds /Do breed unnatural troubles:”(Vi.68-69) と言うのである。このように自然界と人間界に unnatural な事態を招来したのが Macbeth である。では Macbeth とは一体どういう人物なのであろうか。

Lady Macbeth は将来王になるという魔女の予言を書き記した Macbeth の手紙を読み、自分たちが玉座にすわる姿を夢想する。王位を手に入れるために、Duncan 王を亡き者にしなければならない。しかし Macbeth の nature を懸念し、Macbeth の気性について次のように言う。

Yet do I fear thy nature:

It is too full o’ th’ milk of human kindness,
To catch the nearest way.

(I.v.16-18)

でもあなたの気性が気掛りです。
その気性は人情の甘い乳が多すぎて、
最短距離の道のりは行けない。

前に述べたように、*natura* に相当する英語固有の語は *kind* であり、*kindness* について Kenneth Muir は注で ‘it is essential to remember the radical significance of the words *kind*, *kindness*, as meaning *natural* and *nature*’ という Cunningham の文を引用しているが¹³⁾、この *kindness* は *nature* の意味を包含する。*Lady Macbeth* が懸念する、“th’*milk of human kindness*”の溢れる *Macbeth* の *nature* とはどのような性質のものかを詳細に見ていこう。

5

Macbeth は魔女の予言を受けて、弑逆を夢想するだけで、「自然の習慣に反して」“Against the use of *nature*” (I.iii.137) 心臓が肋骨に当たるほど身体全体が震えると言う。王位を望んではいるが、王位を「神聖な形で」“*holily*” (I.v.21) 手に入れたいと思っている *Macbeth* の気持ちを *Lady Macbeth* は知っているのである。Bradshaw は Kafka を引用して *Macbeth* は聖なるものを憧憬し、それに伴う聖なるものへの冒瀆を恥じる気持ちがあると言い、更に第1幕第7場の独白から、典拠である *Chronicles* の王と異なって、*Duncan* が非の打ちどころのない立派な君主であることを *Macbeth* は率直に認めており、忠誠心や内省的な想像力の持ち主であることを示していると述べている¹⁴⁾。また *Duncan* が反乱軍鎮圧における *Macbeth* の活躍を褒め称え、最大限の感謝の気持ちを述べるとき、*Macbeth* の

The service and the loyalty I owe,
 In doing it, pays itself. Your Highness’ part
 Is to receive our duties: and our duties
 Are to your throne and state, children and servants;
 Which do but what they should, by doing everything
 Safe toward your love and honour.
 (I.iv.22-27)

私のなすべき忠勤と忠誠はそれを果たすことが
 恩賞に与ることです。陛下の役目は私どもの忠節を
 お受けになることです。私どもの忠勤は王位と国家に
 対して子として、僕として行うのであり、陛下の恩顧と

名誉に与るためにあらゆることをすることによって、
すべきことをするだけです。

という台詞は彼に *capacity for loyalty and devotion* が存在することを示すと Bradshaw が述べているように¹⁵⁾、Macbeth はこのように臣下の道を心得えており、国王に対する忠誠の念が極めて強い人物なのである。

また Bradshaw は人間の本質に関する Leavis の言葉に言及して述べているように、人間は人生に意味と価値を見出したいという要求と、その要求に応えるためにエゴを超越し、自己を犠牲にして献身するという生き方に Macbeth は強く心を惹かれている¹⁶⁾。また自ら暗殺した Duncan の遺体を前に Macbeth は次のように言う。

Had I but died an hour before this chance,
I had liv'd a blessed time; for, from this instant,
There's nothing serious in mortality;
All is but toys: renown, and grace, is dead;
The wine of life is drawn, and the mere lees
Is left this vault to brag of.

(II.iii.91-96)

この出来事の起こる 1 時間前に死んでいたら、
幸福な一生であったであろうに。今からは
この世には大切なものはなにもない。
全てが瑣末なことばかり。名誉も徳もなくなってしまった。
いのちの酒は汲み干され、この酒蔵が誇れるのは残った
澱だけだ。

Muir は注として、Bradley の *this is meant to deceive, but it utters at the same time his profoundest feelings.* という文を引用しているが¹⁷⁾、ここには Macbeth の人生観、価値観が如実に現れている。人徳のある Duncan から与えられる栄誉は受ける者の生き甲斐である。だから Duncan の死は“renown”と“grace”の死を意味するのである。

Bradshaw が言うように、Duncan は自我実現を叶えることの出来る唯一の

存在であり、その存在を通してのみ高邁な人間の要求の実現が可能となり、人生が価値と意義を持つのである¹⁸⁾。Macbeth は本来社会と個人のかかわりに強い関心を抱いており、己の自我実現は国王を通してしか達せられないことを認識しているのである。

このように Macbeth は国王への忠誠心や愛国心が強く、名誉を重んじ、生き甲斐を求める人物である。この人生観の底流にある Macbeth の nature を Lady Macbeth は恐れたのである。Lady Macbeth にとって、魔女の予言は絶対的なものであり、その実現には実行あるのみである。しかし実行を前にして Macbeth の nature が抵抗する。Lady Macbeth は躊躇する Macbeth に向かって、勇気を欠く臆病者だと言って、Macbeth の manliness に訴える。Macbeth は“a man”(I.vii.46)に相応しいことならなんでもすると応じる。業を煮やした Lady Macbeth は

When you durst do it, then you were a man;
And, to be more than what you were, you would
Be so much the man.

(I.vii.49-51)

あなたが思い切ってそのことを打ち明けた時、男だったのです。
それで、今のあなた以上になることによって
それだけ男になるのです。

とより高い身分になってこそ Macbeth は真の男であると言うのである。この箇所に関して、Ludowyk は It is ironical that the test of his manliness seems to be his abilities to commit murder. と注を施しているように¹⁹⁾、Lady Macbeth はまさしく Duncan 殺害を Macbeth の nature に反するものでなく、男らしい行為であると言いくるめようとしているのである。

Bradshaw は Macbeth と Macduff を比較して natural manliness について述べている。Macduff は、「主に油を注がれた神殿」“the Lord’s anointed Temple”(II.iii.67)である Duncan を殺害した Macbeth を討ち、苦しむ故国を救うために、妻子を危険な状況に置き去りにして、Malcolm の許に赴く。そのような夫について Lady Macduff は「あの人には自然の情愛が欠けているので

す”*“He wants the natural touch:”* (IV.i.9) と言い、夫を *unnatural* な人間と考えるのである。確かに「あのかけがえのない生き甲斐、あの強い愛の絆”*“Those precious motives, those strong knots of love”* (IV.iii.27) である妻子を顧みない Macduff は Lady Macduff にとっては *unnatural* であるように思われるであろう。人間社会と異なって自然界では、生き物は国家や国王に忠義を尽くす義務などない。しかし人間社会では、生まれながら備わる、敬虔な愛国心に発する Macduff の行為こそ *natural* である。Macduff は妻の言う *nature*、すなわち「生物の本能」*‘natural’ or biological instincts* 以上に神、国王、国家に対する忠誠心が強い人間なのである²⁰⁾。

更に Bradshaw は Macbeth の行為が *unnatural manliness* であるとすれば、Macduff のそれは *natural manliness* であり、Macbeth 夫妻の絆が *natural bonds* であるなら、Macduff のそれは *more than natural bonds* である。そして神に対する敬虔の念、愛国心、忠誠心に発する Macduff の行動は人生に意味を見出そうとする、高邁な人間の精神の発露である故に、Macduff は *natural* な人間であるとも述べている²¹⁾。

Malcolm はその Macduff と再会した時、「善良で有徳の人であっても王の命令ならばしり込みすることもあろう”*“A good and virtuous nature may recoil / In an imperial charge”* (IV.iii.19) と言って、Macduff を回し者でないかと疑い、また妻子を置き去りにしたことで不信の念を強める。しかし Macduff が本当に善良で徳の高い人であることを知る。その時、Macduff の城が急襲されて妻子が惨殺されたという知らせがもたらされる。Malcolm は悲しむ Macduff に「男らしく悲しみに耐えよ”*“Dispute it like a man.”* (IV.iii.220) と励ましの言葉をかける。Macduff は

I shall do so;

But I must also feel it as a man:

I cannot but remember such things were,

That were most precious to me.

(IV.iii.220-223)

そういたしましょう。

だが人間としても感じないわけにはいかないのです。

私にとって最も大切であったあの者たちが生きていた

ということをおぼえておきずにはいられないのです。

と言って、男としては耐えもしようが、人間として愛しい者の死を悲しまずにはいられないと応える。「あの貴重な愛の源泉、あの強い愛の絆」であった、かけがえのない妻子の姿を思い出すのである。そしてその悲しみを乗り越えて、悲しみを救国の志へと昇華し、Macbeth を一騎打ちで倒し、Scotland の秩序回復に貢献する。Lady Macbeth の死の知らせを聞いた際の Macbeth はどのような心理状況であっただろうか。

6

Bradshaw が言うように、Macbeth は妻に促されて、己の nature の要請を unmanly, womanish fictions として退け、Duncan 王を殺害する²²⁾。そして王位に就いても、心の安らぎは得られない。王位の安泰を妨げる原因の一つである Banquo を刺客に襲わせ、抹殺する。Macduff には先を越されて、イングランドに亡命されたので、腹いせにその妻子を惨殺する。Macbeth は己の流した血の河を引き返すのは面倒だという悪魔的な言葉を吐き、罪を重ねて行く。Macduff が「人性における際限ない不摂生は暴君です」“Boundless intemperance / In nature is a tyrant.”(IV.iii.66-67) と言うように、Macbeth の行き着く先は暴君であり、これが Macbeth の破滅をもたらす。

イングランドの応援を得て Malcolm 軍は Dunsinane の城を包囲する。Macbeth の家来たちは次々に離反していく。残っている家来たちはやむを得ないから留まっているのであって、己への忠誠心の故に留まっているのではないということを Macbeth は百も承知している。臆病風にふかれ顔面蒼白の家来がイギリス軍の動きを報告に来ると、Macbeth はうんざりして、次のように心の内を漏らす。

And that which should accompany old age,
As honour, love, obedience, troops of friends,
I must not look to have; but in their stead,
Curses, not loud, but deep, mouth-honour, breath,

Which the poor heart would fain deny, and dare not.

(V.iii.24-28)

老齢に伴うべきもの、名誉、愛情、従順、友人たちを
もてる望みはなくて、それどころか高くはないが、深い
呪詛、口先だけの尊敬、追従だけしかない、それを
斥けたいが、惨めな心は拒む勇気がないのだ。

この箇所について Ludowyk は *Macbeth realizes the difference between what naturally accompanied the rightful king and what a tyrant was given.* と注を施しているように²³⁾、*Macbeth* はわが身の置かれた状況を十分認識しているのである。正当な *Duncan* 王を暗殺して王位を手にした篡奪者 *Macbeth* は老齢に伴うべき榮譽、愛、忠誠心、心を通わせることのできる親しい人たちといった、人生におけるかけがえの無い貴重な存在と自分が無縁であることを知っているのである。そしてこれまで悪逆無道な殺戮を重ね、恐怖を感じる人間的な感情をすっかり喪失してしまっているのである。だから妻の死の知らせを聞いても、「今でなくいつか死ぬべきだったのだ。死の知らせを聞くもっと相応しい時があったらうに」“*She should have died hereafter: / There would have been a time for such a word.*” (V.v.17-18) と言うだけで、妻子の死を知らされた時、男泣きする *Macduff* と全く対照的に、人間らしい自然な感情をまったく示さない。*Lady Macbeth* が心配した“*th’ milk of human kindness*”に溢れていた *Macbeth* の *nature* が枯渇してしまったのである。

Macbeth は「己の為なら他のことはすべて二の次だ」“*For mine own good / All causes shall give way.*” (III.iv.134-135) と言っていた。*Bradshaw* が言うように、*Macbeth* 夫妻は仲睦まじかったが、家庭第一であり、王座に就いてからも、社会的な繋がりを持つことなく、彼らの生き方は社会的にも、精神的にも不毛であったのである²⁴⁾。このように自然の情を喪失した *Macbeth* がもはや己の人生に意味を見出すことができず、人生が無意味だと言うのも至極当然である。

Life's but a walking shadow; a poor player,
That struts and frets his hour upon the stage,

And then is heard no more: it is a tale
Told by an idiot, full of sound and fury,
Signifying nothing.

(V.v.24-28)

人生は歩く影にすぎず、舞台上で自分の持分だけ
威張りちらしたり喚いたりして、後は聞かれる
こともなくなるへたな役者だ。それは白痴によって
語られる物語で、騒ぎと怒りはすさまじいが、
何の意味もないのだ。

Bradshaw が言うように、Macbeth は本来忠誠心があり、人生に意義を求めて自己を投げ打っても自我実現の高邁な理想を憧憬し、それを達成する行動を *natural manliness* と考える *nature* の持ち主であったのである。そして Duncan が人生に意義を与える源泉であり、彼だけが人間の物質的、精神的欲求を満たす存在であることを知っていたのであり、Macbeth は己の *nature* を、また *nature* が突き上げる感情を否定し、抑圧することによって、虚無感を抱くに至るのである²⁵⁾。

* * * * *

Hamlet では主人公が Ghost から *nature* に従って、復讐するように命じられ、復讐とは、人生とは何か、真の *nature* とは何かを追求する劇である。*Othello* では Othello が Brabantio や Iago の *nature* 観に感化され、真の *nature* を見失うことによって、unnatural な行為を犯す悲劇である。Lear は *nature* に疑問を抱くが、呪われた *nature* を贖う Cordelia と再会し、救われるのである。*Macbeth* では Macbeth が己の *nature* を抑圧し、無視することにより、己をも自然界をも unnatural な事態にし、自ら人生を無意味にしてしまう悲劇である。

テキストは Kenneth Muir, ed., *Macbeth*, The Arden Shakespeare, Methuen and Co. Ltd., 1963.による。

¹⁾ John Donne, *Selected Prose*, Penguin Books Ltd., Harmondsworth, England, 1987, p.64.

²⁾ A. P. d'Entreves, *NATURAL LAW*, Hutchinson & Co. Ltd., 1955, p. 11.

- 3) Edgar C. Knowlton, "Nature and Shakespeare", PMLA., LI, 1936, p.719.
- 4) A. P. d'Entreves, *op. cit.*, p. 11.
- 5) Aristotle, *The Art of Rhetoric*, The Loeb Classical Library, edited by John Henry Freese, William Heinemann Ltd., 1959, pp. 139-141.
- 6) Geoffrey Bush, *SHAKESPEARE AND THE NATURAL CONDITION*, Harvard University Press, Cambridge, 1956, p.4.
- 7) Graham Bradshaw, *Shakespeare's Scepticism*, The Harvester Press Limited, 1987, pp. 4-5.
- 8) Harold Jenkins, ed., *Hamlet*, The Arden Shakespeare, Methuen, 1982, note.
- 9) Harold Jenkins, *ibid.*, Introduction, p. 147, p. 153.
- 10) Bradshaw, *op. cit.*, p. 5.
- 11) Thucydides, *History of the Peloponnesian War*, translated by Richard Crawley, World Library, Inc., 1997, The Fifth Book, Chapter 17, paragraph 30.
- 12) Plato, Francis Macdonald Cornford, ed., *The Republic*, Oxford, 1961, p. 17.
- 13) Kenneth Muir, *op. cit.*, note.
- 14) Bradshaw, *op. cit.*, p. 234, p.245.
- 15) Bradshaw, *ibid.*, p. 248.
- 16) Bradshaw, *ibid.*, p. 233.
- 17) Kenneth Muir, *op. cit.*, note.
- 18) Bradshaw, *op. cit.*, pp. 235-236.
- 19) E. F. C. Ludowyk, *Macbeth*, The New Shakespeare text with notes, Cambridge, 1964, note.
- 20) Bradshaw, *op. cit.*, p. 236.
- 21) Bradshaw, *ibid.*, pp. 242-243.
- 22) Bradshaw, *ibid.*, p. 234.
- 23) E. F. C. Ludowyk, *op. cit.*, note.
- 24) Bradshaw, *op. cit.*, p. 238.
- 25) Bradshaw, *ibid.*, pp.250-251.

第十五章

『コリオレイナス』 *Coriolanus*

Coriolanus における不可解な台詞の1つは、*Coriolanus* が述べる“this unnatural scene”(Viii.184)という台詞であろう。このunnaturalの語に関しては多くの批評家がコメントしている。unnaturalは*Coriolanus*の中に他に2回出てくるが、*Coriolanus*が1回、*Menenius*が1回使用している。しかし前者と意味は全く異なっているのである。この小論において、unnaturalと判断する価値基準としてのnatureの意味を四大悲劇におけるnatureと比較検討することによって、考察し、更に*Coriolanus*の特異性の一端を明らかにしたい。

I

まず *Coriolanus* が this unnatural scene という言葉を述べるに至る経緯を見てみよう。*Coriolanus* は敵都 *Corioli* 攻略の功績により consul(執政官)に推される。一度は plebeians(平民)の票を獲得しながら、卑劣な tribunes(護民官)の扇動と挑発によって、consulの地位を棒に振り、更に国外追放の宣告を受ける。恩を仇で返された思いの *Coriolanus* は復讐の鬼と化し、かつての不具戴天の敵 *Volsces* の将 *Aufidius* と和を結び、*Rome* を殲滅せんと城門に迫る。*Rome* の最高指揮官 *Comminius* は講和を申し入れるが、拒否され、更に *Coriolanus* の盟友 *Menenius* が嘆願に赴くも聞き入れられず、*Rome* は最後の頼みを *Coriolanus* の家族に託す。そして母 *Volumnia* のなだめすかしての説得が巧を奏し、遂に *Coriolanus* は

O mother, mother !

What have you done? Behold, the heavens do ope,

The gods look down and this unnatural scene

They laugh at. O my mother, mother! O !

You have won a happy victory to Rome ;

But for your son, believe it, O, believe it,

Most dangerously you have with him prevail'd,

If not most mortal to him.

(V. iii. 182-189)

おお、母上、母上！

何という事をなされたのです。御覧なさい。天が口を開き、神々が見下ろし、この自然の条理に反する光景を見て笑っておられます。おお、母上、母上、あなたはローマには幸運な勝利をもたらしましたが、息子には、本当です、本当です、極めて危険な立場に追い詰められたのです。致命的とは言えないまでも。

と痛切きわまりない言葉を母にぶつけ、断腸の思いで、復讐を断念するのである。

因みに *Coriolanus* の材源である Plutarch の North 訳の中で、上記の引用に相当する箇所は ... oh mother, what have you done to me? And holding her hard by the right hande, oh mother, sayed he, you have wonne a happy victorie for your countrie, but mortall and unhappy for your sonne: となっていて¹⁾、Behold, the heavens do ope, / The gods look down, and this unnatural scene / They laugh at. が Shakespeare の創作であることがわかる。

Hermann Heuer は *From Plutarch to Shakespeare* において *Coriolanus* における nature という語の重要性を詳細に論じており、Plutarch の Amyot の仏訳と North の英訳とを比較考察し、*Coriolanus* における第5幕第3場に相当する North 訳に、unnatural とその対立概念としての nature 及び natural の語が頻出する点を指摘し、Shakespeare との関連性を論じているのである²⁾。And Nature so wrought with him, that the tears fell from his eyes,—preferring love and nature before the malice and calamitie of warres—and I maye not deferre to see the daye, either that my sonne be led prisoner in triumph by his naturall country men, or that he him self doe triumphe of them, and of his naturall countrie. と nature が多用されている例を実際に挙げ、更に No man living is more bounde to shewe him self thankfull in all partes and respectes then thy selfe: who so unnaturally sheweth all ingratitude. が重要であると述べている。

この naturally の語は仏訳では Greek の pikrod に相当する aspriment になっており、また MacCallum³⁾は Quite wrong. French means: Since you so bitterly pursue ingratitude. と脚注を施しているのであるが、H. Heuer はこの unnaturally の語によって North が Shakespeare への道を開いたと言っている。更に North の nature には the operative guiding force. の意味と the sacred order and ultimate appeal. の意味が内包されていると述べ、また Its negative reverse is the “unnatural” as opposed to the value implied in what is called “natural”.’ と言っている。これは当時の自然観、秩序観に言及したものである。

II

では H. Heuer の nature 論を作品に即して吟味してみよう。復讐を決意した Coriolanus は Comminius と Menenius の申し出を拒否し、「妻も、母も、子ども私は知らない」“wife, mother, child, I know not”(Vii.80). と言い、Rome との関係は無論、親子、夫婦の縁をも断とうと考える。しかし家族の姿を実際に目にする、心の動揺を禁じ得ないで、「無くなってしまえ、肉親の情など。肉親の絆や特権などみな断ち切れるがいい」“But out, affection ! / All bond and privilege of nature break !” (V. iii. 24-25) と言い、affection を断ち nature を否定するよう自らに叱咤する。親子の絆、夫婦の絆を断つことが nature に反すること、unnatural であることは明白である。

また息子 Martius の姿を見て、肉親の情抑え難く、次のように言う。

... and my young boy

Hath an aspect of intercession which

Great nature cries, ‘Deny not.’

(V. iii. 31-33)

それに幼い息子も哀願の顔つきで、

大自然が「拒否するな」と叫んでいるようだ。

Coriolanus は哀願している息子に対して冷淡な態度をとることが great nature に反することを十分に認識しているのである。

Volumnia たちが尋ねて来た理由は明白であり、言い出すであろう嘆願に耳

を貸さないことが unnatural であることも承知している故に、Volumnia が嘆願を言い出す前に予防線を張って、

Do not bid me

Dismiss my soldiers, or capitulate

Again with Rome's mechanics. Tell me not

Wherein I seem unnatural.

(V. iii. 83-84)

兵士の解散や、ローマの職人たちと再度

交渉せよと仰らないでください。拒否したからと

いって私が人情に反するようだとおっしゃらないでください。

と言うのである。nature 及び great nature の基本的な意味は natural feelings であり、unnatural はその natural feelings に反することであり、更にその背後には、H. Heuer が言う the operative guiding force 及び the sacred order and ultimate appeal の意味が内包されているのである。

また平民たちがかつて Rome に対して大きな功績のあった Coriolanus を処刑すべきだと主張したとき、Menenius がそのような忘恩の行為を、我が子を食う unnatural dam に譬えて反対したが、この unnatural も同じ意味に用いられている。Shakespeare の他の作品においても、このような natural、unnatural がしばしば使用されているのである。

Hamlet において、亡霊が Hamlet に対して、「やつの邪な極悪非道の人殺しの復讐をしてくれ」“Revenge his foul and most unnatural murder.” (I. v. 25) と兄であり、国王であった自分を毒殺し、何喰わぬ顔で玉座におさまっている Claudius に復讐せよと命じる。Murder という意外な言葉に驚く Hamlet に亡霊は更に「人殺しはいかに斟酌しても極悪であるが、これは極悪、奇怪、非道なものだ」“Murder most foul, as in the best it is; / But his most foul, strange, and unnatural,” (I.v.27-28) と unnatural の語を繰返す。Bernard Lott はこの unnatural に関して次のように注釈を施している。

Unnatural ... For Shakespeare's audience, this word was sharper in its meaning and implications than it is today. To do something 'unnatural' was

to act ‘against nature,’ i.e. to break away from the proper order of things in the universe (like stars moving out of their ‘spheres’). To be ‘natural’ was to have ‘natural’ feelings of kindness and sympathy towards others, and to lack these feelings was to be ‘unnatural’. In this sense the murder of a brother is supremely ‘unnatural’.⁴⁾

当時の自然観・秩序観を簡潔に説明している。

King Lear においては、恩を仇で返す Goneril、Regan の Lear に対する残酷な仕打ちは「人の道にもとる仕打ち」“unnatural dealings” (III.iii.2) であり、冷酷無慈悲な Goneril、Regan は「人情にもとる鬼婆」“unnatural hags” (II. iv. 280) と言われている。

Macbeth においても unnatural の語が頻出する。この劇における natural order は Macbeth 夫妻の unnatural な行為によって崩壊するのである。Macbeth は Duncan 王殺しを想像しただけでも、髪が逆立ち、「自然の習慣に反し」“against the use of nature” (I.iii.137) で、心臓が肋骨にぶつかるほど震える。それは Duncan 王殺害が自然の秩序、宇宙の秩序を乱す大罪であることを暗示する。

Lady Macbeth も弑逆を決意するとき、悪霊に祈念し、「人情という後悔の念」“compunctious visitings of nature” (I.v.45) を拒否する。凶行の前夜には天地に大異変が起り、その状況を Old Man は「自然に反することです」“’Tis unnatural.” (II.iv.10) と言う。

Duncan 王殺害後、Lady Macbeth は緊張と罪の意識のため精神に異常をきたす。「眠っていて、同時に起きている時の行動をし」“to receive at once the benefit of sleep, and do the effects of watching” (V. i. 10-13) しており、「目が開いている」“her eyes are open”のに「視覚は閉じている」“their sense is shut”という病状はまさに「自然における大混乱」“a great perturbation in nature” (Vi.9) である。Lady Macbeth の「自然にもとる行為が自然にもとる悩みを生む」“Unnatural deeds / Do breed unnatural troubles” (Vi.68-69) ののである。では this unnatural scene についてはどうであろうか。

III

H. Heuer は Behold, the heavens do ope, / The gods look down, and this unnatural scene / They laugh at. に関して a scene of universal, of metaphysical, significance. を暗示していると述べているだけである⁵⁾。彼の nature 論ではこの unnatural に込められている意味を説明し尽くしていないと思われる。

Dover Wilson はこの語に関して、The whole situation is unnatural : a Roman making war on Rome; a mother pleading with her son for mercy; a conqueror melted by a woman. と E. K. Chambers の注釈をそのまま借用している⁶⁾。しかし「ローマ人がローマに戦争をしかけること」について、Brian Vickers は追放された人間には故国に尽くすべき義務はないと言い、*Leviathan* から「追放された者はその国の構成員ではなく、追放した国の合法的な敵なのだから」という言葉を引用している⁷⁾。

また Maurice Charney は

If “unnatural scene” is a theatrical metaphor, it indicates the role Coriolanus has just rejected : it was “unnatural” for the defender of Rome to be acting as the destroyer of his native city. There is also a suggestion that “unnatural scene” may refer to Coriolanus’ present role of mercy: it is “unnatural” for the proud and godlike Coriolanus to be playing this “scene” of humble yielding.

と言っているが⁸⁾、しかしこれらの解釈によっても unnatural の意味を十分説明しているとは思われない。この unnatural の意味を解明するには Coriolanus の nature 観、それを育んだ Rome の nature 観を考察することが必要である。

Reuben Brower は Menenius の fable of the Belly and the members of the Body. に注目して、To the Elizabethan mind, the state, in more than a modern figurative sense, embodies a natural order. と述べ、当時の natural order の観点から、Coriolanus の nature を論じている⁹⁾。Roman nature と「彼の性格で仕方がないものをお前は彼の悪徳だと考えている」“What he cannot help in his nature, you account vice in him” (I.i.40-42). と評される Coriolanus の nature との

衝突を Shakespeare は drama にしており、Coriolanus は Great nature の声に抵抗しながらも、遂には彼の nature を曲げると言っている。

しかし Rome の nature と Coriolanus の nature との対立は Volumnia の「私の本性をいつわりもしましょう」「I would dissemble with my nature....”(III.ii.62) に端的に現れている。対立は現実的な policy の点においてだけで、本質的には同性質のものなのである。

Rome は軍国であり、したがってその構成員が身につけるべき最も重要な徳は勇気である。Plutarch は‘Now in those dayes, valliantnes was honoured in Rome above all other vertues : which they called *Virtus*, by the name of vertue selfe, as including in that general name, all other special vertues besides. So that *Virtus* in the Latin, was as much as valliantnes.’と言っており¹⁰⁾、*Coriolanus* においては Corioli 攻略に華々しい活躍をした Coriolanus を称えるとき、Comminius は、

It is held

That valour is the chiefest virtue and
most dignifies the haver.

(II.ii.83-85)

勇気は最高の美德であり、その徳を持つ者に
最高の栄誉を与えるとされている。

と言っている。勇猛果敢な Coriolanus は Rome 精神の体現者であって、Coriolanus の nature は Rome の nature そのものであると言えよう。そして Coriolanus の nature の形成に大きな影響を与えたのは母 Volumnia である。

Volumnia は Rome 精神に忠実な構成員であり、女性故のかなわぬ夢を Coriolanus に託してきたのである。或るとき、Volumnia は幼少より、Coriolanus が fame を得る可能性のあるところには喜んで危険を冒させたと自慢気に話す。そのために死ぬようなことがあればどうなさいますと言う Virgilia の言葉に

Then his good report should have been my son, I
therein would have found issue.

(I. iii. 20-21)

そのときはあの子の名声が我が子となり、それを
わが子と思ったことでしょう。

と Volumnia は平然と言っている。このように fame のため、good report のために nature を否定するのが Rome の本質である。Rome 精神の権化である Volumnia の教育によって Coriolanus は Rome 精神を身につけたのである。

Volumnia の嘆願に Coriolanus が Rome に対する復讐を断念する様を見て、Aufidius が脇台詞で「おまえの中で慈悲心と名誉心とが争いを始めたのでわしは嬉しいぞ」“I am glad thou hast set thy mercy and thy honour / At difference in thee.” (V. iii. 200-201) と言い、彼の弱みに乗ずる了見で内心喜ぶが、復讐の断念は honour に対する mercy の勝利であり、それはまた Roman nature に対する Coriolanus の human nature の勝利を意味する。更に Aufidius が「やつは本来の性格を曲げた」“He bowed his nature” (V. vi. 25). と言うが、それは Coriolanus が捨てた nature は Roman nature であり、human nature の勝利である。Coriolanus が Volumnia に屈服したとき、この意味で、G.R. Hibbard が Nature has triumphed over the monstrous. と言っているのであり¹¹⁾、the monstrous とは Roman nature を意味するのである。このようにローマの nature は L.C. Knights の言う wild nature¹²⁾ と深くかかわっている。

IV

this unnatural scene に関して、Philip Brockbank は Kenneth Muir と同様に、the ‘scene’ here in the tableau in which the mother unnaturally kneels to her son. と述べているが、更に—among those who might be supposed to find the scene “unnatural” are the gods whose graces Martius imitated under his mother’s tutelage —Mars and Jove. という指摘¹³⁾は重要である。つまり unnatural と判断する価値基準が Mars や Jove の nature 観に置かれており、それは The god of soldiers であり、Mars に忠実な Coriolanus の nature が本質的に wild nature であることを意味するのである。

Philip Brockbank が

The effort to be unnatural is... essential to that kind of integrity which

the service of the ‘god of soldiers’ demands: Martius had reviled those who fled from the Volscians as ‘souls of geese, / That bear the shapes of men’, for no yielder can be a man.

と言っているように¹⁴⁾、軍人が職務に忠実であればあるほど human nature に反する故に unnatural であるが、Roman nature に判断の価値基準を置くと、mercy を施すことが unnatural なのである。*King Lear* における Edmund の nature を思い出させる。

Edmund が己の goddess として呼びかける“Nature” (I.ii.1-22) は弱肉強食、適者生存の世界における nature であり、human nature に対する wild nature である。そして Cordelia の命を救うことが「己れの自然に反して」“despite of mine nature” (V.iii.243) と言うとき、Edmund の信奉する nature が wild nature であることが一層明らかになる。

Coriolanus にとって臆病者、敗者は a man ではあり得ない。臆病で、戦闘も終らないうちから略奪を始める plebeians に対する軽蔑は Coriolanus の Roman nature への信奉から来ているのである。consulship 問題で、Volumnia が plebeians との和解を望むとき、Coriolanus は「母上は私の本性に背いたことをさせたいのですか」“Would you have me / False to my nature?” (III. ii 14-15) と言うように、plebeians との妥協は彼の nature に反することであり、それはまた Roman nature に反することでもある。

抵抗する Coriolanus に、

At thy choice then:

To beg of thee it is my more dishonour
Than thou of them. Come all to ruin; let
Thy mother rather feel thy pride than fear
Thy dangerous stoutness, for I mock at death
With as big heart as thou. Do as thou list.
Thy valiantness was mine, thou suck’st it from me,
But owe thy pride thyself.

(III. ii. 123-130)

それなら、勝手になさい。
 そなたにそれを頼むのは、そなたが平民に頼む以上に
 私の恥です。すべてが破滅してしまうがいい。
 おまえの危険な頑固一徹を心配するよりは、母に
 おまえの誇りを実感させておくれ。私だって
 お前と同様肝っ玉がすわっている、死などなんともない。
 好きなようになさい。おまえの勇気は私のもの、
 それは私から吸い取ったもの。でもその誇りを
 もち続けなさい。

と Volumnia は恩を着せ、勝手にするがいいと、捨ぜりふ的な言葉を吐き、
affection すなわち *nature* を拒否するとの脅しによって、息子から譲歩を勝ち
 取るのである。

同じように第5幕第3場においても、Coriolanus を屈服させ、復讐を断念
 させたのは、

Come, let us go:

This fellow had a Volscian to his mother ;
 His wife is in Corioles, and his child
 Like him by chance. Yet give us our dispatch :
 I am husht until our city be a be fire,
 And then I'll speak a little.

(V. iii. 177-182)

さあ、帰りましょう。この子の母はヴォルサイ人です。
 その妻はコリオライにいます。この子があれに
 偶然似ているだけです。でも帰りましょう。
 ローマの市が火に包まれるまで私は黙っています。
 其の時になったら、少しはものを申しましょう。

と親子の縁を断ち、*nature* を拒否するという Volumnia の言葉である。そして
 Mars に忠実であるべき軍人である Coriolanus が Roman *nature* に背き、human
nature に従って、*mercy* を施すのである。それ故に the gods が嘲笑するのである。

かつて Corioli 攻略の功により、Comminius が戦利品の十分の一を与えると
言ったが、Coriolanus はその申し出を固辞し、代りに以前 Corioli の宿で世話
になった男が捕虜になっているので釈放して欲しいと願い出るとき、

The gods begin to mock me: I, that now
Refus'd most princely gifts, am bound to beg
Of my lord general.

(I.ix.78-80)

神々は私をからかいはじめられた。

この上ない立派な贈り物をお断りしましたのに、

今度は私が將軍をお願いしなければなりません。

と言う。この mercy を笑う神々は this unnatural scene を嘲笑する神々なのである。

* * * * *

Macbeth における nature に関しては、L.C. Knights が There is no vague philosophy of nature. と言っているように¹⁵⁾、natural order は *Macbeth* 夫妻の unnatural な行為によって崩壊するが、*Macbeth* の死と共に order は回復する。*Macbeth* には当時の natural order 観がそのまま取り入れられている。

King Lear において、Edmund の nature が wild nature であることは前に見たが、Lear の nature にも Shakespeare は我々に疑問を抱かせる。Lear が己れの意に添わない Cordelia を「自然も自分のものだと思えるのも恥ずかしいような奴」“a wretch whom Nature is ashamed / Almost t'acknowledge hers.” (I.i.215-216) と呼ぶとき、Lear の nature 観は自己中心的な nature 観であることを知る。

Othello において、Brabantio は娘 Desdemona と Othello との結婚は「自然の情に逆らった」“in spite of nature” (I.iii.97) ことであると考え、「自然のあらゆる掟に逆らっている」“against all rules of nature” (I.iii.102) として許そうとしない。Brabantio は nature を社会の慣習と同一視しているのである。それは体制側に都合のよい nature 観であり、socialized nature と呼ぶべきものである。

Coriolanus の世界は不合理な世界である。Michael Long が言うように¹⁶⁾、

Shakespeare にとって Rome は dehumanized or denatured society であり、Coriolanus に対する母 Volumnia の態度に端的に見られるように、basic kinds of affection を、つまり nature を拒否する社会である。Shakespeare は、Volumnia が consulship 問題で plebeians との妥協を求めたときと同様に、affection を拒否することによって、最も unnatural な役を演じ、Coriolanus の方が mercy を施し、最も natural な行為を示す、まさにそのときに、“this unnatural scene” と主人公に言わせることによって、Rome が unnatural society であり、Roman nature が wild nature であることを強調し、*Othello* における socialized nature、*King Lear* における Lear の nature 観と同様に、mercy を嘲笑する the gods が君臨する Rome の nature 観、natural order そのものに批判の目を向けているのである。

テキストの引用は Philip Brockbank, ed., *Coriolanus*, The Arden Shakespeare, Methuen&Co. Ltd., 1976.による。

- 1) Geoffrey Bullough, ed., *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*, Vol. 5, Routledge and Kegan Paul, 1964, p. 541.
- 2) Hermann Heuer, *Shakespeare Survey* 10, Cambridge University Press, 1967, pp. 50-59.
- 3) Mungo MacCallum, *Shakespeare's Roman Plays*, Macmillan, 1967, p. 640.
- 4) Bernard Lott, ed., *Hamlet*, Longman, 1970, note.
- 5) Hermann Heuer; *op. cit.*, p. 55.
- 6) J. D. Wilson, ed., *Coriolanus*, (The New Shakespeare), Cambridge, 1961, note.
- 7) Brian Vickers, *Coriolanus*, Edward Arnold, 1976, p. 39.
- 8) Maurice Charney, *Shakespeare's Roman Plays*, Harvard University Press, 1961, p.176
- 9) Reuben Brower, ed., *Coriolanus*, The New American Library, New York and Toronto, pp. xxxv-xxxvi.
- 10) Geoffrey Bullough, *op. cit.*, p. 506.
- 11) G. R. Hibbard, ed., *Coriolanus*, Penguin Books, 1967, p. 46.
- 12) L. C. Knights, *Some Shakespearean Themes and An Approach to Hamlet*, Penguin Books, 1966, p. 113.
- 13) Philip Brockbank, ed., *Coriolanus*, Methuen & Co. Ltd., 1976, p. 59.
- 14) Philip Brockbank, *ibid.*, p. 58.
- 15) L. C. Knights, *op. cit.*, p. 113.
- 16) Michael Long, *The Unnatural Scene*, Methuen & Co. Ltd., 1976, p. 60.

第十六章

『あらし』 *The Tempest*

Tillyard¹⁾は *Shakespeare's Last Plays* において、*Cymbeline*、*The Winter's Tale*、*The Tempest* の3作品に関する批評家の解釈がいかにかに相違していても、この3作品には相互に緊密な関連性があるという点では意見の一致を見ているが、今日でもこの主張は一般に認められ、更に **regeneration** が共通のテーマであり、*The Tempest* が最も成功しているという評価がある。

これに対して Zimardon²⁾はこのような見解は全くの誤りであると断言し、

Our revels now are ended. These our actors,
As I foretold you, were all spirits, and
Are melted into air, into thin air :
And, like the baseless fabric of this vision,
The cloud-capp'd towers, the gorgeous palaces,
The solemn temples, the great globe itself,
Yea, all which it inherit, shall dissolve,
And, like this insubstantial pageant faded,
Leave not a rack behind. We are such stuff
As dreams are made on; and our little life
Is rounded with a sleep.

(IV. i. 148-158)

余興はもう終わった。いまの役者たちは
前に言った通りに、みんな妖精で、
大気に、淡い大気の中に溶け込んでしまった。
そして礎のないこの幻の建物のように、雲を
頂く塔も、豪華な宮殿、荘厳な寺院、大地球
そのものも、そう、地球にあるすべてのものも
溶けて、そして消えてしまった実体のない
余興のように、一片の雲も残さない。われわれは

夢と同じ材料でできていて、われわれのささやかな
一生は眠りで終わる。

の箇所を引用して、この台詞と epilogue は主調であり、*The Last Plays* が主題
としていると考えられる triumphant harmony と齟齬をきたす点であると言い、
また

Prospero tells us that they are airy nothing, and as they vanish, he warns, all
the endeavors of men at creation, palaces, cloud-capped towers, solemn temples
are doomed to fade away. It is significant too that it is the recollection of Caliban,
the threat of disorder and the coming of chaos, that drives the masque into thin
air.³⁾と述べている。創造しようとする人間の努力の結果はすべてこの世から
消え去る運命であることを Prospero が語っているのであり、仮面劇を雲散霧
消させるものが無秩序の脅威、カオスの到来である Caliban を思い出すこと
だということは重大だというものである。つまり *The Tempest* は pessimism が
濃厚な作品であり、そこには Caliban の存在が絡んでいるのである。いやそ
れ以上の人物の存在がある。

確かに *The Tempest* は *The Winter's Tale* と同様に、罪や苦難が「和解」に終
る劇であり、汚れを知らない若者たちが結ばれることにより、その親たちの
罪が贖われ、絆が強められる。また *Cymbeline* において Iago の悻をもつ Iachimo
も悔い改め、悪人の Queen と息子の Cloten は死に、最後には幸福と平和が
舞台にみなぎる。*The Winter's Tale* においても、ならず者 Autolycus も最後
にはささやかながら良心を示し、劇はめでたく幕を閉じる。然るに *The Tempest*
では最後まで決して改心することのない人物が登場する。ここに他の 2 作品
との大きな相異があるように思われる。

この小論では nature との関連から、この問題について考察し、*The Tempest*
の特質の一端に触れてみようと思う。

I

初めに *Cymbeline* における nature 観を見てみよう。*Cymbeline* 王に追放さ
れた元家臣 Belarius がこれを恨み、その時 2 人の王子 Guiderius と Arviragus

を誘拐し、20年の間、Wales の山中で狩猟生活を営んできたが、ローマ軍がイギリスに攻め込んできたため戦争が差し迫っているのに気づき、Belarius は2人に逃げるよう説得しようとするが、勇敢にもイギリスのために戦うと主張する Guiderius と Arviragus の高貴さと勇気に血筋は争えないと感嘆して、

O thou goddess,
Thou divine Nature ; thou thyself thou blazon'st
In these two princely boys : they are as gentle
As zephyrs blowing below the violet,
Not wagging his sweet head ; and yet, as rough,
(Their royal blood enchaf'd) as the rud'st wind
That by the top doth take the mountain pine
And make him stoop to th' vale. 'Tis wonder
That an invisible instinct should frame them
To royalty unlearn'd, honour untaught,
Civility not seen from other, valour
That wildly grows in them, but yields a crop
As if it had been sow'd.

(IV. ii. 169-181)

おお、女神よ、
聖なる自然の女神よ、あなたはこの2人の王子のなかにあなた自身を示しておられる。彼らは、スマイレの下を吹きぬけながら、やさしい頭さえ揺すらないその風のようにやさしい。けれども王家の血筋が激すれば、山の松の頭をつかまえて、谷に向かって無理やりにお辞儀させる暴風のように荒々しくなる。不思議だ、目に見えない本能によって、教えられないのに、王子の風格を示し、名誉を重んじ、人に習わないのに、礼儀を身につけ、野生に育っているのに、種をまいて育てたように身につける勇気を備えているのは。

と自然の女神を称賛する。2人の王子の優しさ、芯の強さ、立派な風格、名誉を重んじ、ひとりでに礼儀を身に付けている。これらはみな自然の女神のなせる業と言うのである。また Cymbeline 王に再会した際、Guiderius が真に王子である証拠として、その birthmark に言及する時に Belarius は

This is he,
Who hath upon him still that natural stamp :
It was wise Nature's end, in the donation
To be his evidence now.

(V. v. 366-369)

それはこの方です、いまもその生まれながらの刻印をお持ちです。その刻印を与えたとき、いま証拠にすることが賢明な自然の女神の目的だったのです。

と述べているが、Edgar C. Knowlton が言っているように、これらの nature は神格された nature である。Knowlton⁴⁾は“Nature and Shakespeare”という論文で、当時の optimistic な nature 観を要約しているが、その要約の初めに、

God is good, and so is nature, the divine agent, His agent. Man must follow
the law of nature, which is the same as the law of reason.

と述べている。しかし *The Tempest* にはこのような意味の nature という語が一度も用いられていないのである。*The Winter's Tale* ではどうであろうか。

変装した Bohemia の王 Polixenes と、実は Sicilia の王女であり、荒野に捨てられたが、羊飼いに拾われ、今では立派に成長した Perdita との間で、Nature-Art 問答が交わされる。まず Perdita は毛刈り祭りの季節でもっとも美しい花はカーネーションや「自然の私生児」“nature's bastards” (IV.iv.83) と呼ばれる縞セキチクであるが、私どもの田舎の庭には生えていないし、そのような花は一茎だって欲しくないと言う。その理由を Polixenes に聞かれると Perdita はその理由を次のように言う。

For I have heard it said
There is an art which, in their piedness, shares
with great creating nature.

(IV.iv.86-88)

その斑模様には偉大な造化の自然に人工が
加えられているということを聞いていますので。
それに対して Polixenes は次のように彼の論理を展開する。

Say there be;

Yet nature is made better by no mean
But nature makes that mean : so, over that art,
Which you say adds to nature, is an art
That nature makes. You see, sweet maid, we marry
A gentler scion to the wildest stock,
And make conceive a bark of baser kind
By bud of nobler race. This is an art
Which does mend nature —change it rather —but
The art itself is nature.

(IV. iv. 88-97)

そうかもしれない。
けれども自然がその手段を造らなければ、
自然はよくなる。だから自然に加えられると
あなたの言うその人工を自然が生み出す技が支配する。
あのね、娘さん、我々は上品な枝を野生の台木と
結婚させて、高貴な血筋の芽で卑しい木に子を宿らせる
ことがある。これが自然を改良する、いやむしろ
造りかえる技であるが、その技そのものが自然である。

このように the child of nature である Perdita は great creating nature を讃美し、art を否定する。それに反して、世の有様をつぶさに観察してきた大人の Polixenes はたんなる素朴な nature の讃美者ではなく、art を弁護し、nature と art とは対立概念ではなく、相補うべきもの、調和すべきものと考えているのである。Knowlton⁵⁾はこの nature-art 問答に関して、Perdita の意見は彼女の性格にふさわしい考え方で、正しいのであるが、Shakespeare は Polixenes

の考えに近いと言っている。そしてこの Polixenes の nature 観、art 観が *The Tempest* に引継がれていると思われる。

II

では *The Tempest* の nature について見てみよう。Caliban の教育・躾に対する Prospero の失望の言葉は *The Winter's Tale* における Perdita と Polixenes との間に交わされる nature・art 問答と同様に注目すべき事柄である。Prospero は 2 人の婚約を祝うため妖精たちの演じる仮面劇を娘 Miranda と Ferdinand に見せているが、その最中に Caliban たちが自分の命を狙う企みを突然思い出して、

A devil, a born devil, on whose nature
Nurture can never stick ; on whom my pains,
Humanely taken, all, all lost, quite lost ;
And as with age his body uglier grows,
So his mind cankers.

(IV.i.188-192)

悪魔だ、生まれながらの悪魔だ、自然の性質には
どう教育しても身につかない。哀れに思っ
たわしの苦労もなにかも無駄に、全く無駄に
なってしまった。
そしてやつは身体は年とともに醜くなり、また心も
腐っていく。

と腹立たしそうに言う。これが Caliban の nature である。Kermode⁶⁾が Arden Shakespeare の注で指摘しているように、この nature のもつ意味は複雑であり、Prospero の art と Providential Nature を表わす Grace と対立する意味を有し、Caliban の innate character だけでなく graceless and fallen life を意味している。nurture は Miranda に Prospero が施したものであり、それが Miranda の場合に成功しているのは Miranda の nature が Caliban の nature と異質のものであるからである。nurture は広い意味での education であり、learning は The

Fall を贖う方法であり、nature の欠陥を補うものとする考え方である。これはある意味で Polixenes の nature-art 思想の継承であると言えよう。Murry⁷⁾が言うように Perdita が the child of nature であり、Miranda が the child of art と言うのは間違いで、ただ *The Tempest* において人間が人間本来の姿 their true selves になるには nature だけでなく nurture をも必要としているということである。

また Murry⁸⁾は masque を Prospero が突然中止する気になるのは己れの命を狙う Caliban の陰謀を思い出したからというより the nature on which nurture will never stick. の認識だという指摘は重要である。

この nature 観が *The Tempest* の底流にある。Kermode⁹⁾が we see that nature is not, in *The Tempest*, defined with the simple-minded clarity of a philosophical proposition. と言っているように、素朴な nature 讚美でなく、すでにこの nature 観は Shakespeare の悲劇で見られたものである。

King Lear において Goneril と Regan に酷い仕打ちを受けた Lear の

Then let them anatomize Regan, see what breeds
about her heart. Is there any cause in nature that make
these hard hearts?

(III.vi.81-82)

ではリーガンを解剖してもらおう。あれの心臓に何が
生えているか見てもらおう。自然にこのような堅い心臓を
造り出す何か原因があるのだろうか。

と言う nature に向けた不信の言葉を想起させる。

The Tempest においても素朴な nature 観が揶揄されている。息子 Ferdinand が死んだものと考えて、悲嘆にくれる Naples 王 Alonzo を慰めるつもりで廷臣の Gonzalo は彼の思い描くユートピアについて

I' th' commonwealth I would by contraries
Execute all things ; for no kind of traffic
Would I admit ; no name of magistrate ;
Letters should not be known ; riches, poverty,

And use of service, none ; contract, succession,
 Bourn, bound of land, tilth, vineyard, none ;
 No use of metal, corn, or wine, or oil;
 No occupation ; all men idle, all ;
 And women too, but innocent and pure :
 No sovereignty ;—

(II. i. 143-152)

その国家では全てのことを逆さまに行いたいと
 思います。どんな取引も認めません。役人の
 肩書きも認めません。学問も教えず、裕福も
 貧しさも、それ故奉公も認めません。契約、相続、
 境界、地所も、畑も、葡萄畑もなくし、
 金属、穀物、酒、油等の使用も認めません。
 職業もなくし、男はみんな仕事をせず、
 女も同様ですが、無垢で純真。
 君主もなく—

と語り、更に

All things in common Nature should produce
 Without sweat or endeavour : treason, felony,
 Sword, pike, knife, gun, or need of any engine,
 Would I not have ; but Nature should bring forth,
 Of it own kind, all foison, all abundance,
 To feed my innocent people.

(II.i.155-160)

共用するすべてのものは汗を流したり働かなくても
 造化の自然が造り出してくれます。反逆も、重罪もなく
 剣、槍、短刀、鉄砲や、他のいかなる危険な道具も
 必要ありません。大自然がひとりでに五穀を豊かに
 実らせ、わが無垢の民を養ってくれます。

と述べている。田園生活において、自然が豊かな産物を造り出して無欲な、無垢の民を養ってくれると自然を賛美している。民が他の民と食料を巡って争うこともない。したがって戦争の武器など必要としないのである。

これに対して Antonio と Sebastian は一つ一つコメントを発し、Gonzalo の自然賛美を茶化すのである。しかし Gonzalo は理想郷の実現など夢物語にすぎないと知りつつ言っているのである。彼は野心家の Antonio が、信頼して政治を任せ魔術に耽っていた兄の Prospero を娘と共に追放した事実を目撃し、また権謀術数渦巻く宮廷という現実の醜悪さの中で生きてきた宮廷人である。ここで Shakespeare は理想郷の建設を不可能に、また夢物語にし、natural order を崩壊させるのは Antonio や Sebastian などの evil nature であることを示唆しているのである。

III

Milan の大公であった Prospero は弟の Antonio に大公の位を奪われ、娘 Miranda と 2 人、鼠も逃げ出すぼろ舟に乗せられ、追放されてこの島にたどり着いた。それ以来、復讐の機会が訪れるのを待っていたが、ついにその時が到来し、仇敵がすべて Prospero の手中にあり、復讐も意のままとなる。Naples 王 Alonzo も、その弟 Sebastian も Antonio も気が狂っており、従者たちはその有様を見て、嘆き悲しんでいる。まさにその時に Prospero の心に大きな変化が起るのである。妖精である Ariel が人間である Prospero に向かって、

His (= Gonzalo) tears runs down his beard, like winter's drops
From eaves of reeds. Your charm so strongly works 'em,
That if you now beheld them, your affections
Would become tender.

(V. i. 16-19)

その方の涙が、まるで瓦葺の軒から冬の雨が滴り落ちるように、その髭から滴り落ちておりました。あなたの魔法が大変強く働きますので、彼らをご覧になれば、あなたのお気持ちが

和らぐことでしょう。

と言う。この言葉に Prospero は深く心を動かされたかのように、“Dost thou think so?” (Vi.19)と問う。すると Ariel が「そう思うでしょう、私が人間でしたら」“Mine would, sir, were I human.” (Vi.20)と答える。これを聞いた Prospero は

And mine shall.

Hast thou, which art but air, a touch, a feeling
Of their afflictions, and shall not myself,
One of their kind, that relish all as sharply
Passion as they, be kindlier mov'd than thou art?
Though with their high wrongs I am struck to th' quick,
Yet with my nobler reason 'gainst my fury
Do I take part: the rarer action is
In virtue than in vengeance : they being penitent,
The sole drift of my purpose doth extend
Not a frown further. Go release them, Ariel :
My charms I'll break, their senses I'll restore.
And they shall be themselves.

(Vi.20-32)

私もそうだろう。

空気にすぎないお前があ連中の苦しみを感じているのに
同じ人間であり、悲しみを連中と同様鋭く感じる私が
お前よりも同情心を動かされないことがあろうか。
彼らのひどい仕打ちは骨身にこたえているが、
私は怒りを抑えて、より高貴な理性の側につく。
復讐より徳を施すほうが立派な行いだ。彼らは後悔して
いるのであれば、唯一の私の向かう道はもうしかめ面を
しないことだ。エーリアル、彼らを放免してやれ。
私は魔法を解いて、正気に戻してやろう。元通りになろう。

と言う。

最後の themselves という語について Murry¹⁰⁾は“all of us ourselves, / When no man was his own”(IV.i.212-213). という Gonzalo の言葉を引き合いに出して、not what they were, what they should be. と述べているが、妖精に過ぎない Ariel の言葉に Prospero は同胞たる人間に対して怒りを抑え、より高貴な理性の命にしたがって、復讐より慈悲こそ己れのとるべき道であり、それが罪を犯した人間を本来のあるべき人間に立ち戻らせることが出来ると考える。そして悔い改めている Alonso を Prospero は心から許すのである。しかし Sebastian と Antonio に関してはどうか。

Antonio はこの島に漂着してからも Sebastian を唆して兄王 Alonso を殺させようとする。しかし Prospero の art がそれを未然に防ぐのである。その陰謀を暴露するのは控えようという Prospero の言葉を耳にしても、Sebastian は「悪魔が彼の中でしゃべっているのだ」“The devil speaks in him”(V. i. 130). という言葉を独り呟き、改悛の情を示す気配などさらさないのである。そしてまた Antonio に対して Prospero は

You, brother mine, that entertain'd ambition,
Expelled remorse and nature.

(V. i. 74-76)

お前、野心を抱き、あわれみと自然の情を
捨ててしまった私の弟。

と厳しい言葉を吐き、自分を追放し、また Sebastian を唆して、兄王を殺させようとした Antonio の人間性にもとる行為を非難するのである。その人物が実弟ということが Prospero を pessimism に追いやるのである。更に Prospero は「私はお前を許す、お前は自然の情に反しているが」“I do forgive thee, / Unnatural though thou art.” (Vi.78-79)と 言う。Prospero の心には複雑なものがあり、nature とこの unnatural には深い意味が込められているのである。

As You Like It において、Oliver は人望のある弟 Orlando を妬んで殺そうと Arden の森まで追いかけて来たが、眠り込んでしまい、ライオンに襲われかけた時、Orlando に救われる。「この上なく人の道にもとった」“the most

unnatural ”(IV.iii.122)人間であった Oliver は心から改悛する。これは revenge よりも気高い kindness が、また「(復讐の)絶好の機会」just occasion よりも、もっと強い nature が Orlando をライオンに立ち向かわせ、倒させたのである。その Orlando の nature に深く感動し、Oliver は彼本来の nature を取り戻すのである。この点が喜劇 *As You Like It* と *The Tempest* との相異であるように思われる。

The Tempest における Antonio は Prospero の慈悲にもかかわらず、unnatural の域を抜け出すことがない。そのような Antonio に対する最後の

For you, most wicked sir, whom to call brother
 Would even infect my mouth, I do forgive
 Thy rankest fault.

(Vi.130-132)

弟と呼ぶのも口が汚れる悪党のお前については
 お前の極悪な罪も許そう。

という Prospero の言葉には心からの許しは感じられない。一方 Antonio はただ反発するだけで口も利こうとしない。将棋を指している Ferdinand と Miranda を見て、Sebastian でさえ「この上ない奇跡だ」“A most high miracle!”(IV.i.177)と人間らしい驚きの声を発するのだが、Antonio の沈黙には、事が発覚した際に開き直る Iago を想起させる。

Antonio は最も大切なもの、人間を人間たらしめている nature をかなぐり捨てた unnatural な人間である。*King Lear* において Goneril と Regan の父王 Lear に対する冷酷な仕打ちは「人情にもとる仕打ち」“unnatural dealing”(III. iii. 1-2)であり、残酷な2人はまた「人情にもとる鬼婆」“unnatural hags”(II. iv. 276)と呼ばれる。*Macbeth* においても、Macbeth は Duncan 王殺害を想像しただけで「自然の習慣に反して」“against the use of nature”(I. i. 137)心臓が肋骨にぶつかる。Lady Macbeth は罪の意識から夢遊病になる。「眼は開いている」“her eyes are open”(V. i.23)のに、「視力はふさがっている」“their sense is shut”(V. i. 24)のである。それは「自然における大混乱」“a great perturbation in nature”(V. i. 9)であり、「不自然な行為が不自然な悩みを生じさせる」

“unnatural deeds / Do breed unnatural troubles.”(V. i. 68-69)のである。

Hamlet においても Claudius の兄殺しは「邪な極悪非道の人殺し」“foul and most unnatural murder”(I.v.25)であり、「極悪、奇怪、非道」“most foul, strange, and unnatural”(I. v. 28)である。Antonio も Sebastian も Claudius と同じ罪を犯したかも知れないのである。

Othello においても、嫉妬に狂った Othello が愛する故に殺すのだと言われたとき、Desdemona は「愛しているから殺されるなんて自然の条理に反します」“That death’s unnatural that kills for loving”(V. ii. 42).と叫ぶ。このように nature に反すること、unnatural なことは Shakespeare において重要な意味を有しているのである。無垢な Miranda が Alonzo 一行を見て、「人間はなんて美しいのでしょうか。素晴らしい新世界です」“How beauteous mankind is! Brave new world”(IV.i.183)と感嘆し、驚嘆の目を輝かす。これに対してこの世に厳然たる悪の存在を知る Prospero は「お前にとって新しいのだ」“It’s new to thee”(IV.i.184).とそっけなく言い放つ。Prospero は white magic という art によって嵐を巻き起こすことも出来、大自然を思うままに操る。しかし Anne Barton¹¹⁾は Prospero の art について極めて悲観的な言葉で次のように言っている。

What his art cannot do is the thing which ultimately matters most ; he can never change the nature and inclinations of the human heart.... He has no way of forcing the men who plot against him to be good. Caliban cannot be civilized or made grateful.

art によって自然界をも自由に操ることができるのに、人間の邪悪な本性を変えることができないのである。ただ Caliban は魔女の子であるということが関係している。教化できないことも、感謝の念を植えつけることが困難なものも致し方ないように思われる。

Cymbeline や *The Winter’s Tale* では罪や苦難は神の摂理と登場人物の改悛によって最後には浄化され、和解が実現する。しかし *The Tempest* では Prospero は art によって Caliban の nature も Antonio の nature も良い方へ変えることが出来ない。そして Antonio は文明に毒されている分一層始末が悪いと言えよ

う。神の恩寵を求める言葉ではないが、Caliban の「許しを求めよう」“seek for grace”(V. i. 295) という言葉にはまだ救いがあるように思われる。

The Tempest の基調は pessimism である。ある点では Shakespeare の最大悲劇とされる *King Lear* が *The Tempest* よりも観客に希望を与えるのではないだろうか。Lear は Poor Tom に変装している裸の Edgar を見て、「死刑だ、裏切り者、親不孝な娘以外に誰も人をこんなに惨めな姿にするはずがない」

“Death, traitor ! nothing could have subdu'd nature / To such a lowness but his unkind daughters.” (II. iv. 70-71) と言ったが、ruined piece of nature であり、また abused nature である Lear には「2人の娘が人情に世の呪いをもたらしたが、その呪いから人情を贖われるもう1人の娘」“one daughter, / Who redeems nature from the general curse / Which twain have twain have brought her to.” (IV.vi.210-212) がいる。

Kermode¹²⁾ は Caliban は the natural man であり、文明人を測る尺度であると言う。Prospero が妖精に奇怪な姿をさせ、banquet を Alonzo 一行の前に持って行かせる。この妖精たちを見て Gonzalo が

For, certes, these are people of the island,—
Who, though they are of monstrous shape, yet, note,
Their manners are more gentle, kind, than of
Our human generation you shall find
Many, nay, almost any.

(III. iii. 30-34)

確かに、あの人たちは島の住民ですから。
あの人たちは奇怪な姿をしていますが、その物腰は
われわれ人間、多くの者、いや、どの人よりも
品があり、優しいのです。

と言うと、Prospero は傍白で次のように言う。

Honest lord,
Thou hast said well ; for some of you there present
Are worse than devils.

(III.iii.34-36)

誠実な人よ、あなたはよくぞ言われた。そこにいる
者たちの中に悪魔以上のやつがいるからな。

some of you は勿論 Antonio と Sebastian である。Antonio は野心家で、決して改心などする人間ではなく、隙さえあれば、悪を企む人間であり、善意など少しも持ち合わせない。最も固い絆で結ばれるべき兄弟という間柄であるのに、信頼して国政を任され、それをいいことに裏切るのである。肉親に対する失望、人間不信が *unnatural* という言葉に込められているのである。Shakespeare は the natural man の救済には Grace が必要であることを示唆しているように思われる。

テキストの引用は Frank Kermode, ed., *The Tempest* (Arden Shakespeare) による。

- 1) E. M. W. Tillyard, *Shakespeare's Last Plays*, Chatto and Windus, 1958, p.1.
- 2) Rose Abdelnour Zimbardo, Form and Disorder in *The Tempest*, (Casebook Series: *The Tempest*, edited by D. J. Palmer), Macmillan, 1979, pp.232-233.
- 3) R. A. Zimbardo, *ibid.*, p.243.
- 4) Edgar C. Knowlton, "Nature and Shakespeare", PMLA., LI, 1936, p.742.
- 5) Edgar C. Knowlton, *ibid.*, p. 732.
- 6) Frank Kermode, ed., *The Tempest* (Arden Shakespeare), Methuen & Co. Ltd., 1962, note.
- 7) John Middleton Murry, *Shakespeare*, Jonathan Cape, rep., 1954, p.396.
- 8) John Middleton Murry, *ibid.*, p.496.
- 9) F. Kermode, *op. cit.*, Introduction, xxxviii.
- 10) J. M. Murry, *op. cit.*, p.395.
- 11) Anne Barton, ed., *The Tempest*, Penguin Books, rpt., 1979, Introduction, p. 28.
- 12) F. Kermode, *op. cit.*, Introduction, p. xxxviii.